

群馬県前橋市

宮田遺跡

1996

宮田遺跡調査会

群馬県前橋市

宮田遺跡

1996

宮田遺跡調査会

序

前橋市東部の利根川左岸の地域は、数多くの遺跡が存在しており、群馬県の原始・古代を考える上で非常に重要な地域です。この度、この地に道路清掃車両の車庫が建設されることになりましたが、その予定地が弥生時代の集落跡として知られる宮田遺跡の一角であるため、当調査会が埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

その結果、奈良・平安時代を中心とした竪穴住居14軒など、多くの遺構を発見いたしました。ここにその調査報告書を刊行する運びとなりましたが、この成果が広く活用され地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業を経て報告書の刊行に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました群馬県土木部道路維持課、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、山武考古学研究所、そして、発掘・整理の作業にあたられた多くの方々に厚く御礼申し上げます、序といたします。

平成8年3月

宮田遺跡調査会

会長 林 弘二

例 言

1. 本書は、道路清掃車両車庫等施設建設に伴う宮田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡は群馬県前橋市富田町587-1・588-1他に所在する。
3. 事前の群馬県教育委員会による試掘調査から、古墳時代から平安時代にかけての遺構所在が判明したため、施設建設予定地である1,260㎡の面積において本調査を実施した。本調査の実施期間は平成7年4月17日から同年5月31日までを要した。
4. 発掘調査は群馬県土木部・前橋市教育委員会・群馬県教育委員会の三者から組織された宮田遺跡調査会が調査主体となり、実際の調査は山武考古学研究所に委託された。
5. 本書の執筆・編集は群馬県教育委員会及び前橋市教育委員会の指導のもとに山武考古学研究所が実施した。執筆の分担は以下の通りである。

I …………… 齊藤和之（群馬県教育委員会文化財保護課）

II～VI…………… 武部喜充（山武考古学研究所所員）

また、整理及び報告書作成で石井照子・岡田うめ・中平雪子・萩原真理子・矢島博文・矢島房江の協力を得た。

6. 発掘調査に係わる図面・写真などの記録資料及び出土遺物のすべては前橋市教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査の実施から報告書刊行に至るまでに、下記の諸氏及び諸機関に御協力を賜り、記して感謝の意を表す次第です。

松本義行（地権者）・群馬県立前橋東高等学校及び同校地理歴史研究部（顧問 米澤育夫）

群馬県土木部道路維持課

凡 例

1. 第1図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図『前橋』、第2図は前橋市都市計画課発行の1万分の1原形図『6の3』、第3図は前橋市都市計画課発行の2,500分の1原形図『24番』をそれぞれ使用した。
2. 遺構挿図中に使用した方位は座標北を示す。また土層図及び断面図の横に記した数値は海拔標高である。
3. 住居跡説明文中の規模は住居跡掘り込み下端幅の数値である。出土個体総数は細片でも一個体と認められた場合は点数として勘定した。
4. 遺構・遺物実測図の縮尺は次の通りである。

遺構：住居跡・土坑・井戸跡・掘立柱建物跡……………1/60、カマド……………1/30、溝状遺構……………1/80

遺物：土器・石器……………1/3・1/4

5. 宮田遺跡の略称は6E-33である。また、各遺構の略称は次の通りである。

1号住居跡→H-1、 1号掘立柱建物跡→B-1、 1号土坑→D-1

1号井戸跡→I-1、 1号焼土跡→F-1、 1号構状遺構→W-1

1号道路跡→R-1

目次

序

例言・凡例

I. 調査に至る経緯と組織	1
II. 遺跡の位置と環境	2
III. 調査の経過と方法	4
IV. 遺跡の概要と基本土層	4
V. 遺構と遺物	
1. 竪穴式住居跡	6
2. 掘立柱建物跡	24
3. 土坑	24
4. 井戸跡	26
5. 焼土跡	26
6. 道路跡	26
7. 溝状遺構	26
8. 表土採集遺物	31
VI. 結語	31

抄録

挿図目次

第1図 宮田遺跡と周辺の遺跡位置図	2	第16図 8号住居跡とその遺物実測図(1)	17
第2図 宮田遺跡の位置図(1)	3	第17図 8号住居跡の遺物実測図(2)	18
第3図 宮田遺跡の位置図(2)	3	第18図 9号住居跡とその遺物実測図	19
第4図 宮田遺跡全体実測図	折り込み	第19図 10号住居跡とその遺物実測図(1)	20
第5図 基本堆積土層図	5	第20図 10号住居跡の遺物実測図(2)	21
第6図 1号住居跡とその遺物実測図	6	第21図 10号住居跡の遺物実測図(3)	22
第7図 2号住居跡実測図	7	第22図 11・14号住居跡とその遺物実測図	23
第8図 2号住居跡カマドとその遺物実測図	8	第23図 12号住居跡とその遺物実測図	24
第9図 2号住居跡の遺物実測図	9	第24図 13号住居跡とその遺物実測図	25
第10図 3号住居跡とその遺物実測図	10	第25図 1号掘立柱建物跡とその遺物実測図	27
第11図 4号住居跡とその遺物実測図	12	第26図 土坑実測図	28
第12図 5号住居跡とその遺物実測図	13	第27図 土坑実測図と23・26土坑遺物実測図	29
第13図 6号住居跡とその遺物実測図	14	第28図 井戸跡・焼土跡・道路跡実測図	30
第14図 7号住居跡とその遺物実測図	15	第29図 1・2号溝状遺構実測図	31
第15図 8号住居跡実測図	16	第30図 表土採集遺物実測図	32

表目次

表1～表4 遺物観察表(1)～遺物観察表(4)	33～36
-------------------------	-------

図版目次

- 図版1 - 1. 遺跡全景（上方から）
2. 遺跡北側近景（南から）
3. 遺跡北側土坑群（南から）
- 図版2 - 1. 1号住居跡遺物出土全景（西から）
2. 1号住居跡カマド煙道部断割り
3. 2号住居跡遺物出土全景（西から）
4. 2号住居跡カマドB（南から）
- 図版3 - 1. 4号住居跡全景（西から）
2. 4号住居跡カマド断面（南から）
3. 4号住居跡遺物（12）出土近景
4. 5号住居跡遺物出土全景（東から）
- 図版4 - 1. 7号住居跡遺物出土全景（東から）
2. 7号住居跡掘り方全景（西から）
3. 8号住居跡遺物出土全景（西から）
4. 8号住居跡掘り方内遺物（17）出土近景（北から）
- 図版5 - 1. 9号住居跡掘り方全景（西から）
2. 10号住居跡遺物出土全景（南から）
3. 10号住居跡遺物出土近景
4. 10号住居跡掘り方全景（北から）
- 図版6 - 1. 1号掘立柱建物跡柱痕確認全景（東から）
2. 1号掘立柱建物跡完掘全景（北から）
3~10. 1号掘立柱建物跡
柱穴（P-1~P-8）断面
- 図版7 - 1. 12号土坑全景（南から）
2. 13号土坑全景（南から）
3. 16号土坑全景（南から）
4. 17号土坑全景（南東から）
- 図版8 - 1. 28号土坑全景（西から）
2. 29号土坑全景（北から）
3. 1号井戸遺物出土（北東から）
4. 2号井戸掘削断面（西から）
- 図版9. 1・2号住居跡出土遺物
- 図版11. 7~9号住居跡出土遺物
- 図版13. 10~14号住居跡出土遺物
- 図版14. 1号掘立柱建物跡、23・26号土坑、1号井戸、表土採集遺物
4. 標準堆積土層断面
5. 噴砂痕跡（13号住居跡覆土上面）
5. 2号住居跡カマドA（西から）
6. 2号住居跡床面下掘り方（西から）
7. 3号住居跡遺物出土全景（西から）
8. 3号住居跡カマド（西から）
5. 6号住居跡全景（西から）
6. 6号住居跡カマド近景（西から）
7. 6号住居跡土層断面（北から）
8. 6号住居跡掘り方全景（西から）
5. 8号住居跡掘り方全景（西から）
6. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から）
7. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から）
8. 9号住居跡遺物出土全景（西から）
5. 11号住居跡遺物出土全景（西から）
6. 12号住居跡遺物出土全景（西から）
7. 13号住居跡遺物出土全景（西から）
8. 11・14号住居跡遺物出土全景（西から）
11. 5号土坑全景（南から）
12. 7号土坑全景（東から）
13. 9号土坑全景（東から）
14. 11号土坑全景（西から）
5. 21号土坑全景（東から）
6. 22号土坑全景（南から）
7. 24号土坑全景（東から）
8. 26号土坑遺物出土全景（南から）
5. 2号井戸全景（西から）
6. 道路跡（西から）
7. 1号溝全景（西から）
8. 2号溝全景（西から）
- 図版10. 3~6号住居跡出土遺物
- 図版12. 9・10号住居跡出土遺物

I 調査に至る経緯と組織

1. 調査に至る経緯

群馬県教育委員会文化財保護課では、群馬県関係機関が実施する開発事業について、平素より各課・各機関へ文書・パンフレットを送付したり定期的な打ち合わせを行い、また土地利用調整などの合議を通じて開発計画の把握につとめ、必要な対応をしようとしている。

平成6年11月、群馬県土木部道路維持課より県教育委員会文化財保護課へ、道路清掃車両車庫等建設候補地における埋蔵文化財の所在の有無についての照会があった。これに対し文化財保護課は、当該地は周知の遺跡内であるため、建設工事に先立って試掘調査等の対応が必要であると回答した。

平成7年3月、県文化財保護課によって試掘調査が行われた。その結果、建設工事予定地内から奈良・平安時代の竪穴住居等が確認され、これらの遺構に掘削が及ぶ場合や構造物が建設される場合には、事前の発掘調査が必要であると判断された。

その後、この試掘結果を受けて道路維持課・前橋市教育委員会と協議を行ったが、事業変更は困難との判断にいたり、恒久構造物や沈砂池が建設される1,260㎡について発掘調査を実施することとした。本調査については、群馬県教育委員会に事務局を置く調査会を組織し、実施することになった。

なお、出土資料及び関連記録については、前橋市教育委員会で保管・活用する予定である。

2. 調査の組織

宮田遺跡調査会組織表

区 分	職 名	氏 名
会 長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘 二
副 会 長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部参事兼文化財保護課長	荒 畑 大 治
理 事	群馬県土木部 道路維持課長 群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 次長 前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	金 田 俊 轟 公 之 本 山 卓
監 事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 専門員 前橋市教育委員会事務局文化財保護課 埋蔵文化財係長	井 川 達 雄 駒 倉 秀 一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	巾 隆 之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課 指導主事 同 上 主 任	高 井 佳 弘 飯 塚 聡

発掘調査参加者

大河原初枝・黒沢とき・斉藤吉江・桜井れい・嶋岡清作・神宮政江・鈴木宏・高橋トク子・田中米一・田村さきみ・田村さよ子・田村よし・土屋ケサミ・長岡裕治・中野つる・中野利一・山田隆・吉田とみ子・吉田新一郎・吉田芳江・渡辺武江・勅使河原酉造

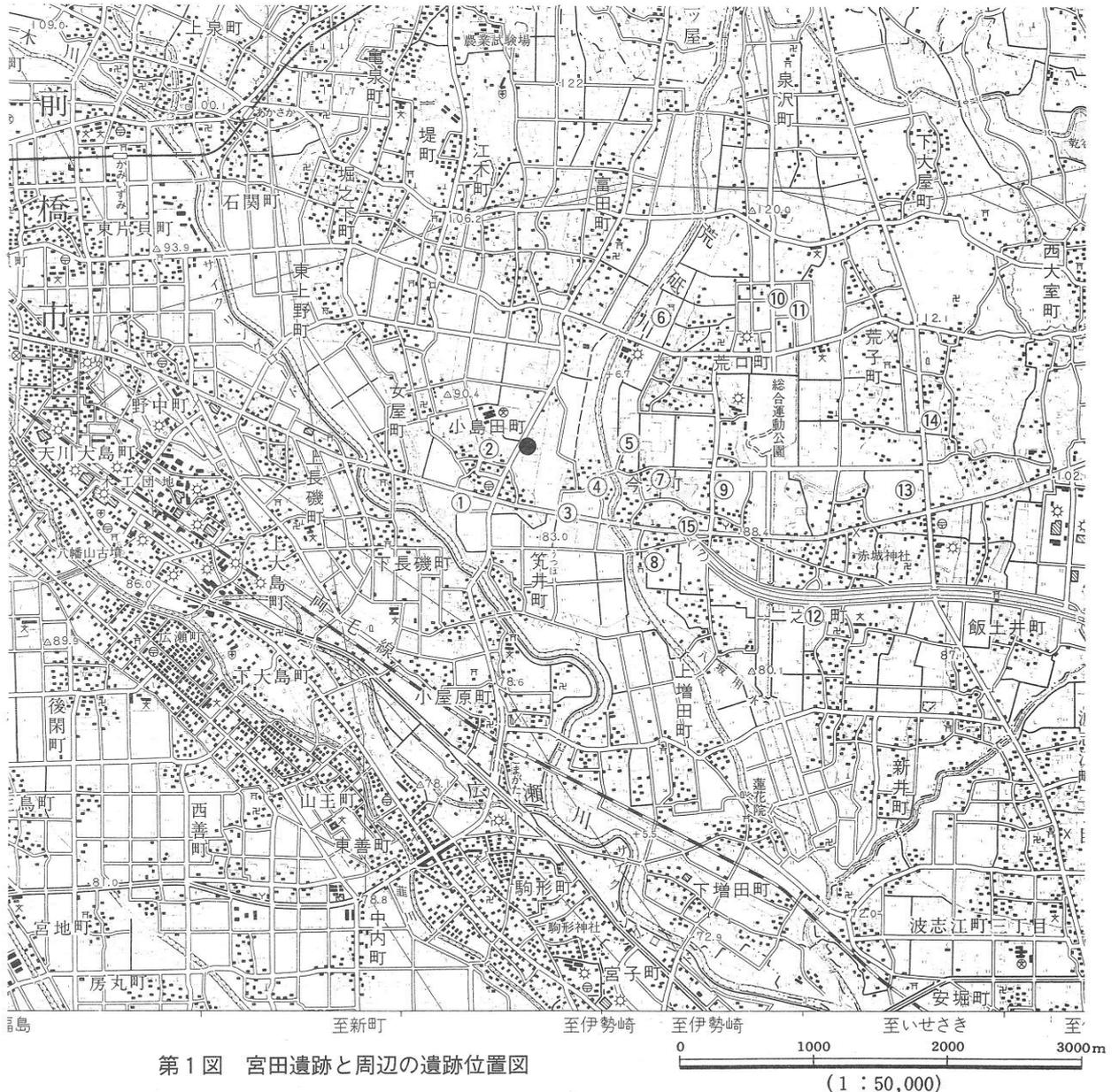
群馬県立前橋東高等学校地理歴史研究部（顧問 米澤育夫）

高橋麻衣・高橋和江・星由香利・千木良奈央・山田由紀恵・太田好紀・阿久沢佳之・荒井啓子・和佐香・後藤亜季・北爪雅恵・新井麻衣・吉田容子・川崎美由紀・竹内智彦・熊川利津子

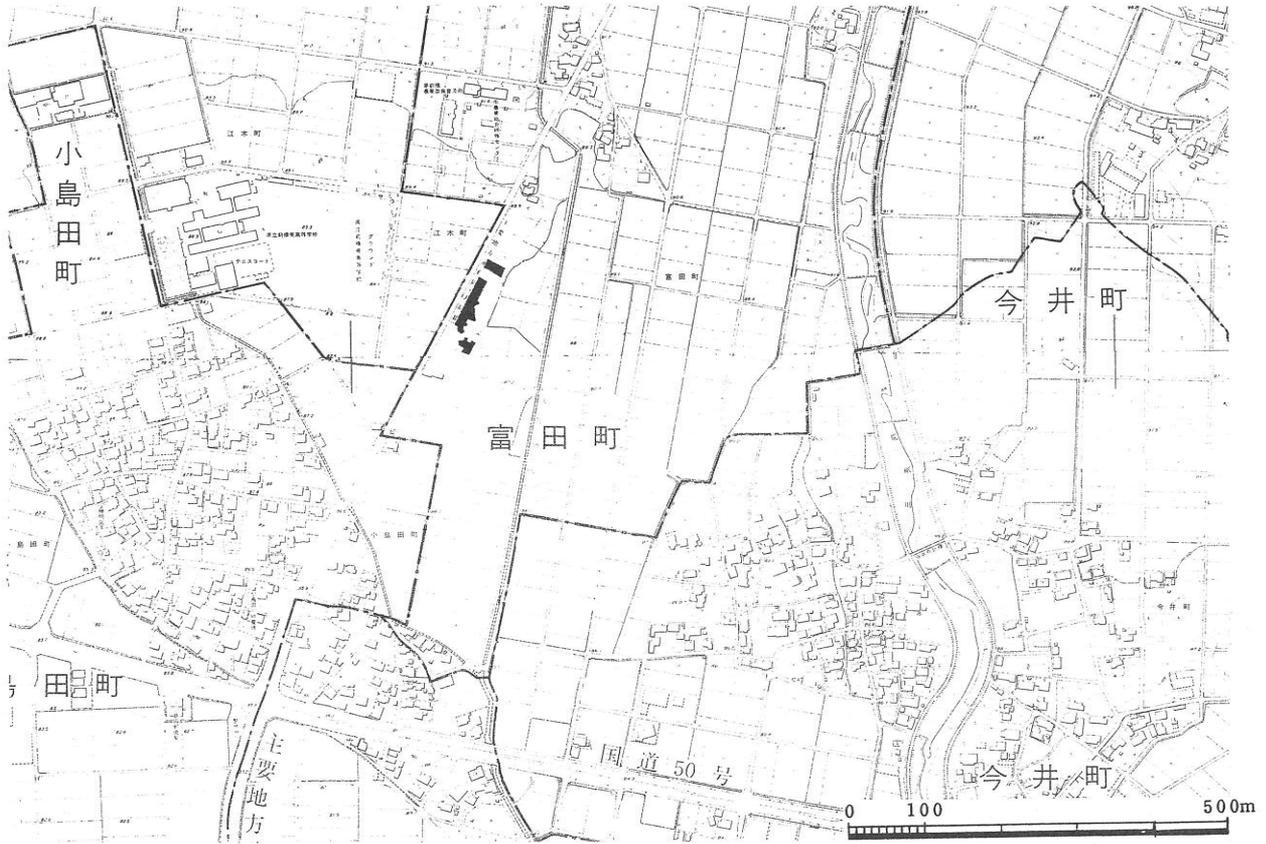
II 遺跡の位置と環境

宮田遺跡は、前橋市街地から東へ8 kmに位置し、赤城山麓の末端部にあたる。周囲は赤城山麓から流下する荒砥川や宮川などによって台地とそれを樹枝状に刻む沖積低地とで形成された扇状地となっている。本遺跡は荒砥川西岸の沖積低地に立地し、水田や畑地として利用されていた。こうした周辺の沖積低地や台地上には数多くの遺跡の存在が知られている。

先土器時代の遺跡では荒砥北三木堂遺跡⑦・柳久保遺跡群⑩が知られている。縄文時代の遺跡は多く、なかでも前期後半と中期後半の遺跡は数多く確認されている。牛伏遺跡で、草創期の爪形文土器、荒砥北三木堂遺跡⑦で早期の撚糸文土器が出土している。縄文時代の集落は、前期の荒砥宮田遺跡⑥・柳久保遺跡群⑩



- 宮田遺跡 ①筑井八日市遺跡 ②小島田八日市遺跡 ③今井白山遺跡 ④今井城 ⑤荒砥北原遺跡 ⑥荒砥宮田遺跡 ⑦荒砥北三木堂遺跡 ⑧今井神社古墳 ⑨荒砥大日塚遺跡 ⑩柳久保遺跡群 ⑪柳久保水田遺跡 ⑫荒砥天之宮遺跡 ⑬荒砥上ノ坊遺跡 ⑭荒砥荒子遺跡 ⑮今井道上遺跡



第2図 宮田遺跡の位置図(1)

(1 : 10,000)



第3図 宮田遺跡の位置図(2)

(1 : 2,500)

荒砥上ノ坊遺跡⑬、中期から後期では荒砥北三木堂遺跡⑦などが知られている。

弥生時代の遺跡は中期後半から後期の集落が荒砥北三木堂遺跡⑦・⑧荒砥大日塚遺跡⑨・荒砥上ノ坊遺跡⑬が知られている。

古墳時代の遺跡は、前期の集落と方形周溝墓が荒砥上ノ坊遺跡⑬・荒砥島原遺跡、中期の集落が柳久保遺跡群⑩で発見されている。後期の集落は荒砥大日塚遺跡⑨・荒砥天之宮遺跡⑫、居館跡が荒砥荒子遺跡⑭・今井道上遺跡⑮が知られている。また、古墳は大型の前方後円墳である今井神社古墳⑧が知られている。

奈良・平安時代の遺跡は集落が筑井八日市遺跡①・今井白山遺跡③・荒砥北原遺跡⑥などが知られている。また、浅間B軽石によって埋没した水田跡が柳久保水田遺跡⑪などが知られている。

Ⅲ 調査の経過と方法

1. 調査の経過（平成7年4月17日～同年5月30日）

4/17から重機による表土剥ぎを開始した。4/19から調査区内の遺構確認作業を実施し、竪穴式住居跡14軒、掘立柱建物跡1棟、土坑29基、溝2条、道路跡1条、井戸跡2基を確認した。また、調査区内に公共座標に沿った10m方眼の基準杭設定及び水準移動を実施した。4/20から時期的に新しい掘り込みとみらる道路跡と土坑から調査を着手した。竪穴式住居跡の調査は4/21から調査を着手した。

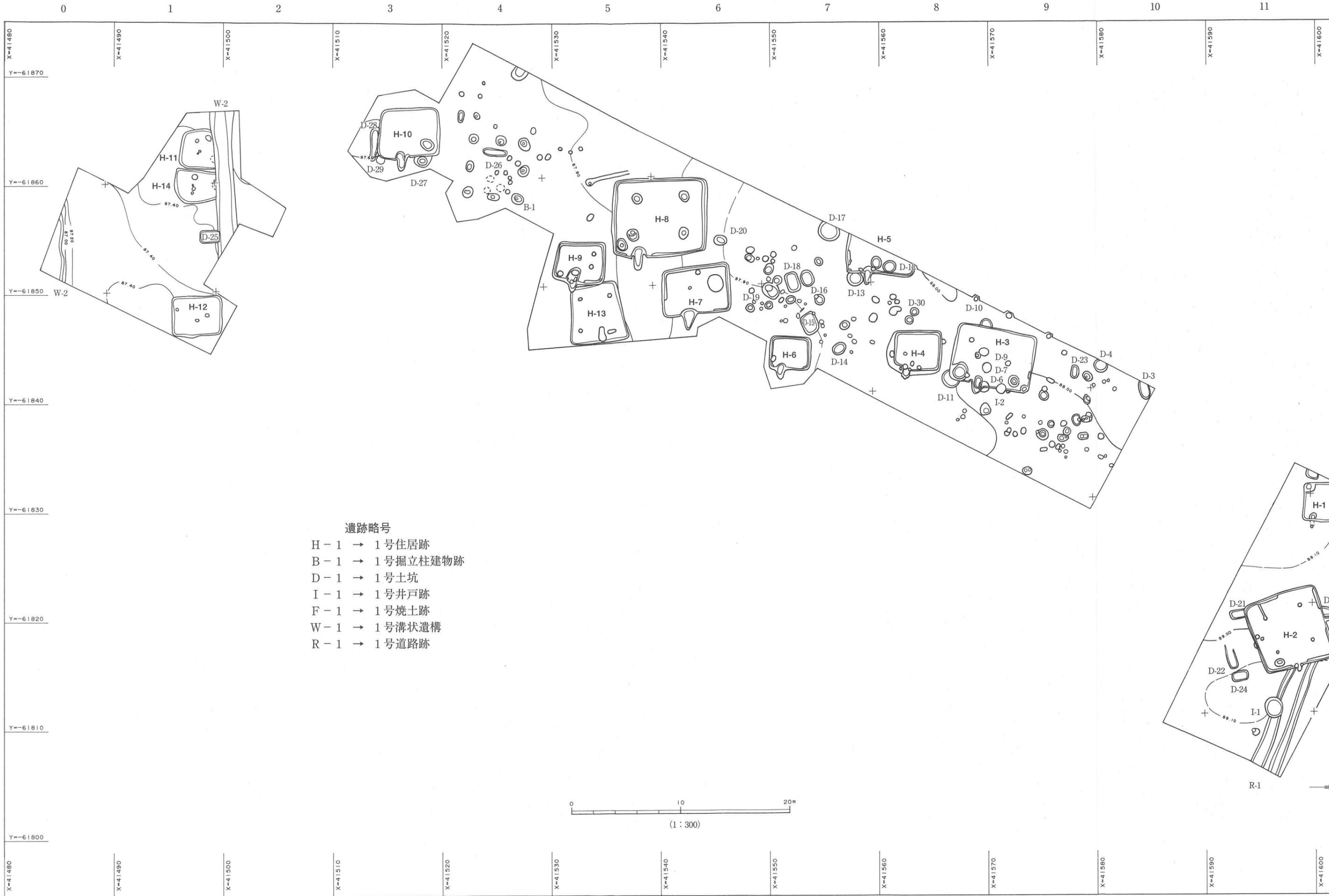
5/8から1号掘立柱建物跡の調査に着手した。1号掘立柱建物跡は桁行2間・梁行2間の規模で、柱痕跡も確認できた。5/22までに遺構調査のほとんどを終了した。その結果、調査区内の所々に地震によるとみられる液状化現象の跡（噴砂）が確認された。5/24から5/26にかけて遺跡全景の空中撮影と遺跡全体撮影を実施した。5/25から竪穴式住居跡の床面下調査を実施した。5/26に発掘機材搬出及びプレハブ撤去を実施し、5/31の残土埋め戻し作業の終了を以て全ての現場作業を終了した。

2. 調査の方法

表土剥ぎは試掘調査の結果をもとに、重機によって遺構確認面まで表土除去を実施した。遺構の調査は土層観察用の畦を設定し、堆積状況の観察をしながら掘り下げた。調査区内の基準杭は公共座標に沿った10m四方のグリッドを設定した。遺構実測の作成は1/20縮尺を基準とし、住居内カマドは1/10縮尺、溝は1/40縮尺、遺構全体図は1/200縮尺で行った。遺構の写真撮影は調査の進行状況に応じて、白黒35mm・カラースライド35mm・白黒6×7mmのフィルムで記録した。

Ⅳ 遺跡の概要と基本土層

調査の結果、奈良・平安時代の集落跡を主体とした遺構と遺物が検出された。検出された遺構は、竪穴式住居跡が14軒、掘立柱建物跡が1棟、土坑が29基、井戸跡が2基、溝状遺構が2条、道路跡が1条である。竪穴式住居跡は、その出土遺物から7世紀前半から9世紀後半にかけてそれぞれ営まれたものと考えられる。最も古い時期は2号住居跡である。2号住居跡は一辺が7mの大形住居で、廃絶時のカマドは東壁に付設されていたが、それ以前に使用されていたとみられるカマドが北壁に検出された。その次の時期にあたるのが8・13号住居で、8世紀前半から半ばにかけて営まれていたと考えられる。5・6・7号住居は8世紀後半から9世紀前半にかけて営まれていたと考えられる。1・4・9・10・11・12・14号住居は9世紀半ばから



第4図 宮田遺跡 全体測量図

後半にかけて営まれていたと考えられる。竪穴式住居跡は、カマドを東壁に付設する場合が多く、北壁に確認できたのは2・11号住居だけであった。いずれも構築材にスサを混入した灰色粘土を使用しているが、芯材にやや違いがみられた。2号住居は甕をⅡ形に組み合わせ、7・8・10号住居は安山岩の切り石を使用している。竪穴式住居跡の、床面下の調査の結果、3・6・7・8・9・10号住居で箱形やすり鉢形に掘り込まれた土坑が確認された。なかでも8号住居は床面から70～80cmの深さに掘り込まれた箱形の土坑がいくつも重なりあっていた。掘立柱建物跡は1棟検出され、出土遺物などから平安時代前半に営まれたものと考えられる。1号掘立柱建物跡は桁行2間・梁行2間の柱痕も確認できた。

2条の溝状遺構はいずれも東西方向に直線的に走行しており、いずれも底面に水酸化鉄が沈着しており、灌漑用に使った水路とみられる。使用時期は不明であるが、遺構との切り合いから中世以降のものと考えられる。

道路跡は重複関係や掘り込み面などにより近世から近代にかけてのものと考えられる。

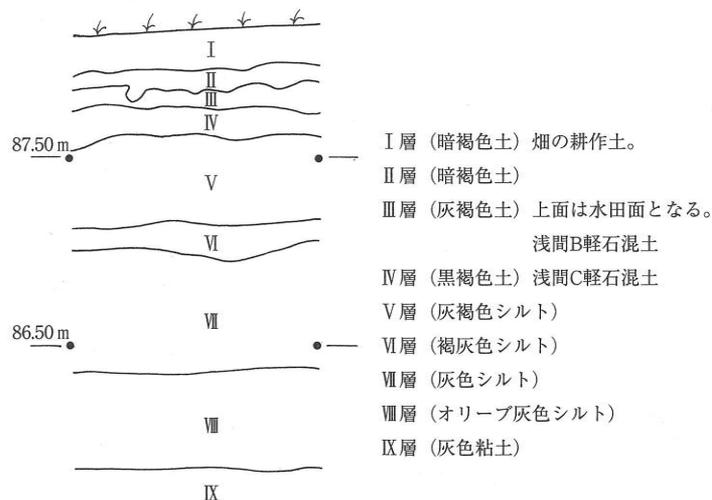
土坑は近世から近代にかけての耕作に伴う桶埋設土坑が大半である。

井戸跡はいずれも深さ2mの砂礫層まで掘り抜かれている。1号井戸跡は中世、2号井戸跡は近代以降のものともみられる。

出土遺物は竪穴式住居跡から出土した土師器（甕・坏）と須恵器（甕・坏・蓋）が主体で、他に灰釉陶器 坏・石製紡錘車・鉄製刀子である。また、遺構は検出されなかったが、縄文時代前期の諸磯b式や後期の称名寺I式に比定される深鉢が採集されている。

基本堆積土層

調査区は荒砥川の沖積低地に立地し、水田や畑として利用されている。今回の調査区も畑地で、調査区北側の現地表面の標高は約88.40mで南東へ向かって約1°の下り勾配である。調査区内の堆積土層に差はみられず奈良・平安時代の遺構は右図のⅣ層上面で確認できた。また、右図は調査区南西側で作図したものである。



第5図 基本堆積土層図

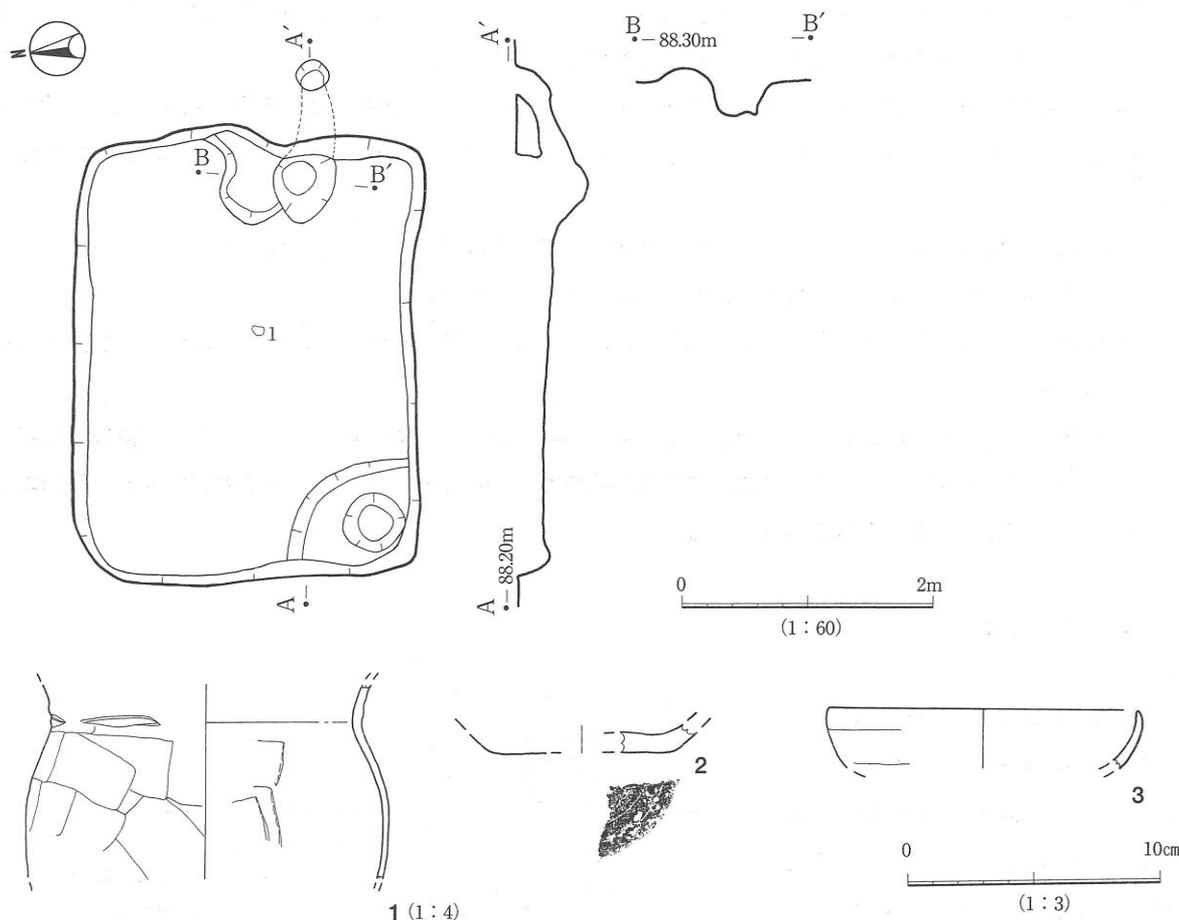
本遺跡の調査区全域にわたって地震に伴うとみられる液状化現象の痕跡が噴砂（にぶい黄橙色細砂）として確認された。噴砂は浅間C

軽石混土層であるⅣ層を突き抜け、浅間B軽石層である層には達していない。また、8世紀代以前の竪穴住居跡覆土に確認され、9世紀代以降の竪穴住居跡覆土には確認されない。赤城山南麓一帯の遺跡調査で噴砂や地割れが報告されており、本遺跡の噴砂痕も「類聚国史」に記述されている弘仁九年（818年）に起きた大地震に起因する可能性がある。

V 遺構と遺物

1. 竪穴式住居跡

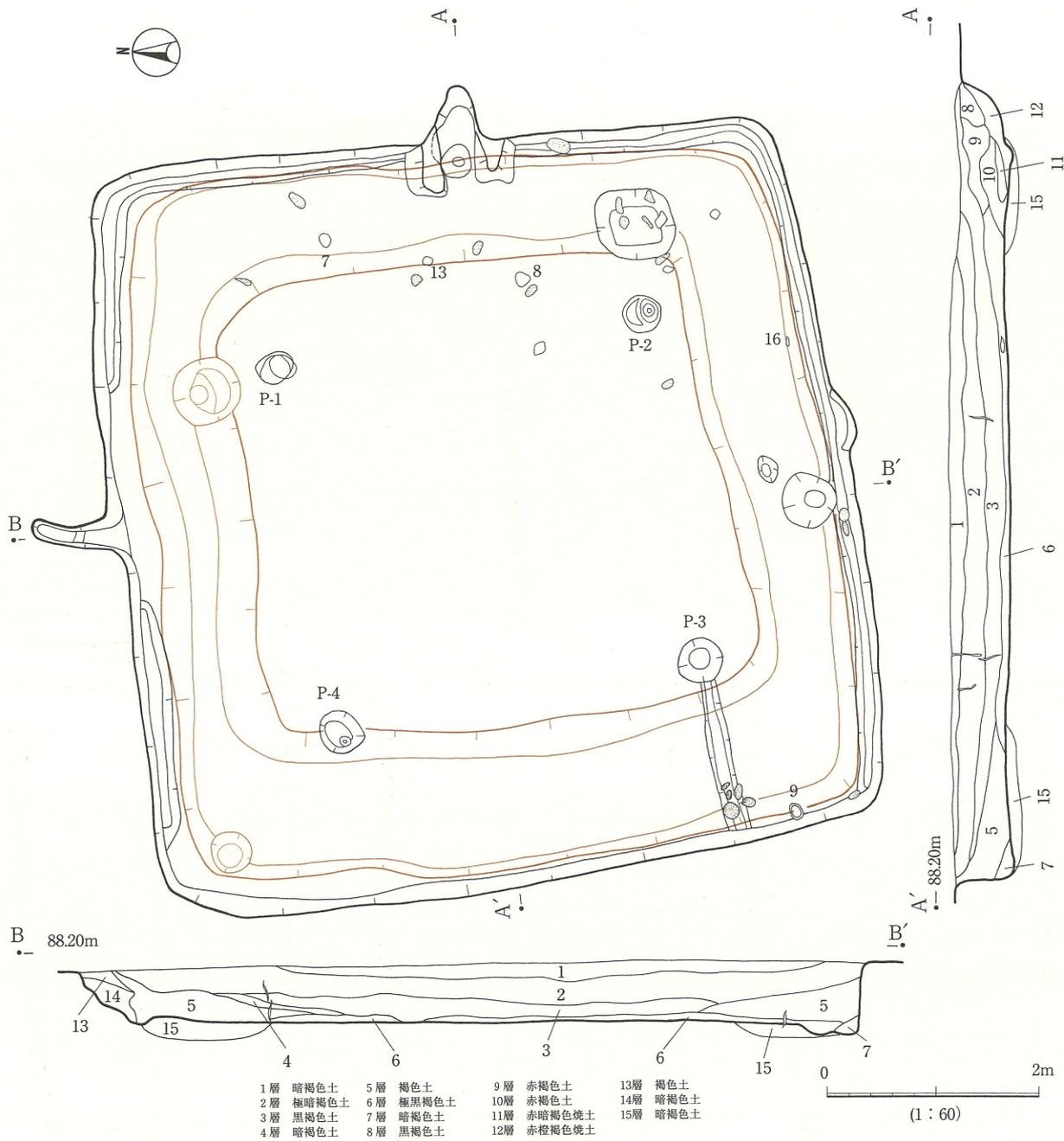
14軒の竪穴式住居跡が検出された。造営時期は古墳時代後期の7世紀前半から平安時代中期の9世紀後半までである。



第6図 1号住居跡とその遺物実測図

1号住居跡 (第6図、表1、図版2-1・2、図版9)

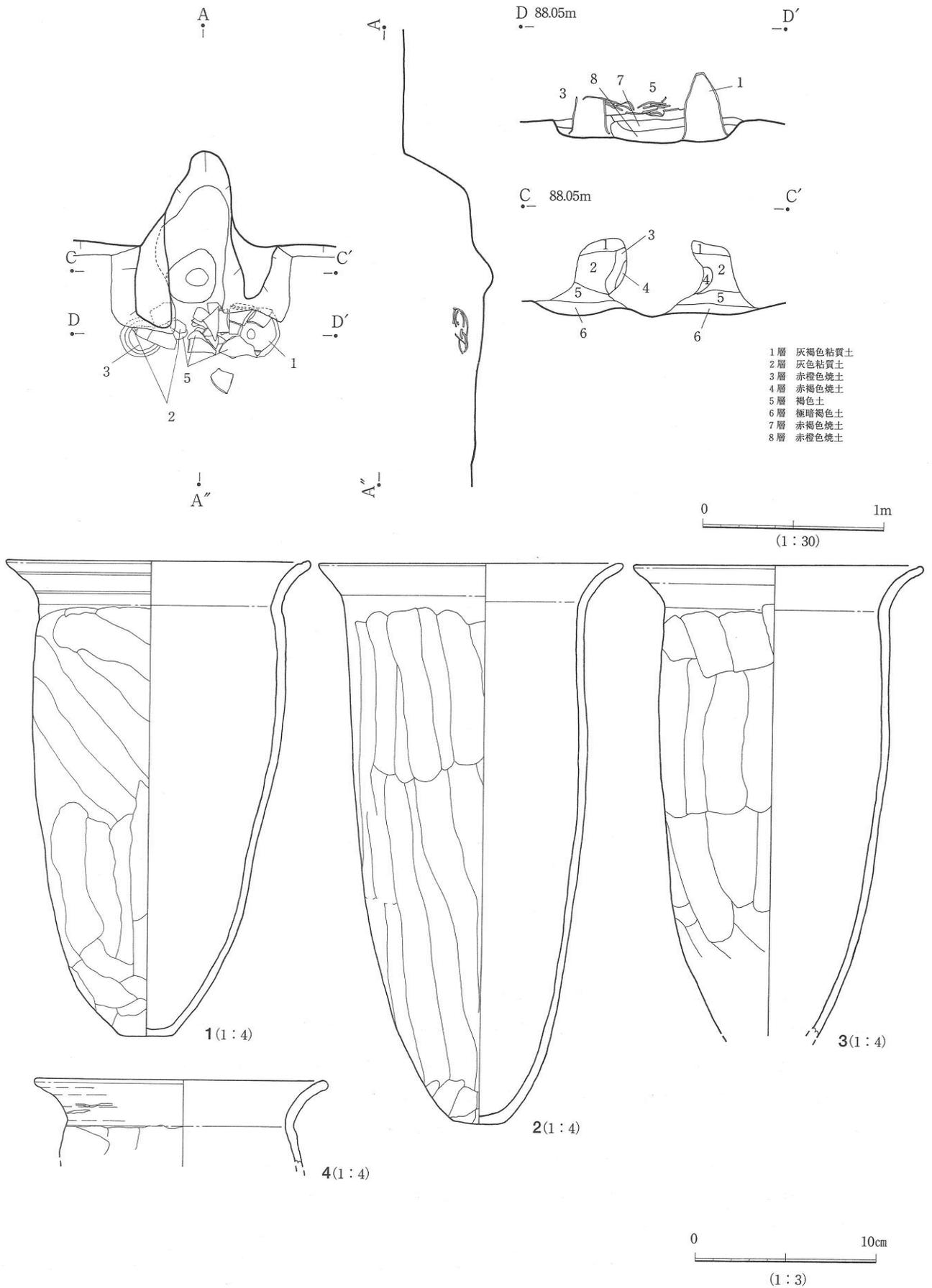
位置／調査区北側E-12・F-12グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.50m×南北辺2.54m。残存壁高／28~34cm。主軸方位／N-99°-E。床面積／8.75㎡。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて若干軟弱ながら踏み固めが認められた。床面標高は87.90mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、煙道部は地山を掘り抜き壁外に細長く突出している。火床面は深さ32cmのピット状の穴を黒褐色土で埋め戻した上面に設けられ、僅かな被熱痕がみられた。柱穴／南西隅角で深さ34cmの穴が検出された。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は8点と僅少で、土師器の甕が2点・坏が4点、須恵器の坏が2点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。1(土師器甕)は住居中央部から出土。2・3は埋没土中からの出土。



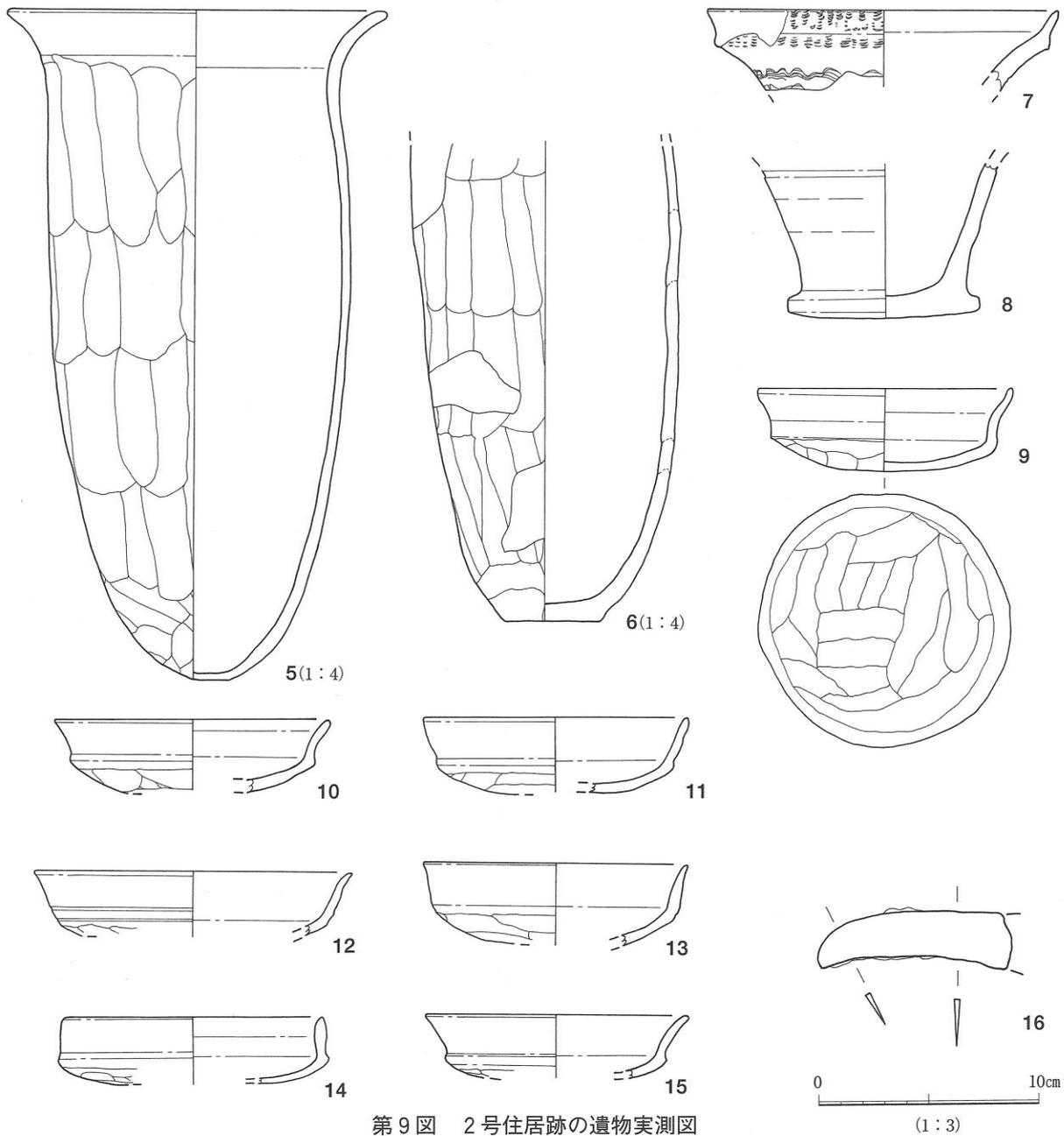
第7図 2号住居跡実測図

2号住居跡 (第7~9図、表1、図版2-3~6、図版9)

位置／調査区北側F-12・G-12グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺6.70m×南北辺6.50m。残存壁高／50~54cm。主軸方位／N-83°-E。床面積／87.5㎡。床面／灰色シルトであるV層中に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて顕著な踏み固めが認められた。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積で、土層断面に墳砂痕が観察された。貯蔵穴／南東隅角に70cm×63cmで深さ45cmの箱形に掘り込まれている。カマド／北壁中央と東壁中央に付設されている。本跡廃絶時には北壁のカマドは壊されて壁となっており、東壁のカマドだけが使用されていたとみられる。東壁のカマドは焚口の袖と天井に構築材の芯として1~6の長胴甕をΠ形に組み合わせている。柱穴／支柱穴が対角線上に4穴検出され、各柱穴の深さはP-1が41cm、P-2が40cm、P-3が45cm、P-4が38cmである。壁溝／西壁



第8図 2号住居跡カマドとその遺物実測図

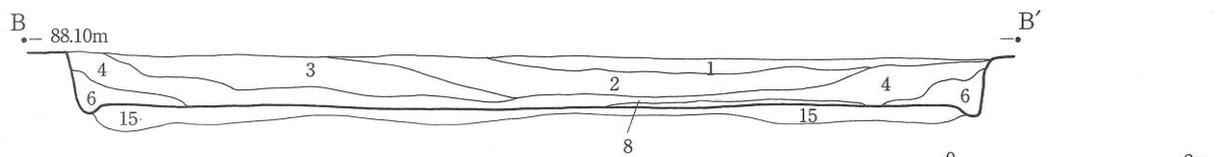
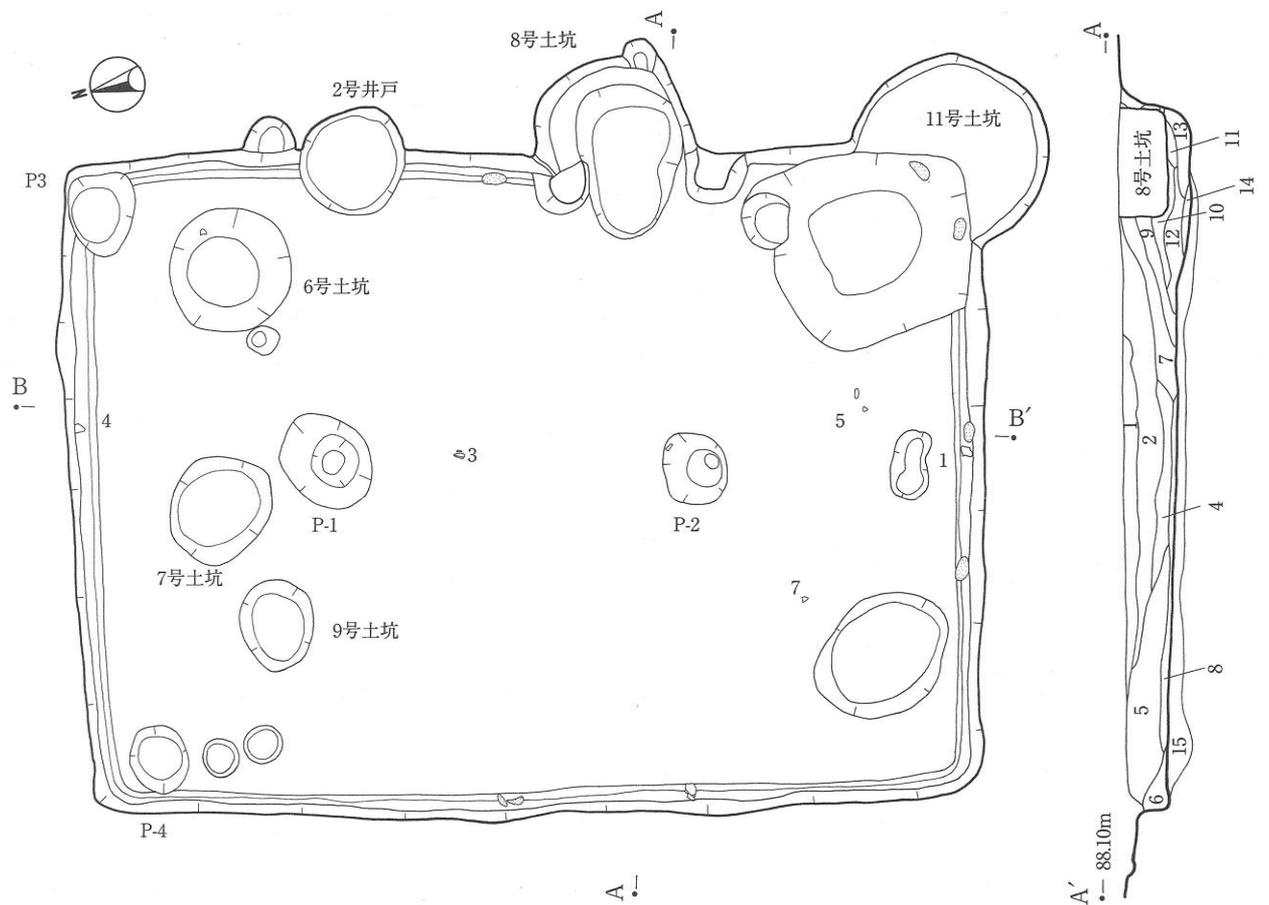


第9図 2号住居跡の遺物実測図

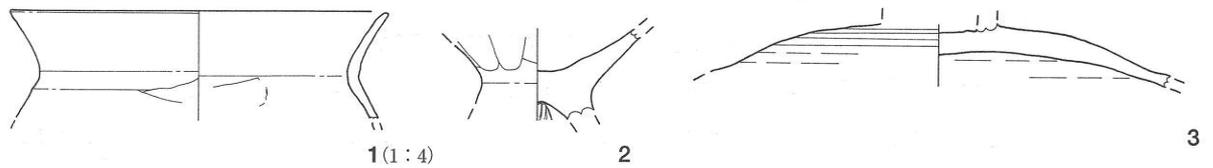
とカマド下を除いて廻る。間仕切り溝／断面U字形で幅14cm～20cm、深さ10cm、長さ135cmで西壁から柱穴P-3まで直線的にのびる。掘り方／茶色で図示したように四方に帯状に掘り込まれている。遺物出土状態／出土個体数は38点で、土師器の甕6点・甌1点・坏2点・高坏1点、須恵器の甕2点・瓶2点・鉢1点・坏3点である。カマド構築材に二次利用された長胴甕以外は遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

3号住居跡 (第10図、表1・2、図版2-7・8、図版10)

位置／調査区中央D-8・9グリッド。遺存状態／2号井戸、6～9・11号土坑に切られているが状態は概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺5.20m×南北辺7.18m。残存壁高／40～45cm。主軸方位／N-102°-E。床面積／36.9㎡。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前



- | | |
|----------|-----------|
| 1層 極暗褐色土 | 8層 黒褐色土 |
| 2層 黒暗褐色土 | 9層 暗褐色土 |
| 3層 極暗褐色土 | 10層 赤褐色土 |
| 4層 暗褐色土 | 11層 赤褐色焼土 |
| 5層 極暗褐色土 | 12層 赤橙色焼土 |
| 6層 褐色土 | 13層 赤褐色土 |
| 7層 極暗褐色土 | 14層 赤褐色焼土 |
| | 15層 暗褐色土 |



第10図 3号住居跡とその遺物実測図

から本跡中央部にかけて顕著な踏み固めが認められた。床面標高は87.50 mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。貯蔵穴／南東隅角に155cm×148cmで深さ45cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに付設され、上部は8号土坑に壊されている。両側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。火床面は床面レベルより8 cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。柱穴／合計7穴検出され、各柱穴の深さはP-1が48cm、P-2が52cm、P-3が35cm、P-4が38cm、他の3穴は深さ20cm前後である。壁溝／全周する。掘り方／本跡全域にわたり8～20cmの深さでほぼ均一に掘り込まれている。遺物出土状態／出土個体数は35点で、土師器の甕が3点・台付き甕が1点・坏が17点、須恵器の甕が2点・瓶が1点・坏が9点・蓋が2点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

4号住居跡 (第11図、表2、図版3-1～3、図版10)

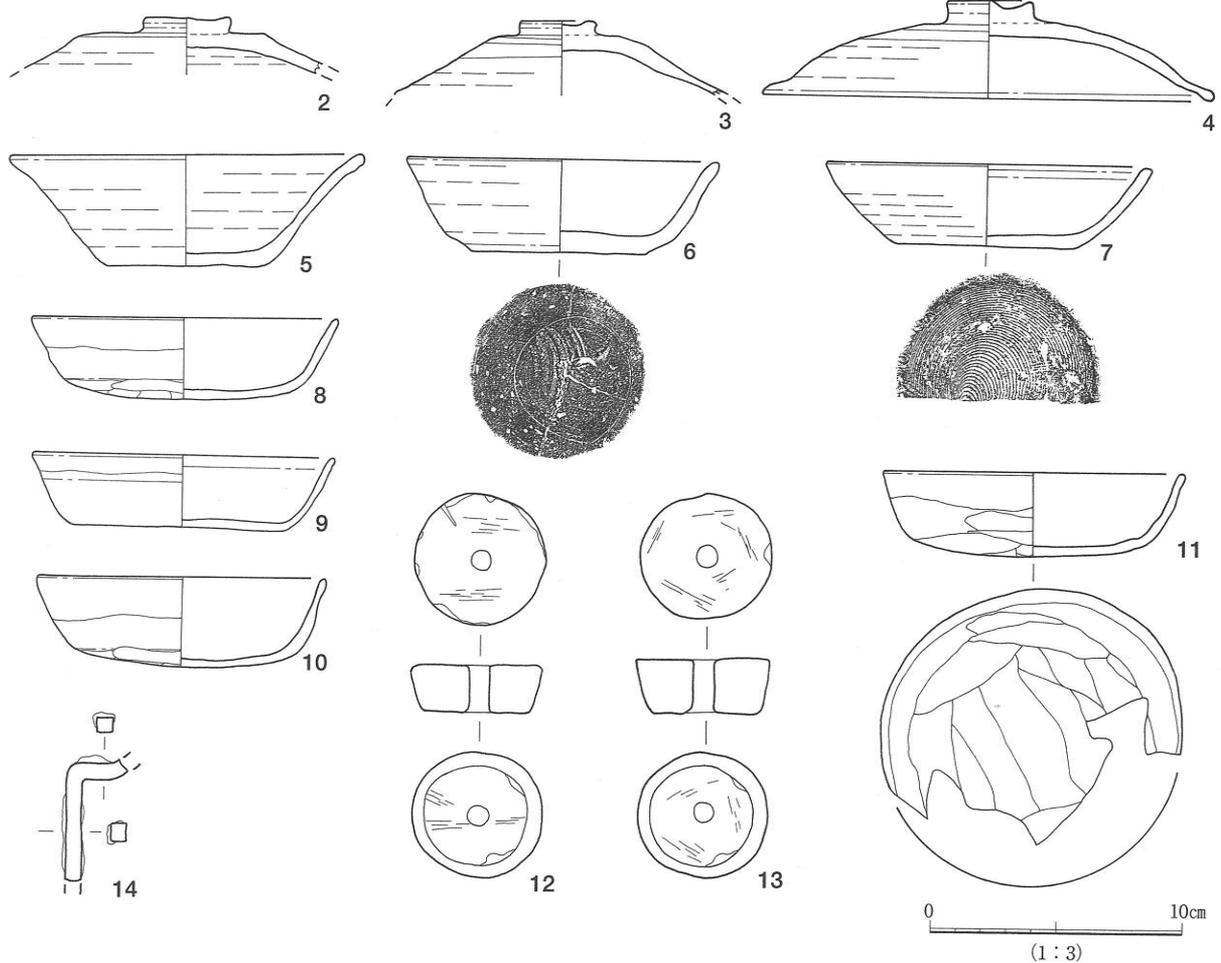
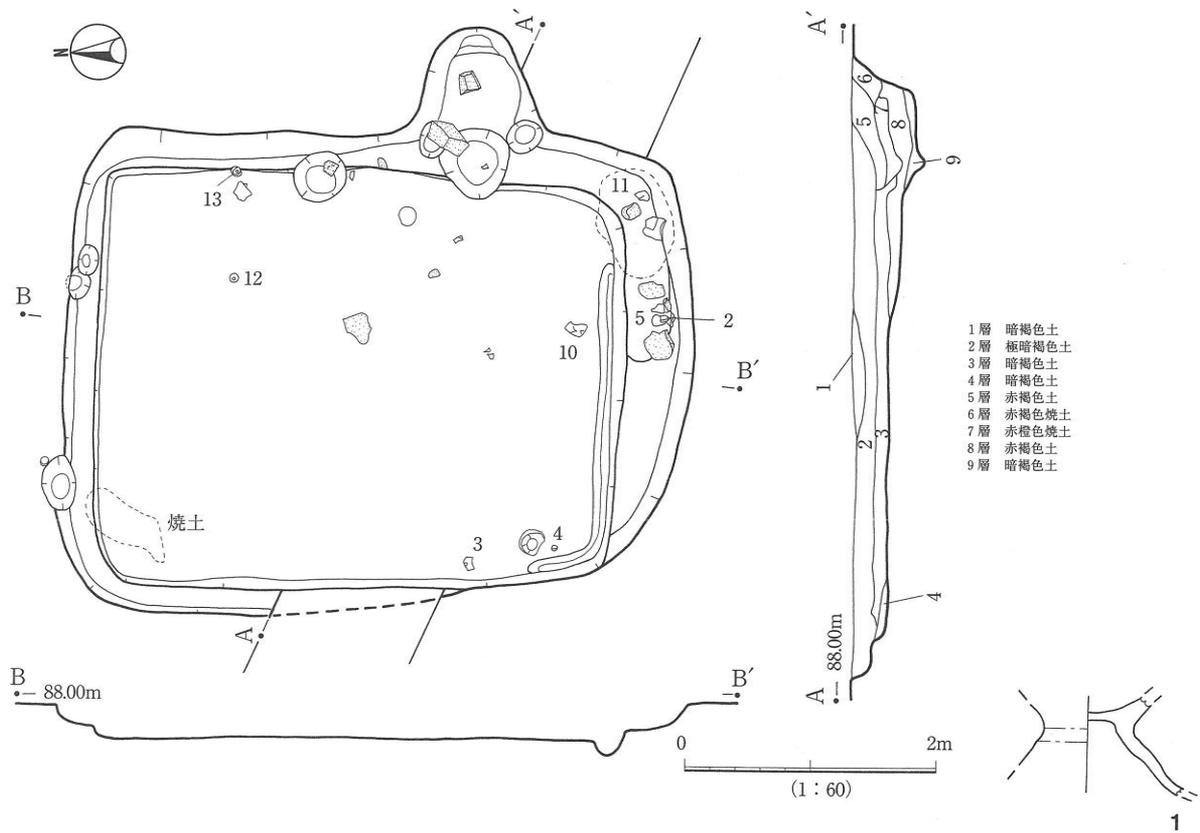
位置／調査区中央D-8グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺3.75 m×南北辺4.90 m。残存壁高／26～32cm。主軸方位／N-90°-E。床面積／14.3㎡。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。床面標高は87.70 mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。北西隅角と南東隅角の床面直上で厚さ2 cmの焼土堆積を確認。棚状遺構／北と南の壁際で床面より10cm程一段高く設けられている。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、燃焼部内とカマド前で角柱状に削った安山岩の切り石が出土。構築材の芯に使ったとみられる。遺物出土状態／出土個体数は45点で、土師器の甕が3点・台付き甕が2点・坏が15点、須恵器の甕が2点・瓶が1点・坏が13点・蓋が6点、石製紡錘車が2点、鉄製品が1点である。南側の棚状遺構と南西隅角に遺物の集中がみられる。

5号住居跡 (第12図、表2、図版3-4、図版10)

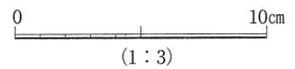
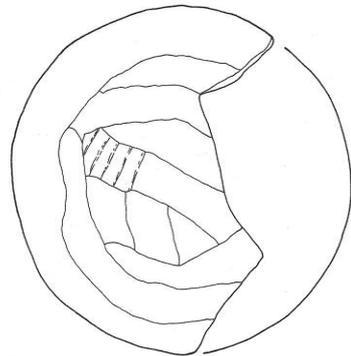
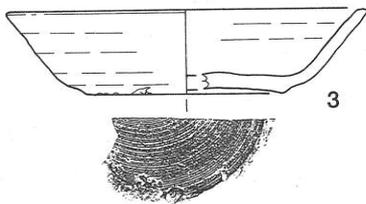
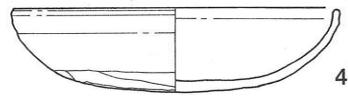
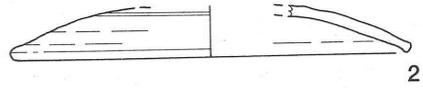
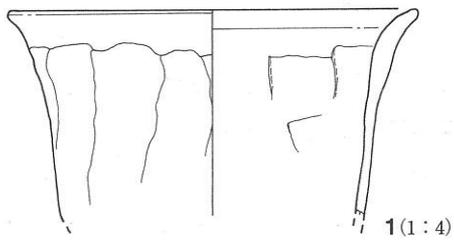
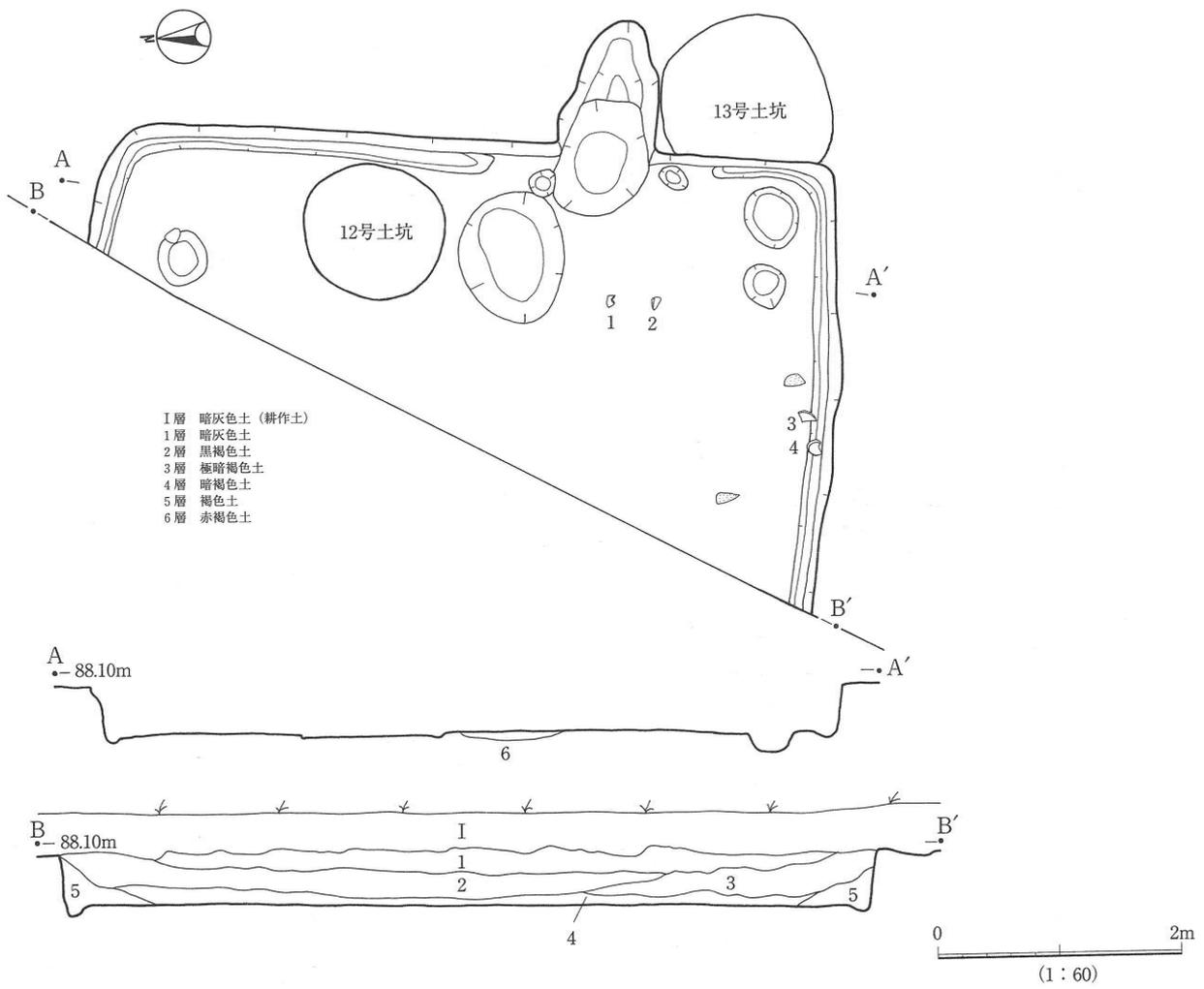
位置／調査区中央C-7・8グリッド。西側は調査区域外となっており、本跡の約1/2の調査となった。遺存状態／12・13号土坑に切られているが、概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺-×南北辺6.10 m。残存壁高／42～45cm。主軸方位／N-99°-E。床面積／-。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。カマド前から本跡中央部にかけて顕著な踏み固めが認められた。床面標高は87.60 mである。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。柱穴／北東隅角と南東隅角に合計3穴を確認し、いずれも15～20cmと浅い。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより8 cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。構築材は完全に崩壊流失しているが、袖部に対になる深さ20cmの杭穴を確認。また、カマド前に深さ8 cmの皿状の掘り込みを確認。中に焼土と灰が充填されており、カマドの灰掻き穴とみられる。遺物出土状態／出土個体数は15点と僅少で、土師器甕が2点・台付き甕が1点・坏が5点、須恵器坏が4点・蓋が3点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

6号住居跡 (第13図、表2、図版3-5～8、図版10)

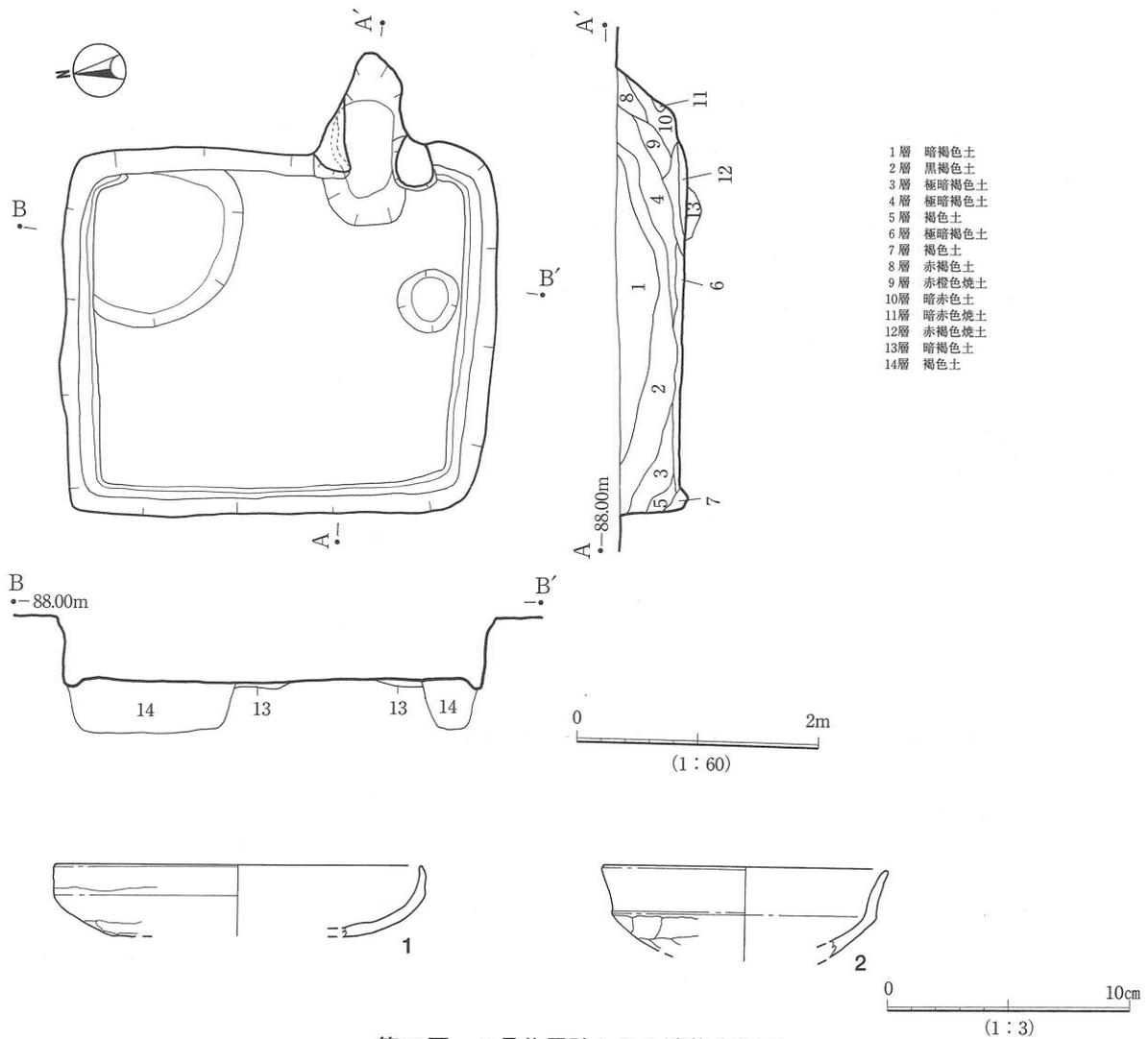
位置／調査区中央D-7グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺2.70 m×南北辺3.90 m。残存壁高／50～54cm。主軸方位／N-94°-E。床面積／10.5㎡。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。埋没状態／土層断面に墳砂痕が観察された。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより6 cm低く設けられ、被熱痕明瞭である。両側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。壁溝／東壁際を除いて廻る。掘り方／深さ3～6 cmの浅い掘り込みが所々みられる。床下土坑／北東隅角に箱形と南壁際に柱穴状の土坑を確認。遺物出土状態／出土個体数は18点と僅少で、いずれも細片である。土師器甕が4点・坏が14点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。



第11図 4号住居跡とその遺物実測図



第12図 5号住居跡とその遺物実測図



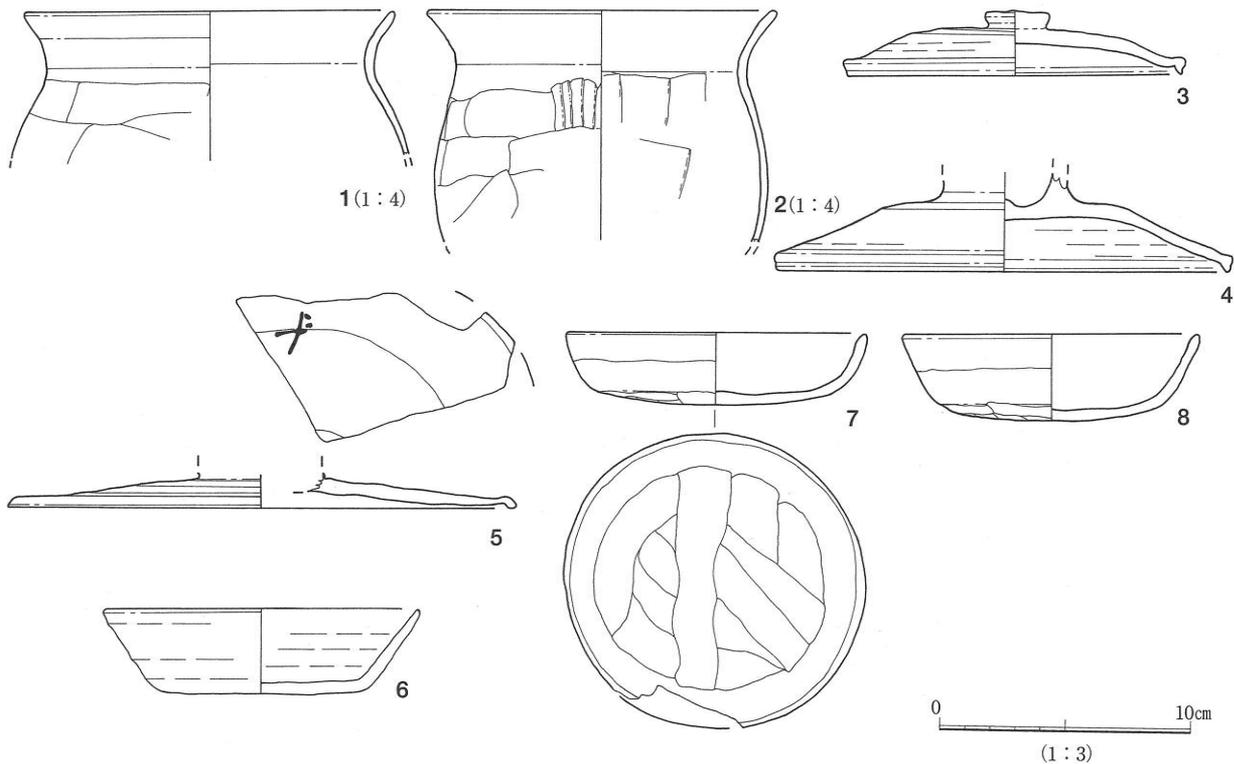
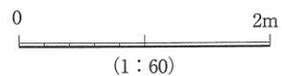
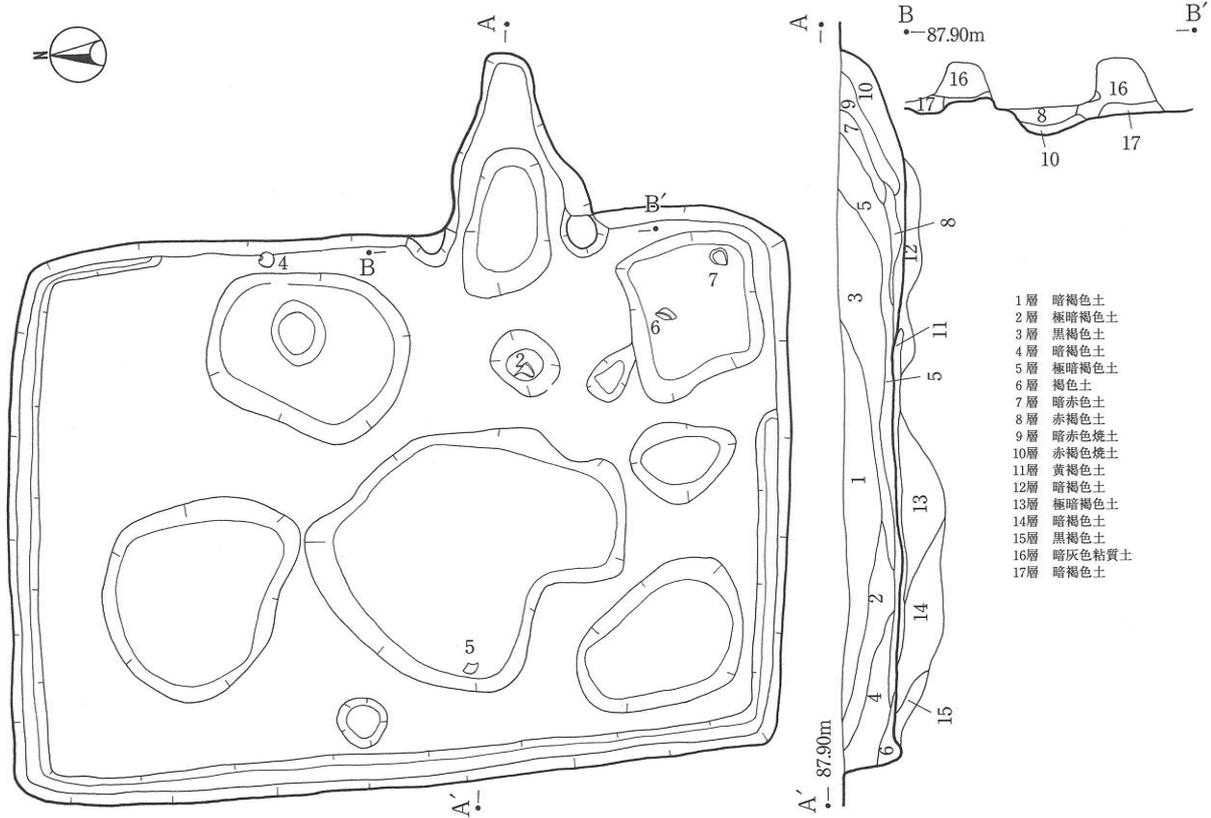
第13図 6号住居跡とその遺物実測図

7号住居跡 (第14図、表2・3、図版4-1・2、図版11)

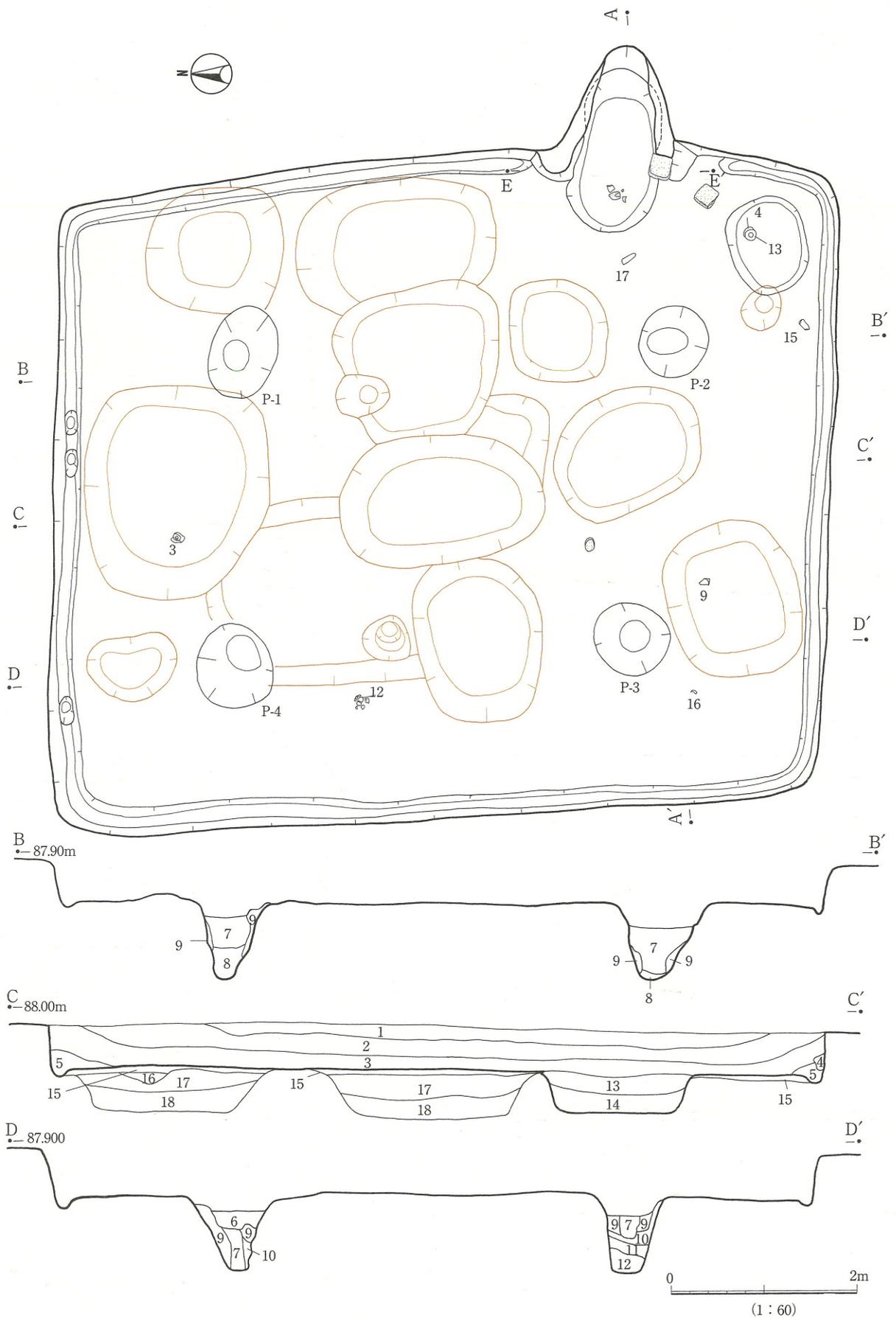
位置／調査区中央C-6・D-6グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺4.30m×南北辺6.15m。残存壁高／44～50cm。主軸方位／N-91°-E。床面積／26.3㎡。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、若干凹凸のある面になっている。貯蔵穴／南東隅角に115cm×105cmで深さ52cmの箱形に掘り込まれている。カマド／東壁中央やや南寄りに設けられ、火床面は床面レベルより6cm低く設けられ、被熱痕が明瞭である。僅かであるが両側の袖が遺存し、構築材は暗灰色粘質土である。壁溝／東壁際を除いて廻る。掘り方／深さ6～15cmの浅い掘り込みがカマド下からその周辺にかけてみられる。床下土坑／平面形が方形や楕円形で壁の立ち上がりが緩やかな皿状の土坑が6基確認された。深さはいずれも35～40cmで、埋没土に焼土塊と細かい炭を2～3%含む。柱穴／カマド前と西壁際に2穴確認され、深さはいずれも15～20cmと浅い。遺物出土状態／出土個体数は39点で、土師器の甕が4点・台付き甕が2点・坏が13点、須恵器の甕が2点・坏が11点・蓋が6点である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。

8号住居跡 (第15～17図、表3、図版4-3～7、図版11)

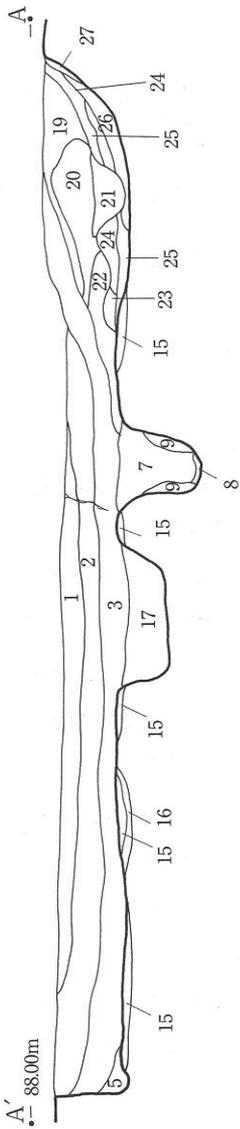
位置／調査区中央C-5・6グリッド。遺存状態／概ね良好。平面形／方形。規模／東西辺7.15m×南北辺



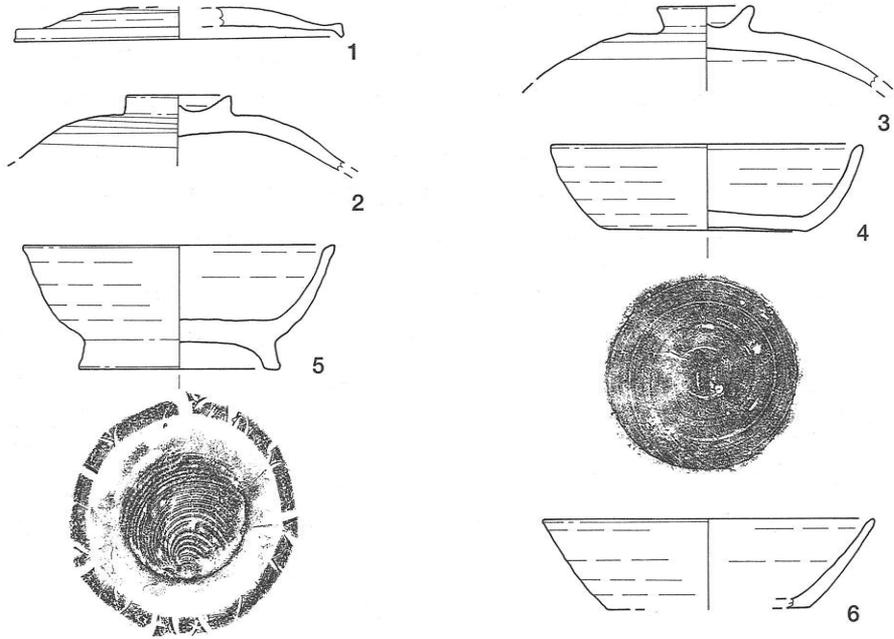
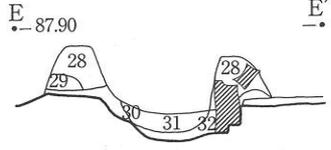
第14図 7号住居跡とその遺物実測図



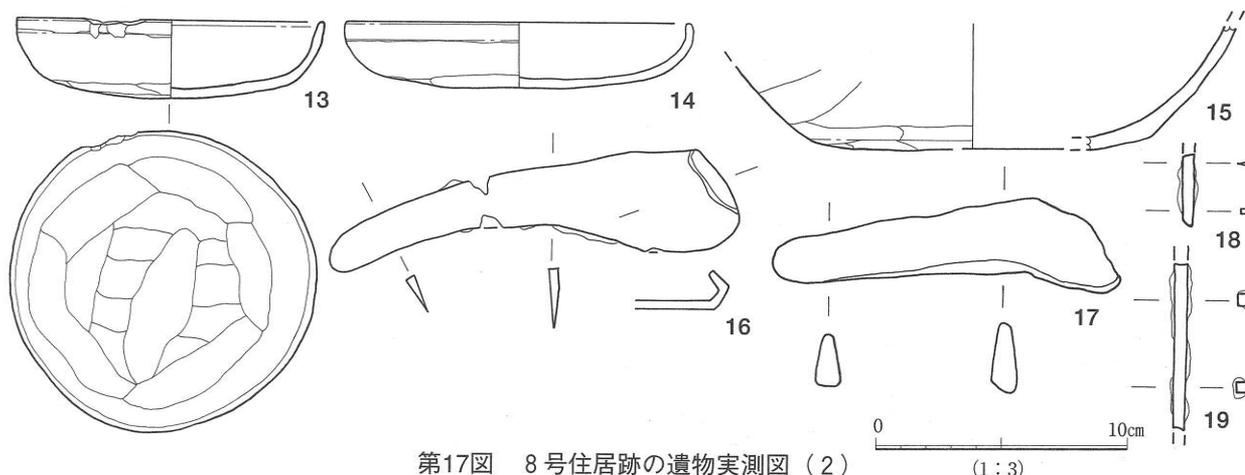
第15图 8号住居跡実测图



- | | | |
|----------|-----------|------------|
| 1層 極暗褐色土 | 13層 褐色土 | 25層 暗赤色土 |
| 2層 黒褐色土 | 14層 暗灰色土 | 26層 橙色焼土 |
| 3層 暗褐色土 | 15層 暗褐色土 | 27層 暗赤色焼土 |
| 4層 黄褐色土 | 16層 褐色土 | 28層 暗灰色粘質土 |
| 5層 明褐色土 | 17層 暗褐色土 | 29層 褐色粘質土 |
| 6層 暗灰色土 | 18層 暗灰色土 | 30層 暗褐色土 |
| 7層 暗褐色土 | 19層 暗褐色土 | 31層 赤橙色焼土 |
| 8層 褐色土 | 20層 褐色土 | 32層 暗赤色土 |
| 9層 褐色粘質土 | 21層 暗褐色土 | |
| 10層 褐色土 | 22層 暗赤色土 | |
| 11層 暗灰色土 | 23層 極暗褐色土 | |
| 12層 暗褐色土 | 24層 暗赤色土 | |



第16図 8号住居跡とその遺物実測図(1)



第17図 8号住居跡の遺物実測図(2)

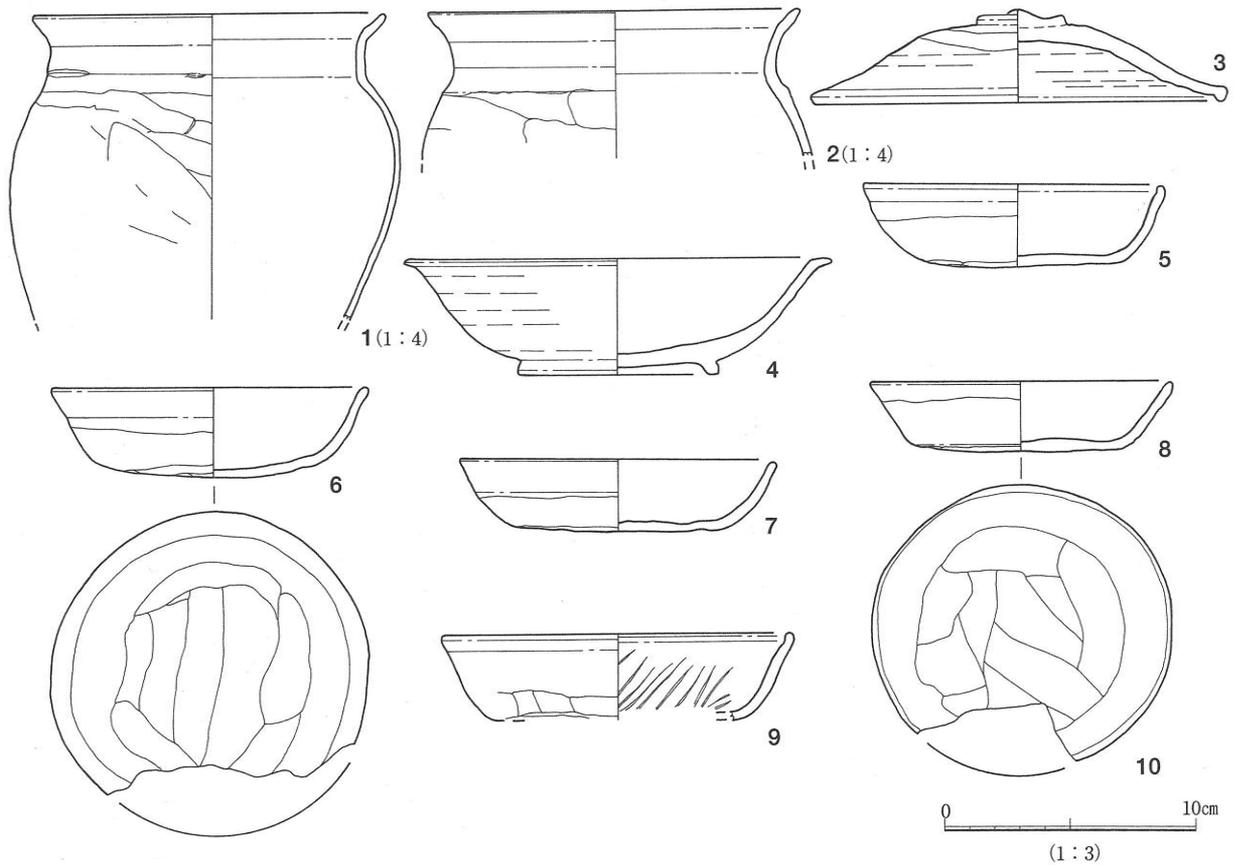
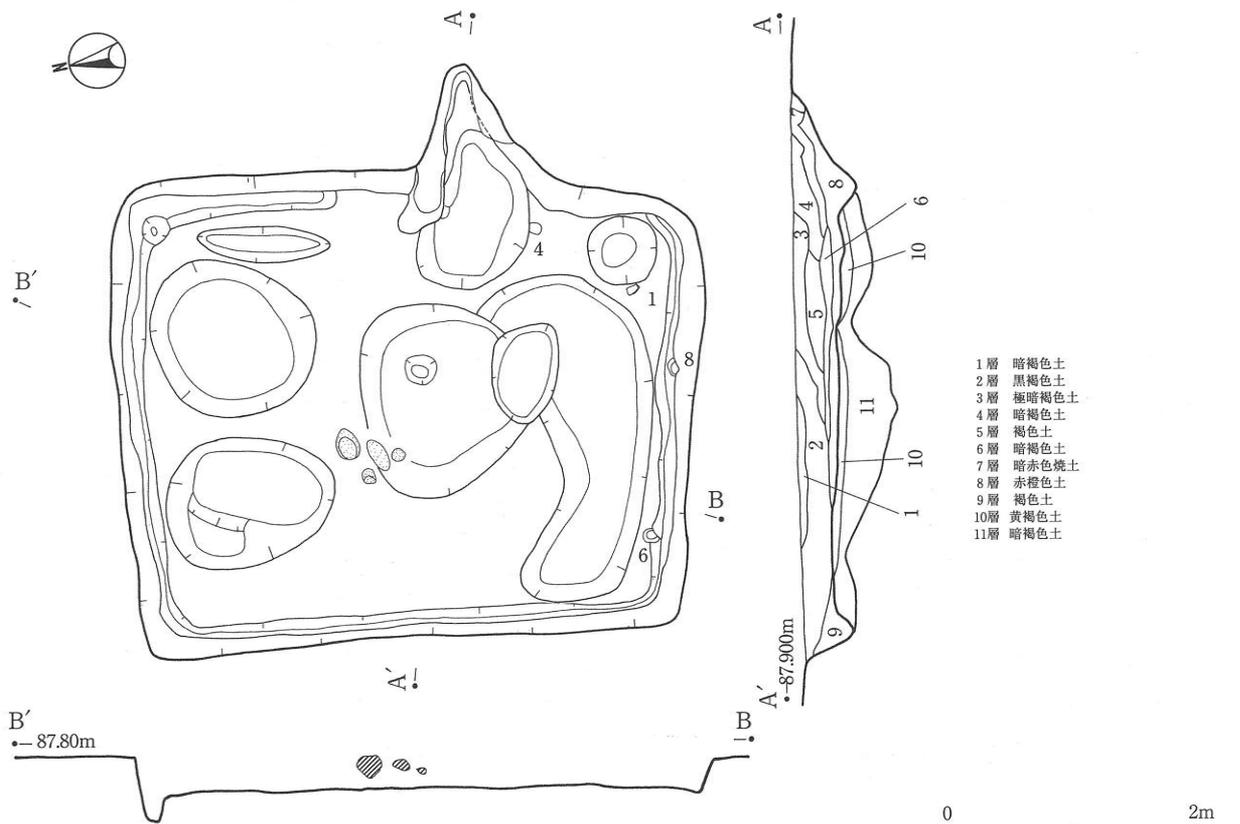
8.35m。残存壁高/40~45cm。主軸方位/N-85°-E。床面積/59.5㎡。床面/平坦面である。埋没状態/土層断面に墳砂痕あり。貯蔵穴/南東隅角に105cm×80cmで深さ48cmの箱形に掘り込まれている。カマド/東壁中央やや南寄りに付設され、火床面は床面レベルより10cm程低く設けられ、被熱痕が明瞭である。両側の袖が遺存し、構築材は暗灰色粘質土である。袖の芯に角柱状の安山岩切り石を使い、袖内壁は被熱痕が明瞭でレンガ状である。柱穴/主柱穴が対角線上に4穴検出され、各柱穴の深さはP-1が78cm、P-2が82cm、P-3が86cm、P-4が80cmである。柱穴埋土に褐色粘質土を用い、柱痕も確認できた。また床下土坑として扱った柱穴状の掘り込みが各主柱穴の南側に確認され、主柱穴の据え替えも想起できる。壁溝/カマド下を除いて全周する。床下土坑/茶色で図示したように箱形の土坑が床面に11基確認され、その重複関係から少なくとも3期に分かれた掘り込み時期があるとみられる。また、柱穴P-2とP-3の間に位置する土坑は上面に貼床が施されていないことから、本跡廃絶時に使用されていた可能性が伺える。他の土坑はいずれも埋没土に焼土塊や細かい炭・灰色シルト塊を含むなど一気に埋め戻した状態が伺える。遺物出土状態/出土個体数は59点で、土師器の甕5点・台付き甕2点・甑1点・鉢1点・坏19点、須恵器の甕4点・坏16点・蓋8点、鉄製品が4点である。貯蔵穴内から坏2点が重なって出土。カマド前の掘り方内から鋤先が出土。

9号住居跡 (第18図、表3・4、図版4-8・図版5-1、図版11・12)

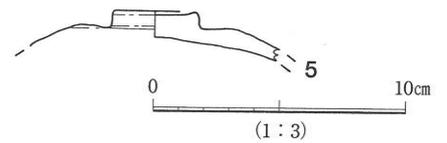
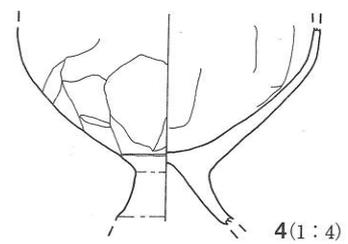
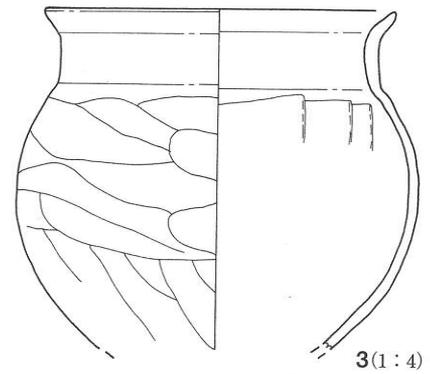
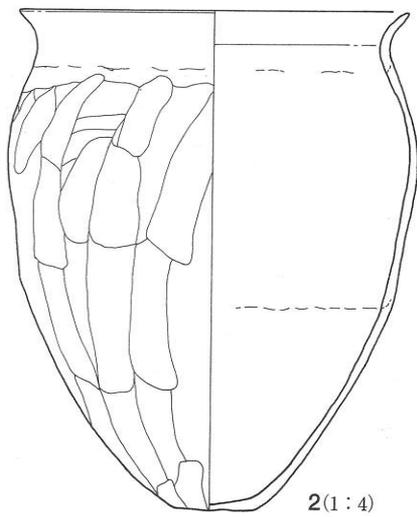
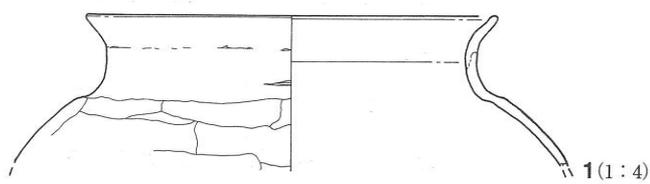
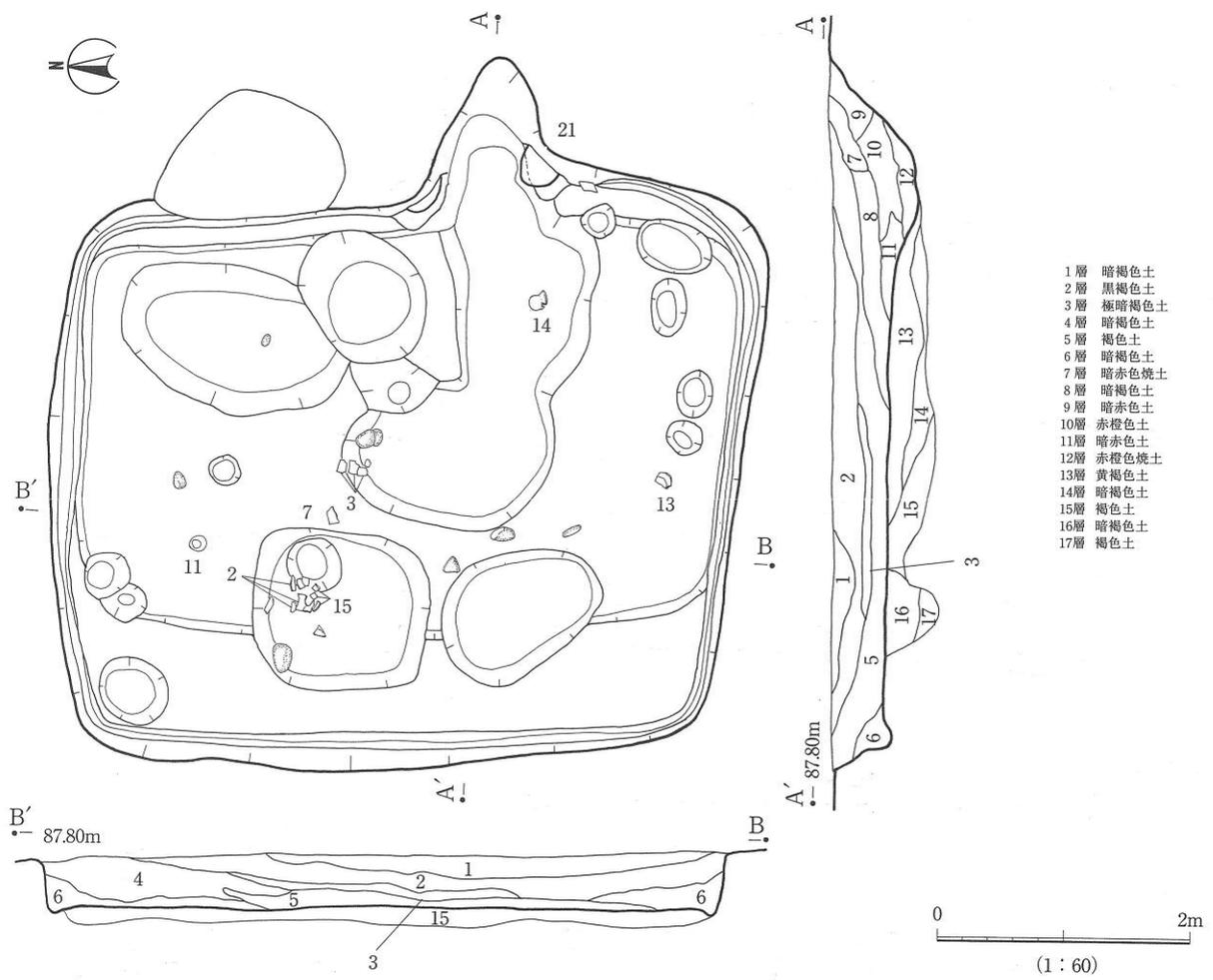
位置/調査区中央C-5グリッド。遺存状態/概ね良好。平面形/方形。規模/東西辺3.50m×南北辺4.30m。残存壁高/22~31cm。主軸方位/N-98°-E。床面積/15.0㎡。床面/灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、若干凹凸のある面になっている。貯蔵穴/南東隅角に55cm×50cmで深さ50cmの箱形に掘り込まれている。カマド/東壁中央やや南寄りに付設され、火床面は床面レベルより13cm程低く設けられている。北側の袖が遺存し、構築材は褐色粘質土である。壁溝/全周する。床下土坑/楕円形や不整形な様々な形態の土坑が5基検出された。遺物出土状態/出土個体数は36点で、土師器の甕が4点・台付き甕が3点・坏が14点、須恵器の甕が3点・坏が7点・蓋が4点、灰釉陶器の坏が1点である。中央に川原石4個出土。

10号住居跡 (第19~21図、表4・5、図版5-2~4、図版12・13)

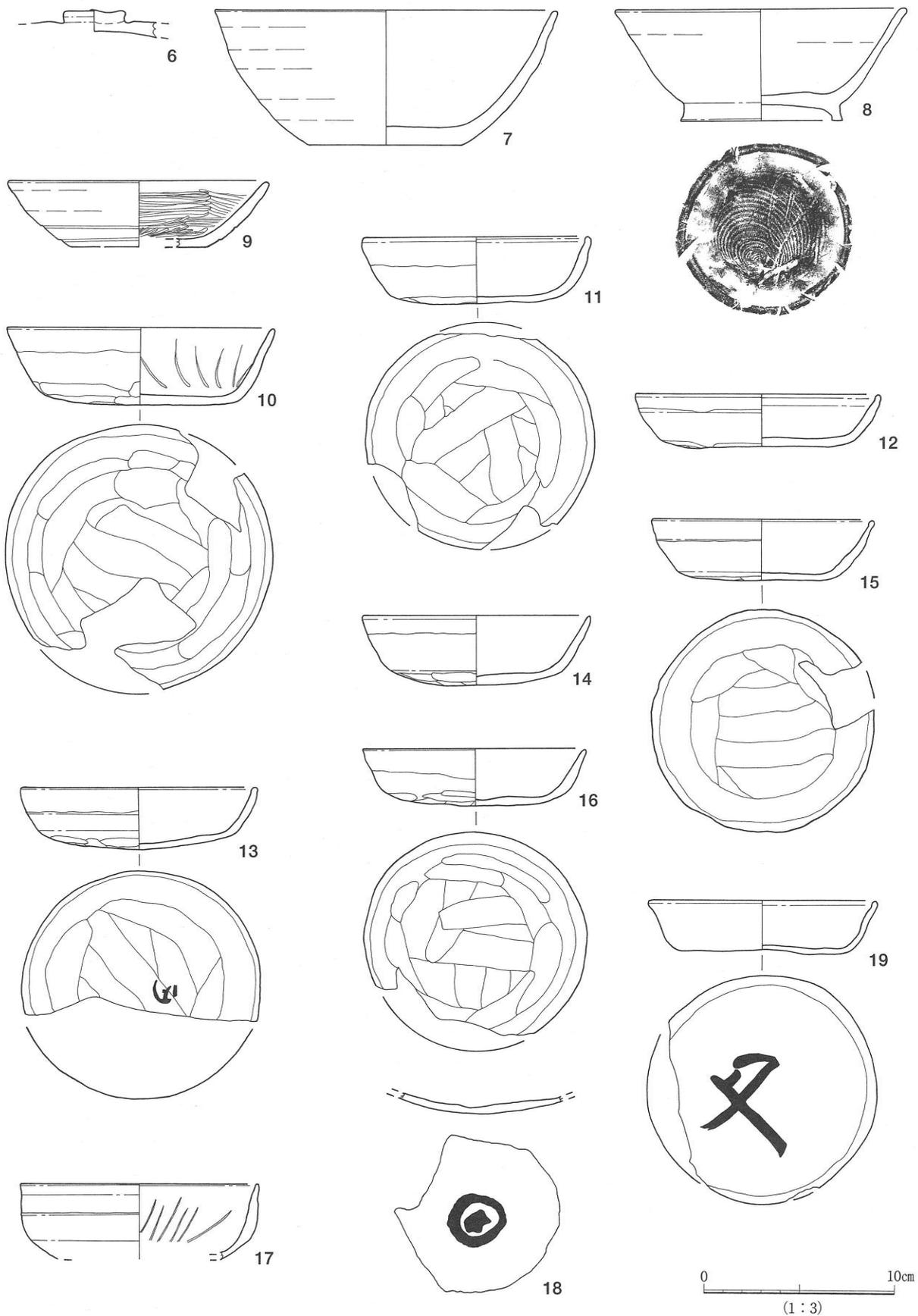
位置/調査区中央B-3グリッド。遺存状態/27~29号土坑に切られているが、概ね良好。平面形/方形。規模/東西辺4.30m×南北辺5.40m。残存壁高/40~45cm。主軸方位/N-89°-E。床面積/23.1㎡。床面/床面標高は87.20mで平坦である。埋没状態/床面直上から埋没土にかけて本跡全域に焼土や炭を確認したが、上屋を想起できるような明瞭な残り方ではなかった。また、土層断面の4・5層はシルト塊やロー



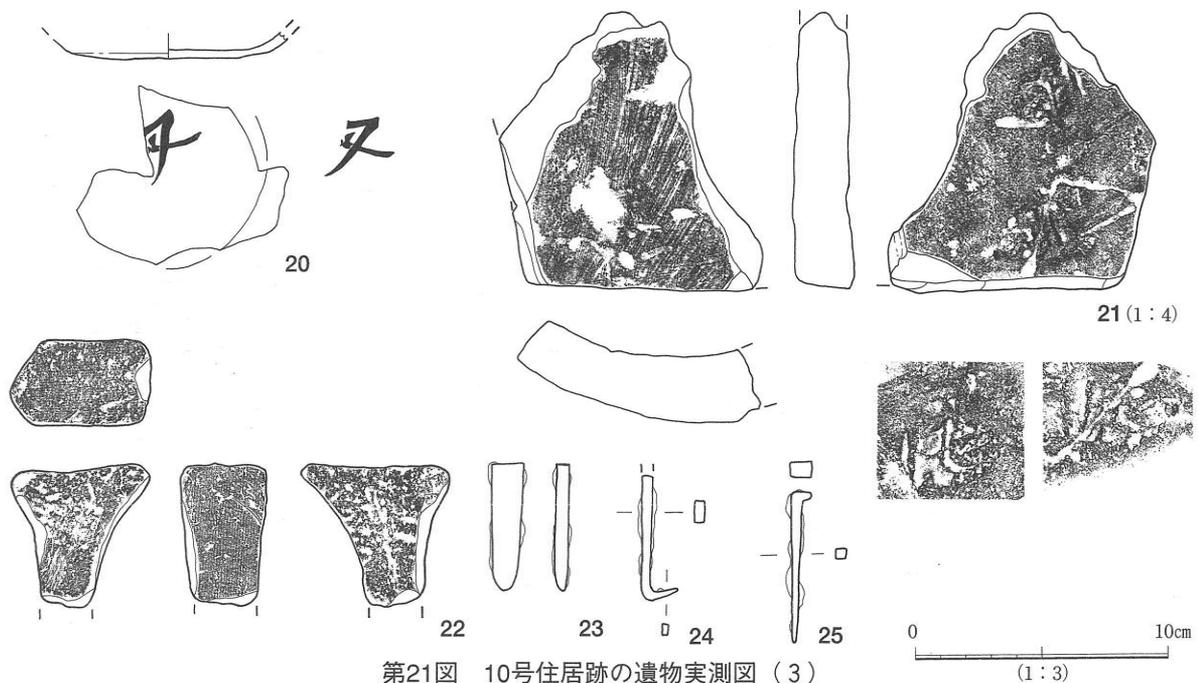
第18図 9号住居跡とその遺物実測図



第19図 10号住居跡とその遺物実測図(1)



第20図 10号住居跡の遺物実測図(2)



第21図 10号住居跡の遺物実測図(3)

ム塊を多く含み一気に埋め戻した状態が伺える。カマド/褐色粘質土を構築材とする両袖が僅かではあるが遺存する。火床面は、床面レベル8cm低く設けられ被熱痕明瞭。壁溝/全周する。掘り方/本跡東側3/4に深さ25~37cmの竪穴状の掘り込み。床下土坑/箱形やすり鉢形で深さ44~53cmの土坑が5基検出され、いずれもの掘り方を切って掘り込まれている。遺物出土状態/本跡が火災焼失という原因からか出土個体数は71点と多く、土師器の甕が5点・台付き甕が4点・甌が1点・坏が29点、須恵器の甕が3点・鉢が1点・坏が13点・蓋が9点、瓦が2点、砥石が1点、鉄製品が3点である。本跡中央部に集中がみられる。

11号住居跡 (第22図、表5、図版5-5、図版13)

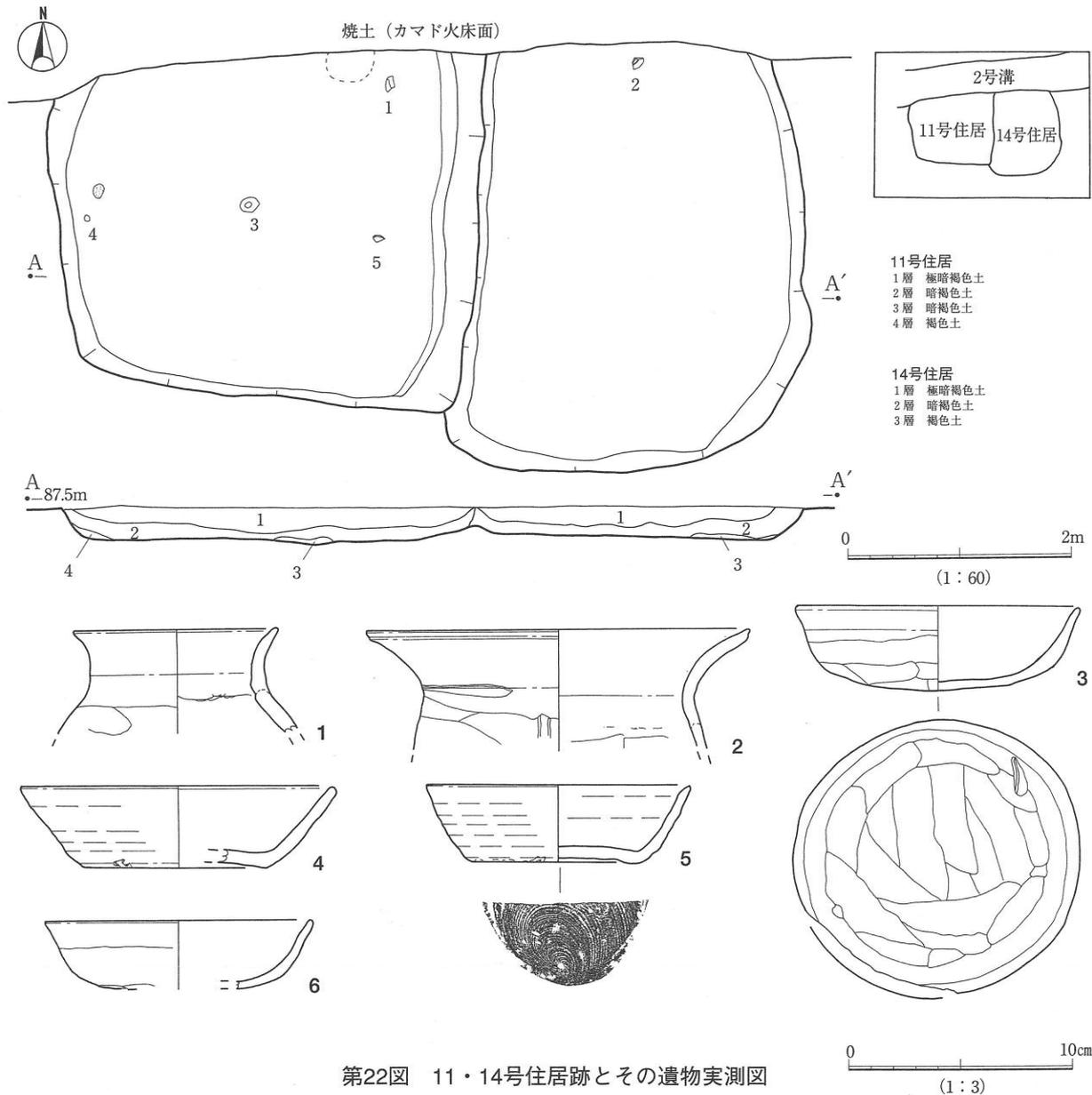
位置/調査区南側B-1グリッド。重複状態/東側で14号住居跡を切り、北側を2号溝に切られている。平面形/方形。規模/東西辺3.35m×南北辺3+a m。残存壁高/30~34cm。主軸方位/N-89°-E。床面積/-m²。床面/灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。床面標高は87.20mである。埋没状態/概ねレンズ状の自然堆積である。カマド/東壁中央やや南寄りに付設され、2号溝に切られて被熱痕の残る火床面だけが確認できた。壁溝/ない。掘り方/ない。遺物出土状態/出土個体数は17点で、いずれも埋没土からの出土である。土師器の甕が2点・坏が6点、須恵器の坏が6点・蓋が3点である。

12号住居跡 (第23図、表5、図版5-6、図版13)

位置/調査区南側D-1グリッド。遺存状態/概ね良好。平面形/方形。規模/東西辺3.35m×南北辺4.20m。残存壁高/20~25cm。主軸方位/N-87°-E。床面積/14.0m²。床面/灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。柱穴/30~45cmの深さのものが3穴検出された。掘り方/ない。カマド/確認できなかった。遺物出土状態/出土個体数は14点と僅少で、いずれも埋没土からの出土である。土師器の甕が3点・坏が7点、須恵器の坏が3点・蓋が1点である。

13号住居跡 (第24図、表5、図版5-7、図版13)

位置/調査区中央D-5グリッド。重複状態/西側を僅かではあるが切られている。平面形/矩形。規模/東西辺5.15m×南北辺4.30m。残存壁高/12~24cm。主軸方位/N-93°-E。床面積/22.2m²。床面/ほぼ平

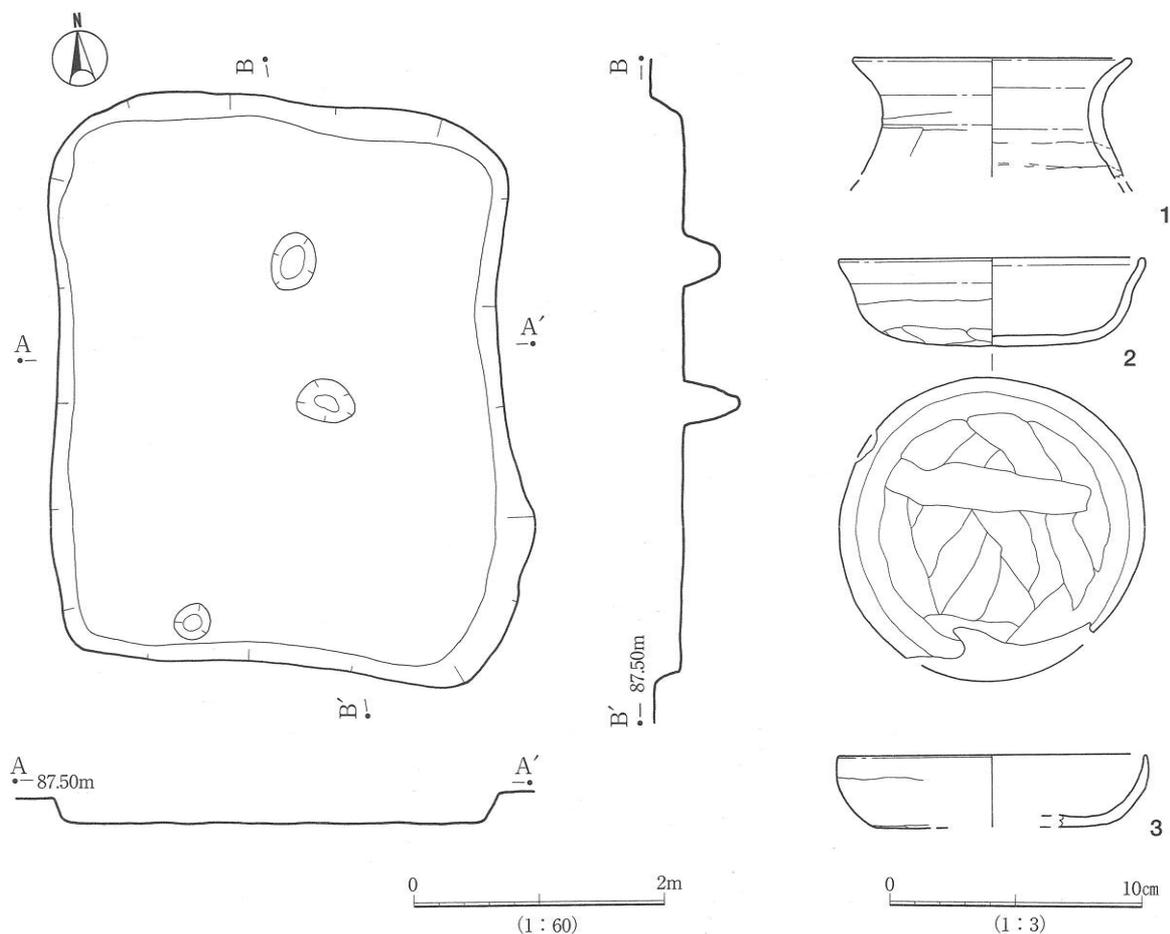


第22図 11・14号住居跡とその遺物実測図

坦な面になっており、全体に軟弱である。埋没状態／概ねレンズ状の自然堆積である。土層断面に墳砂痕が観察された。カマド／東壁中央に付設されている。東壁側が耕作によって削平されており、煙道部は確認できなかった。火床面は床面レベルより5cm程低く設けられ、被熱痕が明瞭である。袖は崩壊流失しており、明確にすることはできなかった。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は30点で、土師器の甕が4点・坏が9点、須恵器の甕が2点・瓶が1点・坏が9点・盤が1点・蓋が4点である。遺物は中央から南壁にかけて集中がみられる。

14号住居跡 (第22図、表5、図版5-8、図版13)

立地／調査区北側C-1グリッド。重複状態／北側と西側をそれぞれ2号溝と11号住居跡に切られている。平面形／矩形。規模／東西辺 $2.7+a$ m×南北辺 $3.8+a$ m。残存壁高／25~31cm。主軸方位／N-89°-E。床面積／- m^2 。床面／灰色シルト層であるV層中位に敷かれ、ほぼ平坦な面になっている。中央に部分的に踏み固めが認められた。カマド／確認できなかった。壁溝／ない。掘り方／ない。遺物出土状態／出土個体数は12点と僅少で、いずれも埋没土からの出土である。遺物の在り方に集中した箇所は特にみられない。



第23図 12号住居跡とその遺物実測図

2. 掘立柱建物跡

今回の調査で明確に掘立柱建物跡として捉えられたのは調査区中央南側の1号掘立柱建物跡1棟であったが、調査区中央北側のE-9グリッドに散在する柱穴状の掘り込み（ピット群）は建物跡を構成する可能性がある。

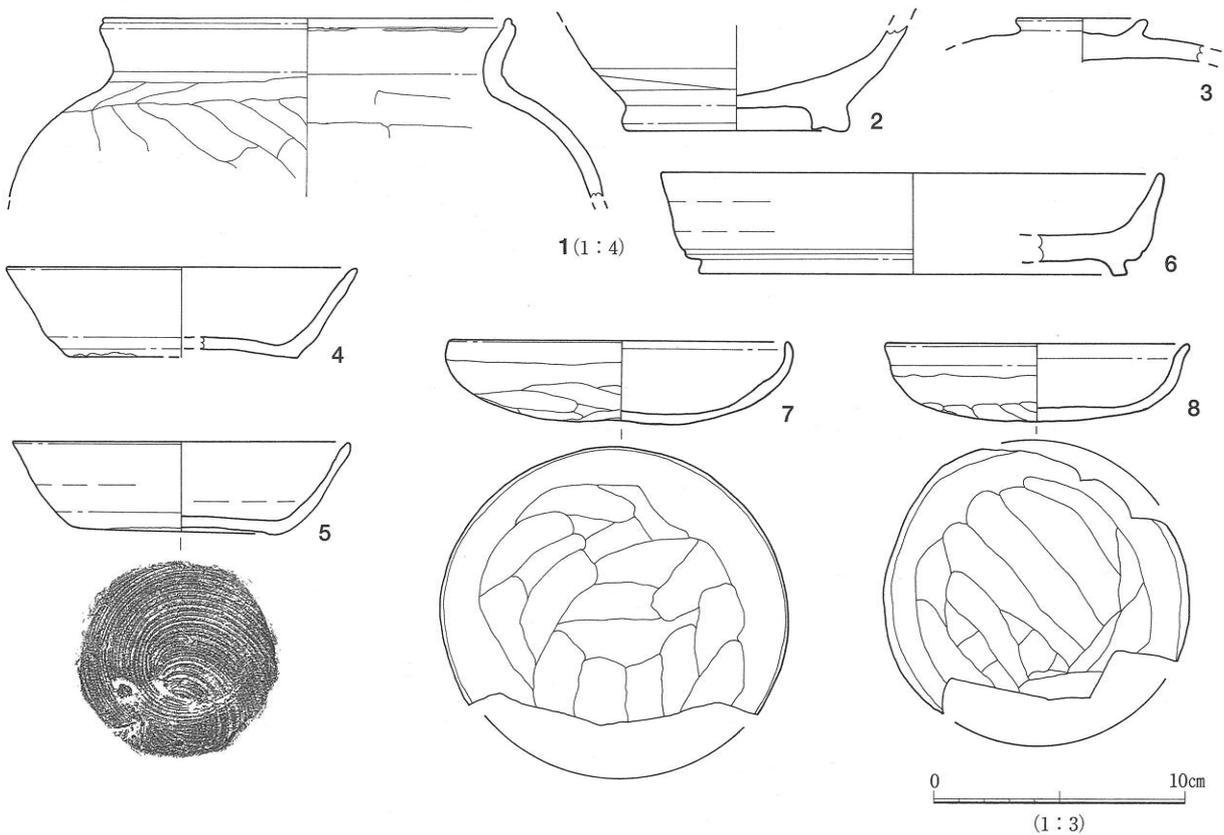
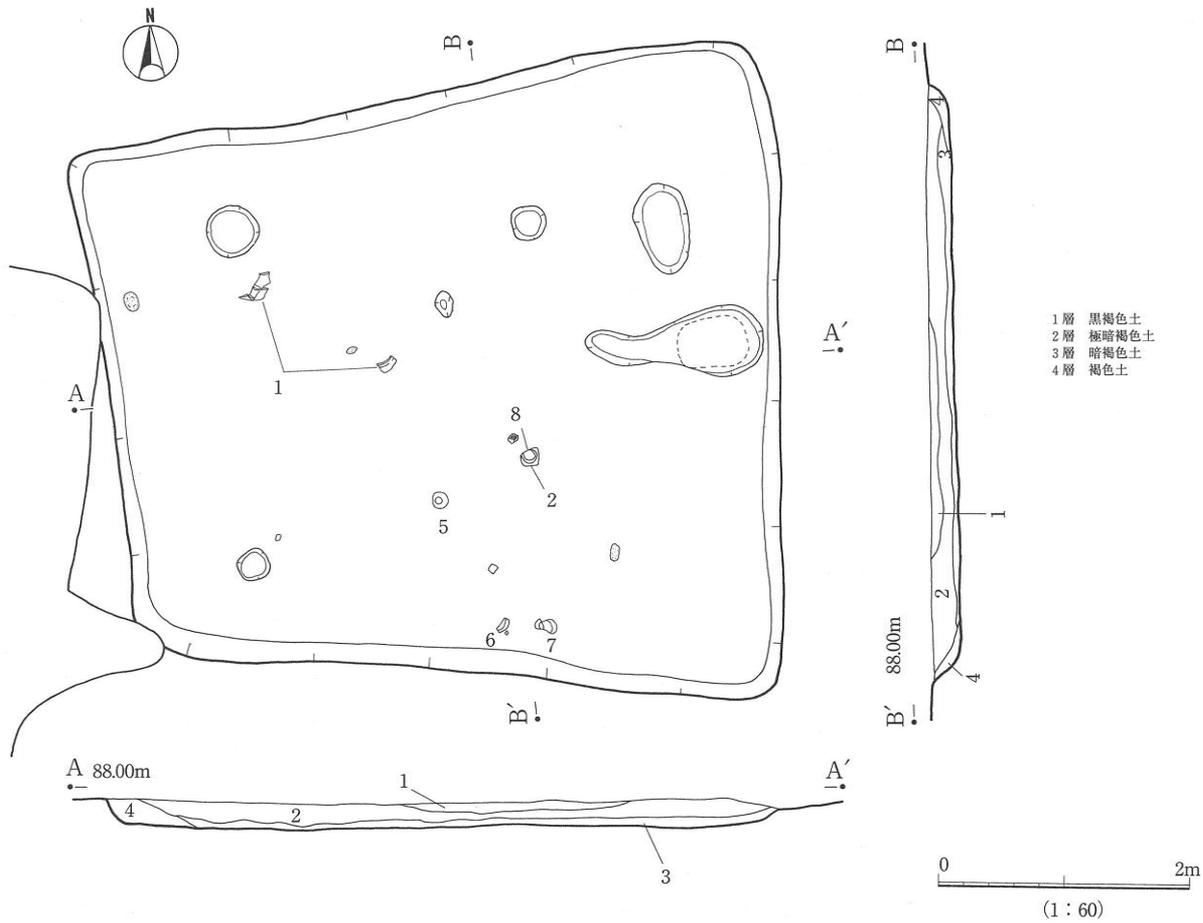
1号掘立柱建物跡（第25図、表6、図版6-1~10、図版14）

立地／調査区北側C-1グリッド。遺存状態／柱穴の掘り込みが深く、良好である。規模／2×2間、東西辺（桁行）4.85m×南北辺（梁行）4.85m。柱間は桁行総長15尺で7尺半等間、梁行総長15尺で7尺半等間。柱穴／径70~85cmの円形及び楕円形で、深さ55~70cmである。図中にスクリーントーンで示した部分が暗褐色土主体の柱痕である。1・2層は灰色粘土塊を含む埋込土である。桁行方位／N-87°-E。遺物出土状態／出土個体数は3点で、いずれも柱穴内からの出土である。1はP-3内、2はP-6内、3はP-7内からそれぞれ出土した。

3. 土坑（第26・27図、表6、図版6-11~14・図版7・図版8-1・図版14）

合計29基の土坑が検出された。そのうち平安時代に属するのは23・26~29号土坑である。他は出土遺物がなく、帰属年代は不明であるが大まかながら近世以降の耕作に伴う穴とみられる。

23号土坑はD-9グリッドに位置し、長軸1.10cm×短軸52cm、深さ20cmの長楕円形で底面から図示した土師器杯（23土-1）が1点出土した。また、埋込土中に炭や焼土は検出されなかった。26号土坑はB-4グリッドに位置し、長軸1.72cm×短軸105cm、深さ25cmの長楕円形で底面はほぼ平坦である。底面に炭と灰混じりの焼土が厚さ5cmで堆積し、焼土中から図示した土師器杯2点（26土-1・26土-2）が出土した。



第24図 13号住居跡とその遺物実測図

骨片は確認できなかったが、本跡は火葬跡の可能性はある。28号土坑はB-3グリッドに位置し、10号住居跡を切っている。規模は長軸3.10m×短軸0.80m、深さ25cmの長楕円形で底面から炭混じりの薄い焼土層が確認され、土師器杯の細片が3点出土した。27・29号土坑は共にB-3グリッドに位置し、10号住居跡を切っている。底面から川原石が出土し、2基は建物跡を構成する柱穴の可能性もある。もし、建物跡と考えると柱間の芯々距離4.85m（15尺）になり、建物の大半は東側の調査区域外に位置するとみられる。

他の近世以降に帰属するとみられる土坑は、11号土坑のように円形で底面周縁が溝状に浅く窪みものと15号坑のように長方形で底面が平坦なものの2形態に分けられる。前者は桶を埋設したものとみられ、他に6・7・9・12～14・16・17が同形態である。後者は芋穴など耕作及び貯蔵用に掘られたものとみられ、他に2・3・18・21・22・24が同形態である。

4. 井戸跡

1号井戸跡（第28図、表6、図版8-3、図版14）

位置／調査区北側G-11・H-11グリッド。重複状態／道路跡に切られている。平面形／矩形。規模／長軸1.80m×短軸1.55m。残存壁高／2.25m。長軸方位／N-47°-E。形態／井戸側はみられず、調査状況では素掘りである。底面は平坦で透水層である砂礫層に設けられ、調査時でも湧水があった。壁面中位がオーバーハングしているのは埋没過程で崩壊したためとみられる。遺物出土状態／底面に大きな川原石が置かれていた。8層中から中世の所産とみられる図示した鉢1点（1号井戸-1）が出土した。

2号井戸跡（第28図、図版8-4.5）

位置／調査区中央D-9グリッド。重複状態／3号住居跡を切っている。平面形／ほぼ円形。規模／径0.85m。残存壁高／図化しなかったが、重機掘削による断ち割りで底面まで2.65mの深さを確認。形態／素掘りである。遺物はまったく出土しなかった。近代以降のものとみられる。

5. 焼土跡（第28図）

調査区中央C-4グリッドで焼土跡を3か所確認した。いずれも深さ10cm程の皿状の掘り込みに灰混じりの焼土が充填され、底面に明瞭な被熱痕を確認。遺物は出土せず、帰属年代は不明である。

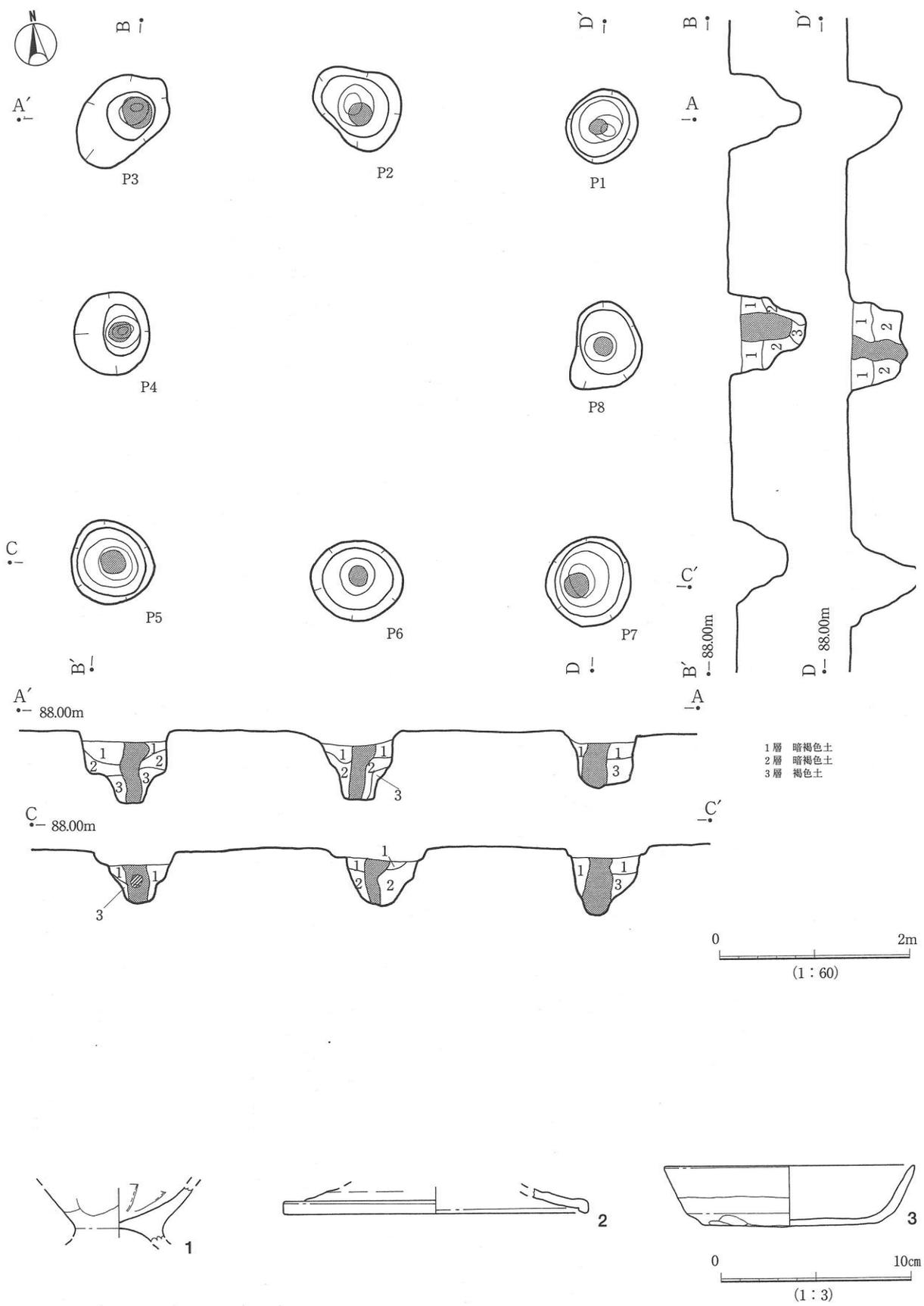
6. 道路跡（第28図、図版8-6）

位置／調査区北側G-11・H-11グリッド。重複状態／3号住居跡と1号井戸跡を切っている。規模／幅2.40m、深さ40cm。走行方位／N-140°-Eで走行し西側で北寄りにはほぼ直角に折れる。掘り方／わだち状に掘り込まれ、硬化面が2面確認された。帰属年代／遺物は出土しなかったが、本跡の掘り込み面と重複状態から近世以降のものとみられる。

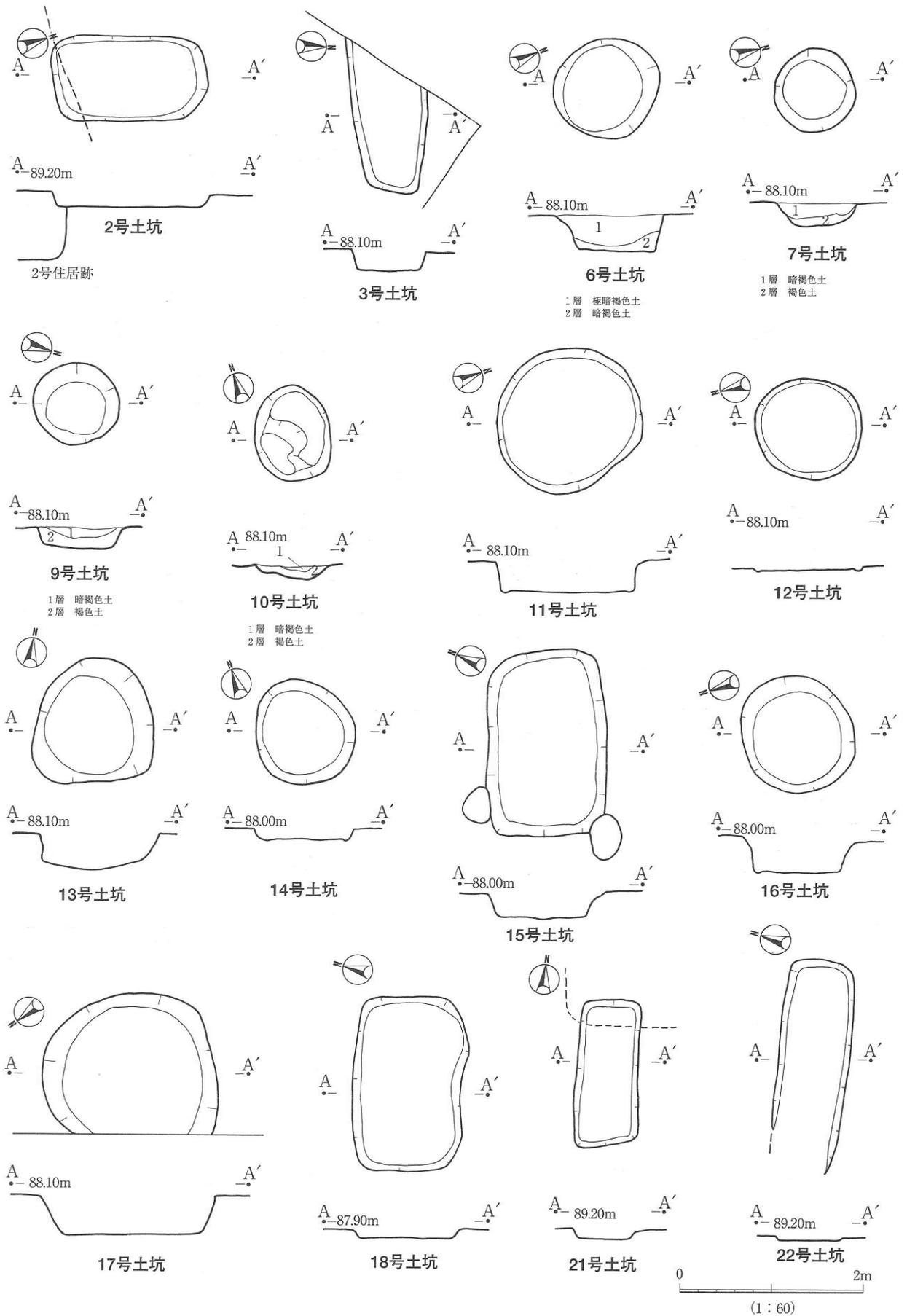
7. 溝状遺構

1号溝状遺構（第29図、図版8-7）

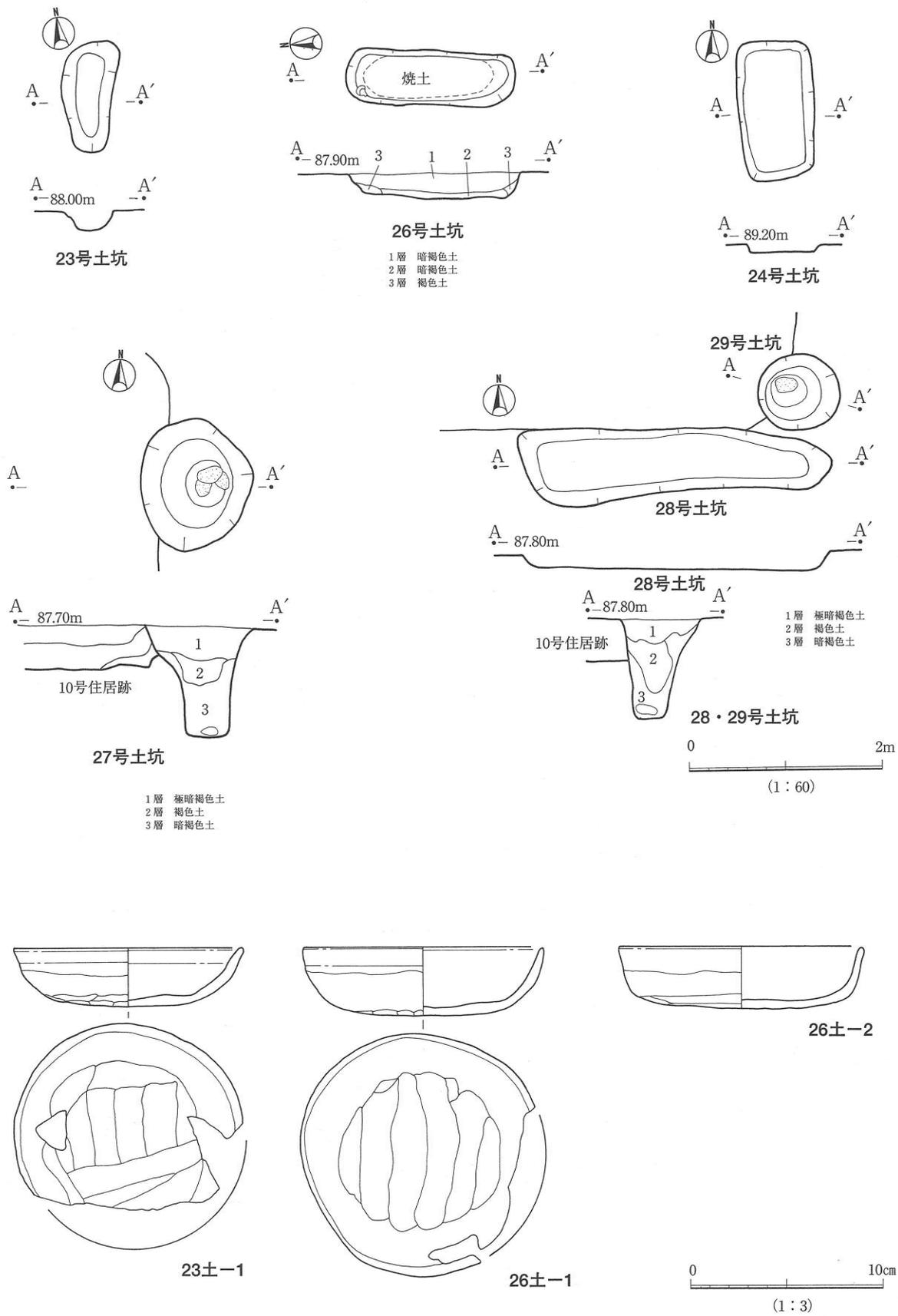
位置／調査区南側D-1グリッド。遺存状態／調査区の南東端に部分的に確認しただけで、本跡の大半は南側の調査区域外に延びる。走行方位／N-95°-Eで西から東へ直線的に走行するとみられる。用途／底面に川砂と酸化鉄の沈着が確認され、灌漑用とみられる。帰属年代／遺物は出土しなかったが、本跡の掘り込み面から中世以降のものとみられる。



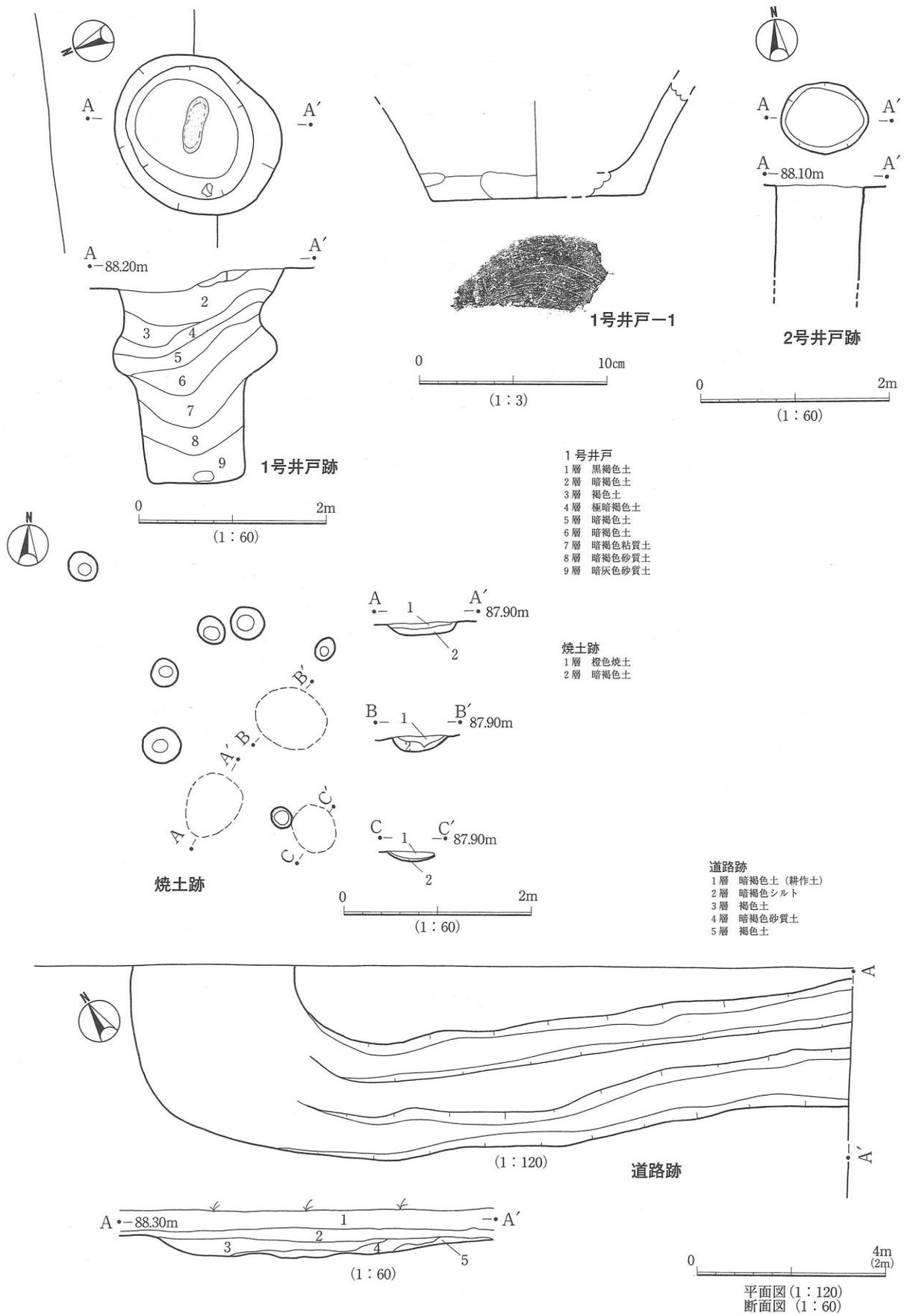
第25図 1号掘立柱建物跡とその遺物実測図



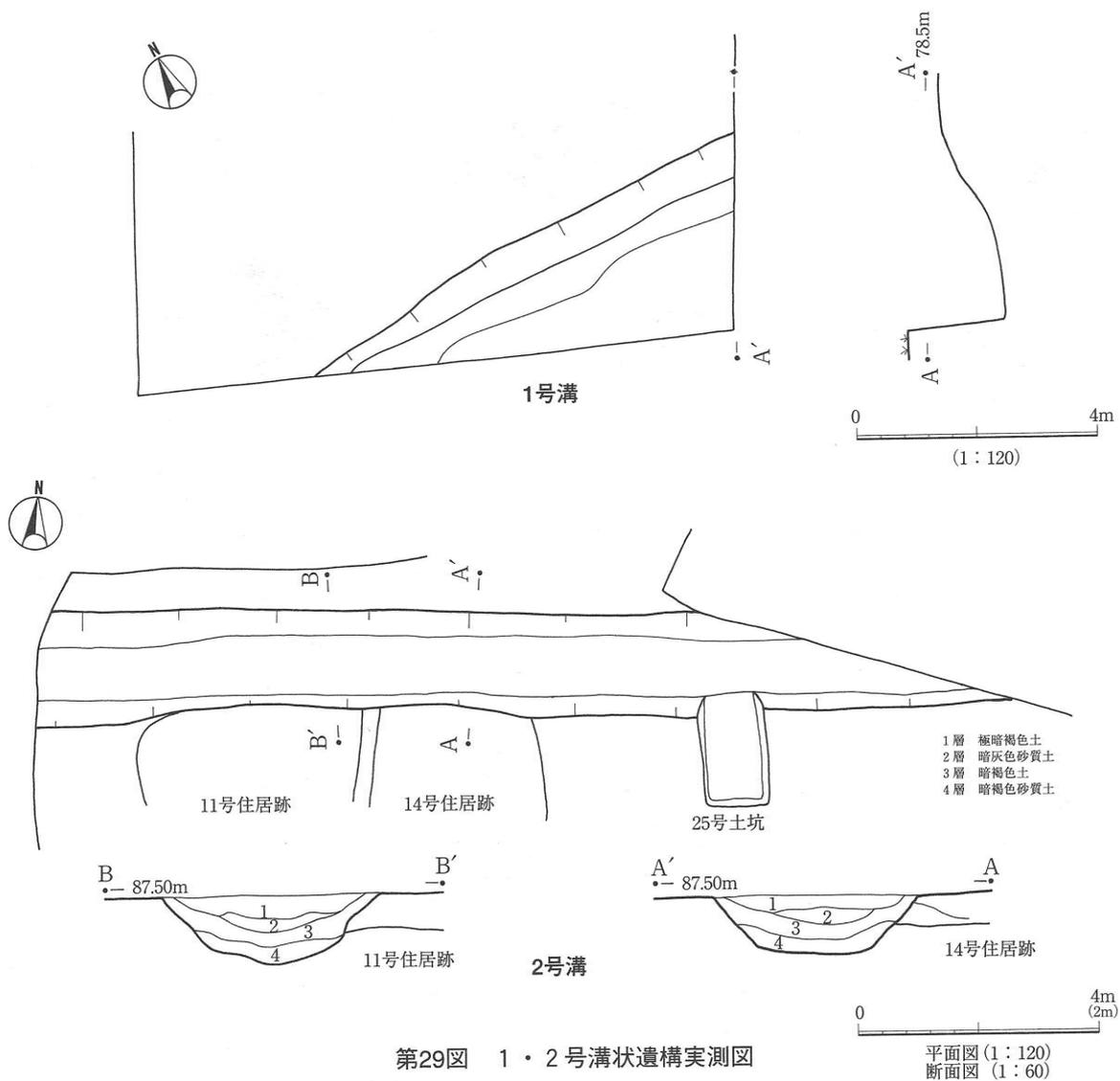
第26图 土坑实测图



第27図 土坑実測図と23・26土坑遺物実測図



第28図 1・2号井戸跡と焼土跡と道路跡及び1号井戸跡遺物実測図



第29図 1・2号溝状遺構実測図

2号溝状遺構 (第29図、図版8-8)

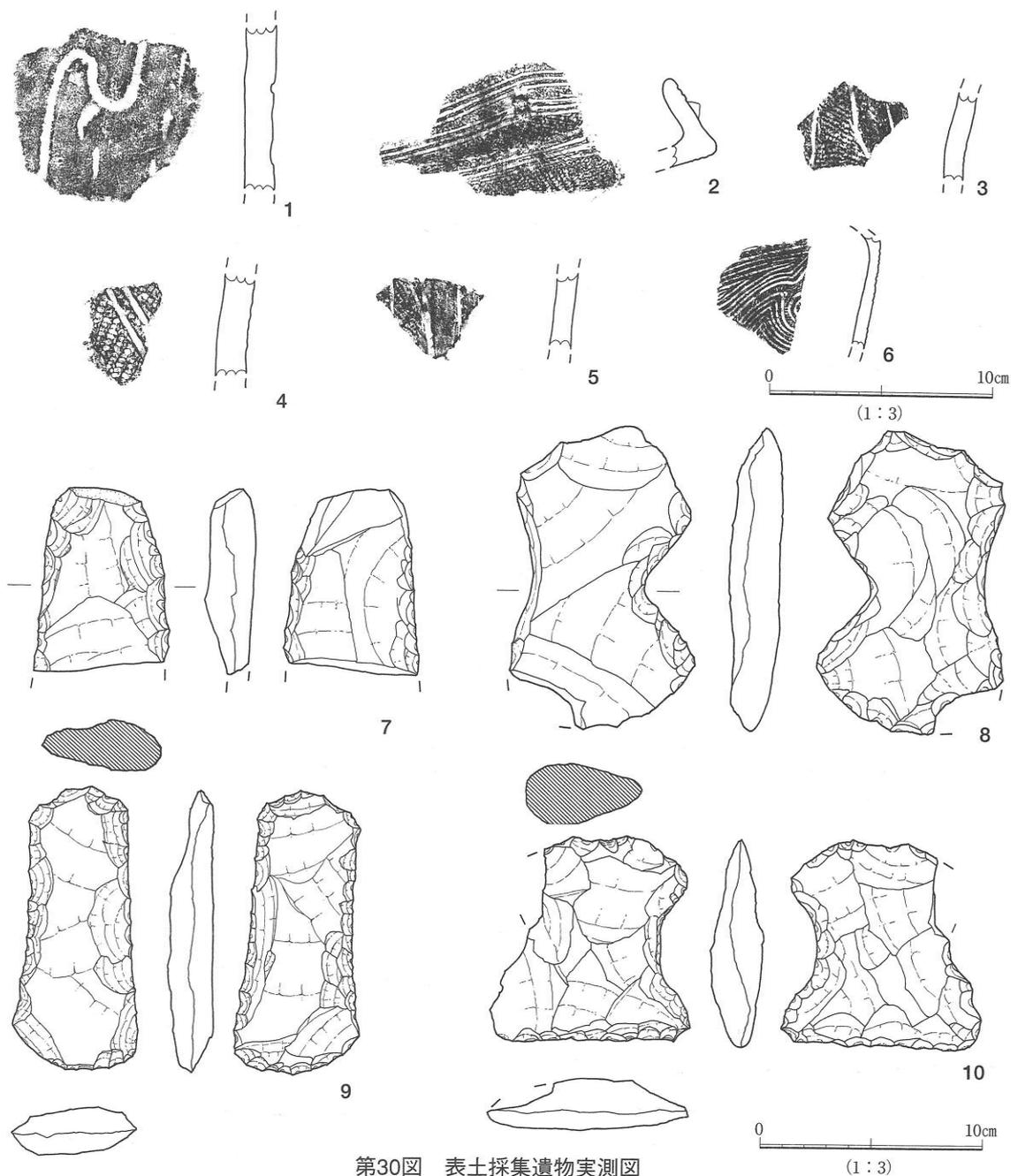
位置／調査区南側D-2・C-2グリッド。重複状態／11・14号住居跡を切り、25号土坑に切られている。
断面／逆台形。規模／上端幅1.60m、下端幅0.80m、深さ45～55cm。走行方位／N-86°-Eで西から東へ直線的に走行。用途／埋没土の最下層である4層中に川砂が互層になって多量に混じっていることと底面に酸化鉄が沈着していることから灌漑用のものとみられる。底面は西から東へ約3°の緩やかな勾配で下る。帰属年代／遺物は出土しなかったが、重複状態から中世以降のものとみられる。

8. 表土採集遺物 (第30図、表6、図版14)

今回の調査で、表土中から採集されたり遺構埋没土中から出土しても時期的に伴わないとした遺物は総量で小型整理箱に1箱分である。縄文時代前期の諸磯b式・縄文時代後期の称名寺I式の深鉢形土器やそれに伴う石器がみられる。

VI 結 語

調査区内の所々に地震によるとみられる液状化現象の痕跡(噴砂)が確認された。この噴砂は埋没土中に



第30図 表土採集遺物実測図

観察できる竪穴住居跡と観察できない竪穴住居跡があり、その年代から『類聚国史』に「弘仁九年」（818年）七月、相模、武蔵、下総、常陸、上野、下野等国、地震、山崩谷埋数里、圧死百姓不可勝計」という記述があり、本遺跡の墳砂痕もこの地震に起因するものと見られる。尚、本遺跡で埋没土中に墳砂痕が確認できたのは2・6・8・13号住居跡である。墳砂痕が確認できなかった住居跡も含めて、住居跡からの出土遺物と818年の墳砂痕との対比も興味深いところである。

参考引用文献

- 寒川 旭 「筑井八日市遺跡における地震の痕跡」 『筑井八日市遺跡』（財群馬県埋蔵文化財調査事業団（1994年））
- 内田憲治他 『赤城山南麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害－』群馬県新里村教育委員会（1991年）
- 坂口 ・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究第24号』群馬県史編纂委員会（1986年）

表1 遺物観察表(1)

遺構	遺物番号	器種	器高×口径×底径 (cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
1号住居跡	第6図1	土師器甕	- × - × -	胴部上半1/3	口縁はコの字に近い形状になるとみられる。胴部外面篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②橙③酸化	中央床面直上
	第6図2	土師器坏	- × - × 7.2	細片	底部は回転篋削り調整。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第6図3	土師器坏	- × 12.4 × -	細片	体部外面横位篋削り。	①砂粒・角閃石 ②にぶい橙③酸化	埋没土
2号住居跡	第8図1	土師器甕	38.2×22.5×3.4	完存	口縁部短く外反し、胴部外面斜位及び縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい黄橙③酸化	カマド構築材
	第8図2	土師器甕	41.9×22.6×4.0	ほぼ完存	口縁部短く外反し、胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②浅黄橙③酸化	カマド構築材
	第8図3	土師器甕	- × 21.3 × -	底部欠損	口縁部短く外反し、胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石・片岩②にぶい黄橙③酸化	カマド構築材
	第8図4	土師器甕	- × 21.2 × -	口縁部1/3	口縁部短く外反し、胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・長石・石英 ②にぶい橙③酸化	カマド構築材
	第9図5	土師器甕	40.8×23.2×2.4	完存	胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・長石②にぶい橙 ③酸化	カマド構築材
	第9図6	土師器甕	- × - × 5.8	口縁部欠損3/4	口縁部短く外反し、胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい橙③酸化	カマド構築材
	第9図7	須恵器瓶	- × 21.2 × -	口縁部	長頸瓶の口縁部片。歯齒状工具で連続刺突文、波状文を施す。	①砂粒・長石②灰③還元	東側床面直上
	第9図8	須恵器鉢	- × - × 8.8	体部下半1/2	体部上半から口縁部を欠損。底部外面は篋削り調整され、孔はない。	①砂粒②灰③還元	東側床面直上
	第9図9	土師器坏	3.8×11.8×-	完存	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②黄橙 ③酸化	南西隅角床面直上
	第9図10	土師器坏	- × 12.4 × -	1/3	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②黄橙 ③酸化	埋没土
	第9図11	土師器坏	- × 12.0 × -	1/3	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土
	第9図12	土師器坏	- × 14.4 × -	1/3	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石・長石②橙 ③酸化	埋没土
	第9図13	土師器坏	- × 12.0 × -	1/4	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい橙③酸化	東側床面直上
	第9図14	土師器坏	2.7×11.8×-	1/5	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②淡黄③酸化	埋没土
	第9図15	土師器坏	2.9×12.0×-	1/5	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②淡黄橙 ③酸化	埋没土
	第9図16	鉄製品鎌	刃部1/2だけで基部を欠損。現存長8.6cm×幅3.5cm×厚さ5.0mm。刃部の湾曲は弱い。				
3号住居跡	第10図1	土師器甕	- × 20.2 × -	口縁部から肩部	口縁部短く外反し、胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石・石英②橙③酸化	南壁際床面直上
	第10図2	土師器台付甕	- × - × -	底部から脚部上半	胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい黄橙③酸化	埋没土
	第10図3	土師器蓋	- × - × 4.6	1/2	摘み部欠損。天井部外面回転篋削り調整。	①砂粒・長石②灰③還元	中央床面直上
	第10図4	須恵器坏	3.5×13.6×9.8	1/2	底部回転糸切り離し無調整。体部下端回転篋削り調整。	①砂粒・長石②白灰③還元	北壁際床面直上
	第10図5	土師器坏	2.7×14.5×7.3	1/2	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	南側床面直上
	第10図6	土師器坏	3.2×13.5×-	1/2	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
	第10図7	土師器坏	3.2×13.2×-	1/2	口縁部直立ぎみに立ち上がり、体部下半から底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石・赤色粒 ②にぶい橙③酸化	南西側床面直上
4号住居跡	第11図1	土師器台付甕	- × - × -	底部から脚部上半	胴部外面縦位篋削り。	①砂粒・角閃石 ②にぶい黄橙③酸化	埋没土
	第11図2	須恵器蓋	- × - × 3.5	2/3	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘みを貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	南側床面直上
	第11図3	須恵器蓋	- × - × 3.1	2/3	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘みを貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	南西側床面直上
	第11図4	須恵器蓋	3.8×18.0×3.4	完存	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘みを貼りつけ。	①砂粒・長石・石英 ②灰③還元	南西側床面直上
	第11図5	須恵器坏	4.5×14.4×6.3	2/3	左回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰 ③還元	南西側床面直上
	第11図6	須恵器坏	3.8×12.5×6.9	ほぼ完存	回転糸切り離し後、底部周縁回転篋削り調整。	①砂粒・長石・黒色粒 ②青灰③還元	埋没土
	第11図7	須恵器坏	3.3×13.0×7.0	1/2	左回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②白灰 ③還元	埋没土
	第11図8	土師器坏	- × 14.4 × -	2/3	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②にぶい橙③酸化	埋没土
	第11図9	土師器坏	- × 12.6 × -	1/2	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙 ③酸化	埋没土

表2 遺物観察表(2)

遺構	遺物番号	器種	器高×口径×底径(cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
4号住居跡	第11図10	土師器 坏	3.3×12.3×3.2	2/3	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②赤色粒・ ③にぶい橙③酸化	埋没土南側 床面直上
	第11図11	土師器 坏	3.3×12.3×3.2	1/2	体部上半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②黄橙③酸化	南東隅角 床面直上
	第11図12	石製品 紡錘車	紡輪。完存。断面は逆台形。上径5.2cm×下径4.3cm×厚さ1.9cm×孔径0.8cm。凝灰岩製で側面を丁寧 に削り、研磨している。				東側 床面直上
	第11図13	石製品 紡錘車	紡輪。完存。断面は逆台形。上径5.3cm×下径4.1cm×厚さ2.2cm×孔径0.8cm。凝灰岩製で側面を丁寧 に削り、研磨している。				東壁際 床面直上
	第11図14	鉄製品 不詳	現存長6.6cm×幅3.5mm×厚さ3.0mm。断面四角形の棒状のもので釘の可能性もある。両端を欠損し、途中で 直角に折れ曲がっている。				埋没土
5号住居跡	第12図1	土師器 甕	-×21.4×-	1/2	口縁部が短く緩やかに外反する。胴部外面 縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・赤色粒 ②にぶい橙③酸化	カマド前 床面直上
	第12図2	須恵器 蓋	-×15.9×-	1/3	天井部外面回転篋削り。	①砂粒・長石②白灰③還元	カマド前 床面直上
	第12図3	須恵器 坏	-×14.3×-	1/2	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰③還元	南壁際 床面直上
	第12図4	土師器 坏	3.3×13.0×-	2/3	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	南壁際 床面直上
6号住居跡	第13図1	土師器 坏	-×11.0×-	1/3	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
	第13図2	土師器 坏	-×15.3×-	1/3	体下部に稜をもち、体部下半篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
7号住居跡	第14図1	土師器 甕	-×19.7×-	1/3	口縁部緩やかなコの字状に外反し、胴部外面 横位及び斜位篋削り。	①砂粒・角閃石 ②長石・にぶい橙③酸化	埋没土
	第14図2	土師器 甕	-×18.6×-	1/4	口縁部緩やかなコの字状に外反し、胴部外面 横位及び斜位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい橙③酸化	カマド前 床面直上
	第14図3	須恵器 蓋	2.6×13.4×2.6	完存	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第14図4	須恵器 蓋	-×17.9×-	1/3	端部短く強く屈曲。	①砂粒・長石②灰③還元	東壁際 床面直上
	第14図5	須恵器 蓋	-×20.1×-	1/4	端部短く強く屈曲。天井部外面に判読不詳 な墨書あり。	①砂粒・長石②灰③還元	西側 床面直上
	第14図6	須恵器 坏	2.6×13.4×2.6	1/2	回転糸切り離した後、底部周縁回転篋 削り調整。	①砂粒・長石・黒石粒 ②白灰③還元	南東隅角 貯蔵穴
	第14図7	土師器 坏	3.3×12.5×8.0	ほぼ完存。	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	南東隅角 貯蔵穴
	第14図8	土師器 坏	2.9×12.0×-	1/3	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
8号住居跡	第16図1	須恵器 蓋	-×13.0×-	1/3	端部短く強く屈曲。	①砂粒・長石②白灰③還元	埋没土
	第16図2	須恵器 蓋	-×-×4.2	1/3	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16図3	須恵器 蓋	-×-×3.9	1/3	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘み を貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	東壁際 床面直上
	第16図4	須恵器 坏	3.3×12.5×8.0	ほぼ完存。	回転糸切り離した後、底部回転篋削り調整。	①砂粒・長石・石英②白灰 ③還元	南東隅角 貯蔵穴
	第16図5	須恵器 坏	4.9×12.4×8.0	3/4	右回転糸切り離した後、高台貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16図6	須恵器 坏	-×13.2×-	3/4	底部回転篋削り調整。	① ②7.5Y6/1灰③還元	埋没土
	第16図7	須恵器 坏	3.8×13.3×8.0	1/2	右回転糸切り離した後、底部周縁回転篋削り 調整。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16図8	須恵器 坏	-×-×9.6	1/2	回転糸切り離した後、高台貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第16図9	土師器 坏	2.9×12.2×-	1/2	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・長石・角閃石②橙 ③酸化	南側 床面直上
	第16図10	土師器 坏	2.8×12.5×5.0	3/4	底部外面篋削り。底部内面に判読不詳の線 刻あり。	①砂粒・長石・角閃石 ②にぶい黄橙③酸化	埋没土
	第16図11	土師器 坏	3.3×12.1×-	3/4	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土
	第16図12	須恵器 坏	4.3×12.0×6.6	ほぼ完存。	回転切り離した後、手持ち篋削り調整。	①砂粒・長石②白灰③還元	西側 床面直上
	第17図13	土師器 坏	3.1×12.3×-	ほぼ完存。	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	南東隅角 貯蔵穴
	第17図14	土師器 坏	2.7×14.0×-	1/2	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
第17図15	土師器 鉢	-×-×9.9	1/3	体部下半から底部にかけて外面篋削り。	①砂粒・角閃石・赤色粒 ②にぶい橙③酸化	埋没土	
第17図16	鉄製品 鎌	ほぼ完存。刃部は研ぎ減っている。現存長16.1cm×幅4.0cm×厚さ5.0mm。 基端部の折り返しはコの字状で、刃部の湾曲は弱い。				南西側 床面直上	

表3 遺物観察表(3)

遺構	遺物番号	器種	器高×口径×底径 (cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
8号住居跡	第17図17	鉄製品 鋤先	片側1/2。現存長13.6cm×幅3.2cm×厚さ4.0mm。 柄に装着する袋部は錆びが著しく明確にすることはできなかった。				カマド前 床面下
	第17図18	鉄製品 刀子	両端を欠損。関はない。現存長3.0cm(身部1.2cm×茎部1.8cm)×幅3.3mm×厚さ5.0mm。				埋没土
	第17図19	鉄製品 不詳	現存長6.5cm×幅5.0mm×厚さ5.0mm。断面四角形の棒状のもので釘の可能性もある。両端を欠損。				埋没土
9号住居跡	第18図1	土師器 甕	- × 18.6 × -	1/2	口縁部コの字状に外反し、胴部外面横位及び斜位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②赤橙③酸化	南東側 床面直上
	第18図2	土師器 甕	- × 19.7 × -	1/4	口縁部コの字状に外反し、胴部外面横位及び斜位篋削り。	①砂粒・長石・石英・片岩 ②橙③酸化	埋没土
	第18図3	須恵器 蓋	3.8×16.1×3.5	ほぼ完存	天井部外面回転篋削り後、摘み貼りつけ。	①砂粒・角閃石・長石 ②灰白③還元	埋没土
	第18図4	灰釉陶器 杯	4.7×17.0×8.0	1/2	施釉部分は摩滅したためなのか判然としな ない。	①緻密②灰③還元	カマド前 床面直上
	第18図5	土師器 杯	3.3×12.0×-	2/3	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土
	第18図6	土師器 杯	3.6×12.6×-	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②明褐 ③酸化	南壁際 床面直上
	第18図7	土師器 杯	2.5×12.5×8.0	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
	第18図8	土師器 杯	2.8×12.1×8.2	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	南壁際 床面直上
	第18図9	土師器 杯	3.4×14.0×10.0	1/5	体部下半から底部にかけて外面篋削り。内 面に放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②褐③酸化	埋没土
10号住居跡	第19図1	土師器 甕	- × 22.0 × -	1/4	口縁部コの字状に外反し、胴部外面横位篋 削り。	①砂粒・角閃石・長石・雲 母・石英②橙③酸化	埋没土
	第19図2	土師器 甕	26.8×20.8×4.2	3/4	口縁部くの字状に短く外反し、胴部外面横 位及び縦位篋削り。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい橙③酸化	西側 床面直上
	第19図3	土師器 台付甕	- × 14.0 × -	1/2	口縁部コの字状に外反し、胴部外面横位及 び斜位篋削り。	①砂粒・角閃石②褐③酸化	中央 床面直上
	第19図4	土師器 台付甕	- × - × -	1/2	胴部外面横位及び斜位篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
	第19図5	須恵器 蓋	- × - × 3.4	細片	天井部外面回転篋削り後、摘み貼りつけ。	①砂粒②灰③還元	埋没土
	第20図6	須恵器 蓋	- × - × 3.2	細片	天井部外面回転篋削り後、摘み貼りつけ。	①砂粒・長石②灰③還元	埋没土
	第20図7	須恵器 鉢	7.0×17.8×8.0	1/2	回転切り離し後、底部回転篋削り調整。	①砂粒②青灰③還元	中央 床面直上
	第20図8	須恵器 杯	5.9×15.4×8.2	2/3	右回転系切り離し後、高台貼りつけ。	①砂粒・角閃石・長石・石 英②白灰③還元	埋没土
	第20図9	土師器 杯	3.5×13.6×7.0	1/5	底部外面回転篋削り調整。内面は丁寧な黒 色処理研磨。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土
	第20図10	土師器 杯	4.2×14.0×10.0	3/4	体部下半から底部にかけて外面篋削り。内 面は放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②明褐 ③酸化	埋没土
	第20図11	土師器 杯	4.6×12.1×-	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	北西側 床面直上
	第20図12	土師器 杯	2.8×12.4×-	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②明褐 ③酸化	埋没土
	第20図13	土師器 杯	3.4×12.3×-	3/4	底部外面篋削り。底部外面に「田」とみら れる墨書。	①砂粒・角閃石②褐③酸化	南側 床面直上
	第20図14	土師器 杯	3.6×12.0×-	1/2	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	カマド前 床面直上
	第20図15	土師器 杯	3.3×11.8×-	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	西側 床面直上
	第20図16	土師器 杯	3.2×11.8×-	3/4	底部外面篋削り。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	埋没土
	第20図17	土師器 杯	- × 12.1 × -	細片	底部外面篋削り。内面は放射状の暗文。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土
第20図18	土師器 杯	- × 12.4 × -	底部のみ	底部外面篋削り調整。底部外面に判読不詳 な「◎」の墨書あり。	①砂粒・角閃石②赤橙 ③酸化	埋没土	
第20図19	土師器 杯	2.6×12.1×-	2/3	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。 底部外面に「又」の墨書あり。	①砂粒・角閃石②明褐 ③酸化	埋没土	
第21図20	土師器 杯	- × - × -	底部のみ	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。 底部外面に「又」の墨書あり。	①砂粒・角閃石②にぶい橙 ③酸化	埋没土	
第21図21	瓦 女瓦	厚さ2.6cm	1/4	一枚造り。刻印文字瓦「勢」(凸面)凸面 撫で整形。側部2回、端部3回面取り	①片岩・砂粒②灰③還元 (二次焼成)	カマド内	
第21図22	石製品 砥石	凝灰岩製の仕上げ砥で一端を欠損する。研滅りが著しく、2面だけの使用である。 現存長5.2cm×幅5.1cm×厚さ3.5cm。				埋没土	
第21図23	鉄製品 楔	完存。断面は長方形で先端は鑿状に緩やかにすばまる。長さ5.0cm×幅1.2cm×厚さ2.5mm。				埋没土	
第21図24	鉄製品 釘	皿部を欠損し、先端が折曲がっている。断面は四角形。現存長5.8cm×幅9.0mm×厚さ4.0mm。				埋没土	

表4 遺物観察表(4)

遺構	遺物番号	器種	器高×口径×底径 (cm)	遺存率	器形及び成・整形の特徴	①胎土②色調③焼成	出土位置
10号住居	第21図25	鉄製品釘	完存。長さ6.1cm×幅9.0mm×厚さ6.0mm。				埋没土
11号住居跡	第22図1	土師器甕	- × 9.1 × -	1/6	口縁部短く外反。胴部上半横位篋削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②赤橙③酸化	カマド前埋没土
	第22図3	土師器坏	3.8 × 12.8 × -	ほぼ完存。	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	中央埋没土
	第22図4	須恵器坏	3.1 × 14.0 × -	1/3	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	西側埋没土
	第22図5	須恵器坏	3.5 × 12.3 × -	1/3	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②青灰③還元	東側床面直上
	第22図6	土師器坏	3.5 × 12.3 × -	1/5	底部外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②灰白③酸化	埋没土
12号住居跡	第23図1	土師器甕	- × 11.2 × -	1/6	口縁部外反し、胴部縦位篋削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②赤橙③酸化	埋没土
	第23図2	土師器坏	3.5 × 12.2 × -	ほぼ完存。	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	埋没土
	第23図3	土師器坏	2.9 × 12.4 × -	1/5	底部外面篋削り調整。	①砂粒・赤色土粒②橙③酸化	埋没土
13号住居跡	第24図1	土師器甕	- × 21.5 × -	1/4	口唇部摘み上げ、胴部上半斜位篋削り。	①砂粒・長石・角閃石②褐③酸化	中央床面直上
	第24図2	須恵器瓶	- × - × 9.0	1/5	高台幅厚く、胴部下半回転篋削り。	①砂粒・長石②青灰③還元	中央床面直上
	第24図3	須恵器蓋	- × - × 5.3	1/3	天井部外面回転篋削り調整後、扁平な摘みを貼りつけ。	①砂粒・長石②灰白③還元	埋没土
	第24図4	須恵器坏	3.8 × 13.4 × -	1/3	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰白③還元	埋没土
	第24図5	須恵器坏	3.6 × 14.0 × -	3/4	底部回転糸切り離し無調整。	①砂粒・長石②灰③還元	南側床面直上
	第24図6	須恵器盤	4.1 × 20.0 × 17.1	1/2	器肉厚い。	①砂粒・長石・石英 ②灰白・淡黄③還元	南壁床面直上
	第24図7	土師器坏	4.5 × 13.9 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・長石・角閃石 ②にぶい橙③酸化	南壁床面直上
	第24図8	土師器坏	3.1 × 12.1 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②橙③酸化	中央床面直上
14号住居	第22図2	土師器甕	- × 17.2 × -	1/5	口縁部くの字状に外反。胴部上半横位篋削り。	①砂粒・長石・角閃石 ②にぶい橙③酸化	北側埋没土
1号掘立柱建物跡	第25図1	土師器台付甕	- × - × -	細片	胴部縦位篋削り。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	P 3 埋土
	第25図2	須恵器蓋	- × 16.1 × -	細片	端部短く屈曲。	①砂粒・長石②灰③還元	P 6 埋土
	第25図3	須恵器坏	3.3 × 13.1 × 9.3	1/3	回転糸切り離し後、底部周縁回転篋削り調整。	①砂粒・長石②白灰③還元	P 7 埋土
23号土坑	第27図23土1	土師器坏	3.0 × 11.8 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	埋没土
26号土坑	第27図26土1	土師器坏	3.5 × 12.3 × -	3/4	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②明褐③酸化	北側底面直上
	第27図26土2	土師器坏	3.3 × 12.7 × -	1/2	体下部から底部にかけて外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	埋没土
1号井戸	第28図1井1	軟質陶器鉢		底部のみ 1/6	体下端外面篋削り調整。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③還元	西側7層中
表土採集遺物	第30図1	縄文深鉢		胴部片	曲線的平行沈線内に刺突文を施す。称名寺I式に比定。	①砂粒・角閃石・長石 ②赤橙③酸化	D-8グリッド
	第30図2	縄文深鉢		口縁部片	波状口縁で、単節RL縄文地に平行沈線を横位に施す。諸磯b式に比定。	①砂粒・角閃石・雲母 ②明褐③酸化	C-6グリッド
	第30図3	縄文深鉢		胴部片	帯状のRL縄文帯と無文帯を沈線で区画する文様構成。称名寺I式に比定。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	8号住居埋没土
	第30図4	縄文深鉢		胴部片	LR縄文を地文とし、平行沈線を垂下させる。称名寺I式に比定。	①砂粒・角閃石・長石 ②にぶい橙③酸化	3号住居埋没土
	第30図5	縄文深鉢		胴部片	無文地に平行沈線を施す。称名寺I式に比定。	①砂粒・角閃石②にぶい橙③酸化	13号住居埋没土
	第30図6	縄文壺		胴部片	細かい平行沈線で渦巻状の文様を構成する称名寺I式に特徴的なものである。	①砂粒・角閃石②暗褐③酸化	10号住居埋没土
	第30図7	打製石斧	現存長さ8.1cm×幅6.0cm×厚さ2.2cm。黒色頁岩製。短冊形で刃部を欠損する。				C-6グリッド
	第30図8	打製石斧	長さ13.5cm×幅8.2cm×厚さ2.3cm。頁岩製。菱形で刃部の一部を欠損する。				8号住居埋没土
	第30図9	打製石斧	長さ12.8cm×幅5.6cm×厚さ2.0cm。黒色頁岩製。短冊形で完存する。				3号住居埋没土
	第30図10	打製石斧	長さ9.2cm×幅9.1cm×厚さ2.3cm。黒色頁岩製。菱形で基部の一部を欠損する。				2号住居埋没土

写真図版



1. 遺跡全景（上方から望む）



2. 遺跡北側近景（南から望む）



3. 遺跡北側土坑群（南から望む）



4. 標準堆積土層断面（調査区南西側）

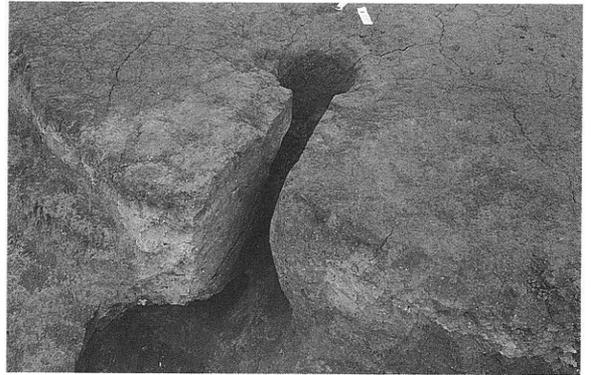


5. 噴砂痕跡（13号住居跡覆土跡）

図版2
遺跡写真



1. 1号住居跡遺物出土全景（西から望む）



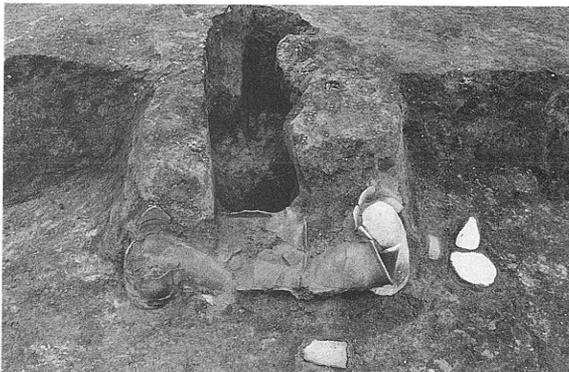
2. 1号住居跡カマド煙道部断割り



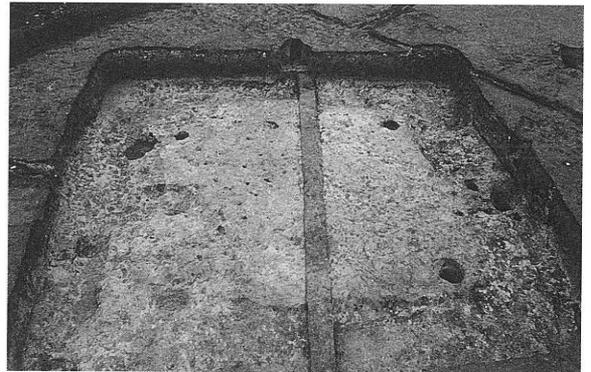
3. 2号住居跡遺物出土全景（西から望む）



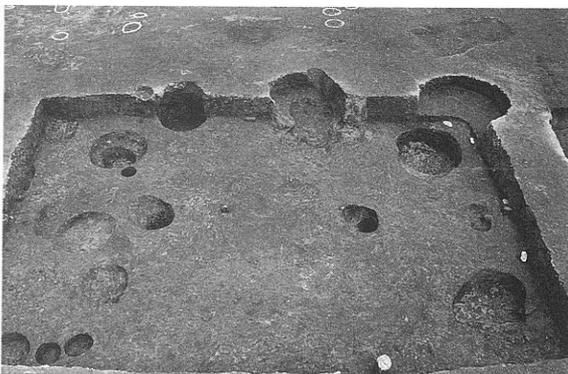
4. 2号住居跡カマドB（南から望む）



5. 2号住居跡カマドA（西から望む）



6. 2号住居跡床面下掘り方（西から望む）



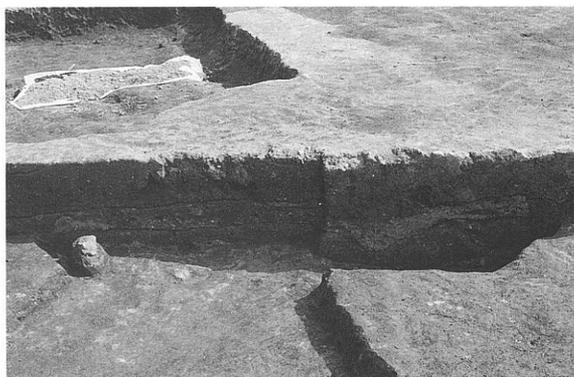
7. 3号住居跡遺物出土全景（西から望む）



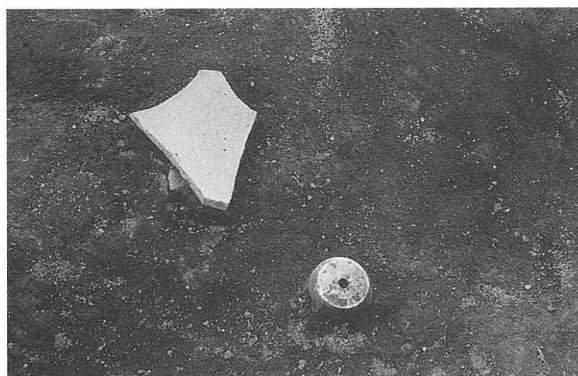
8. 3号住居跡カマド（西から望む）



1. 4号住居跡全景（西から望む）



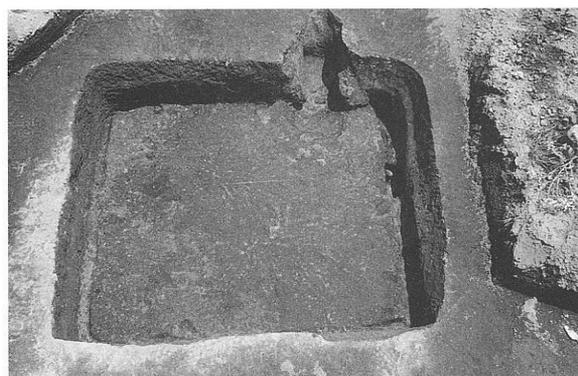
2. 4号住居跡カマド断面（南から望む）



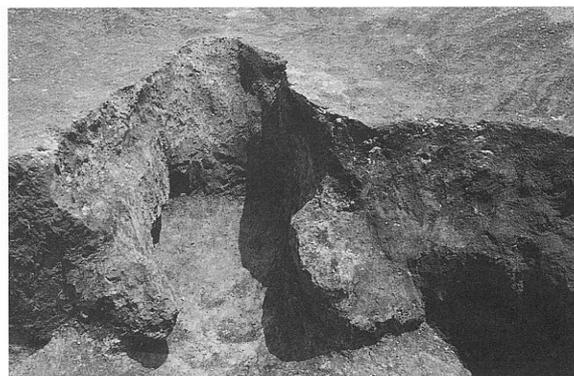
3. 4号住居跡遺物(12)出土近景



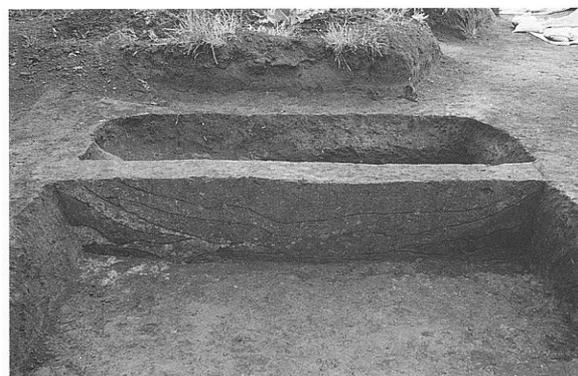
4. 5号住居跡遺物出土全景（東から望む）



5. 6号住居跡全景（西から望む）



6. 6号住居跡カマド近景（西から望む）



7. 6号住居跡土層断面（北から望む）



8. 6号住居跡掘り方全景（西から望む）

図版4
遺構写真



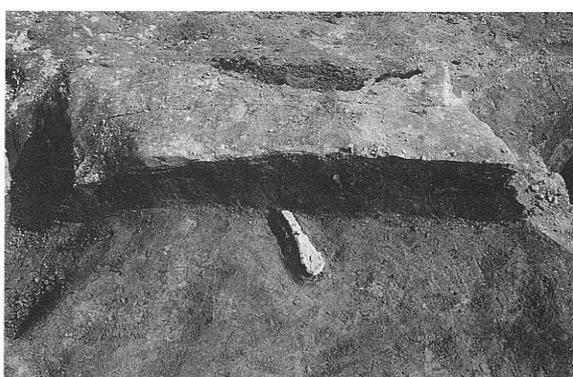
1. 7号住居跡遺物出土全景（東から望む）



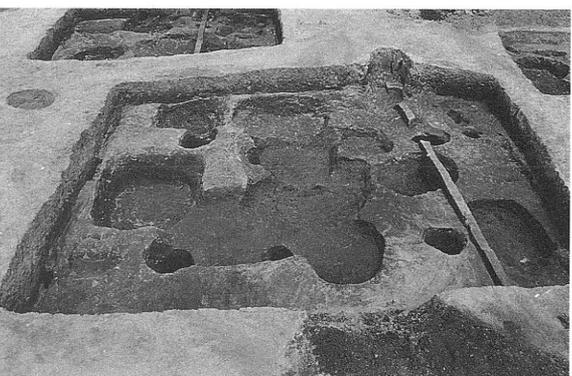
2. 7号住居跡掘り方全景（西から望む）



3. 8号住居跡遺物出土全景（西から望む）



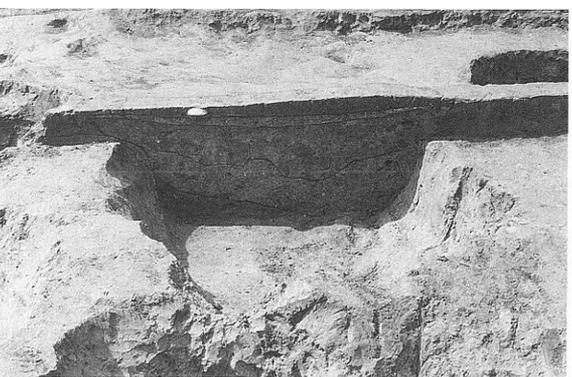
4. 8号住居跡掘り方内遺物(17)出土近景（北から望む）



5. 8号住居跡掘り方全景（西から望む）



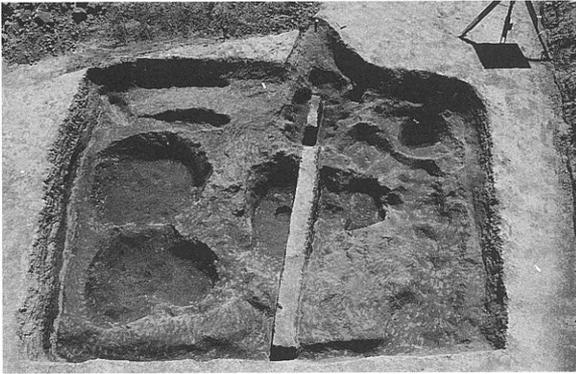
6. 8号住居跡床下土坑土層断面（北から望む）



7. 8号住居跡床下土坑



8. 9号住居跡遺物出土全景（西から望む）



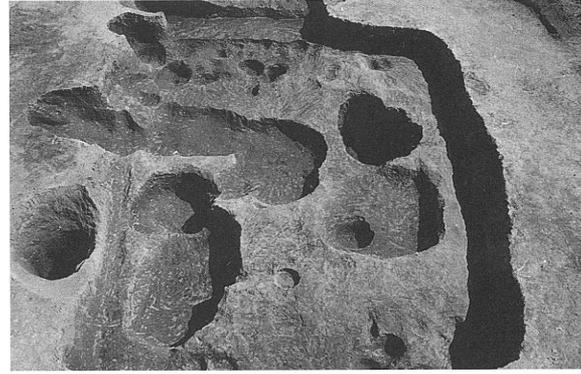
1. 9号住居跡掘り方全景（西から望む）



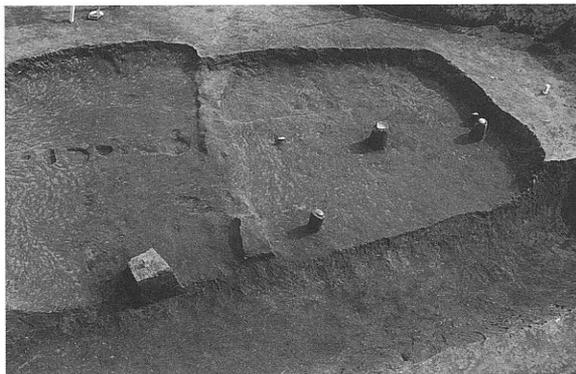
2. 10号住居跡遺物出土全景（南から望む）



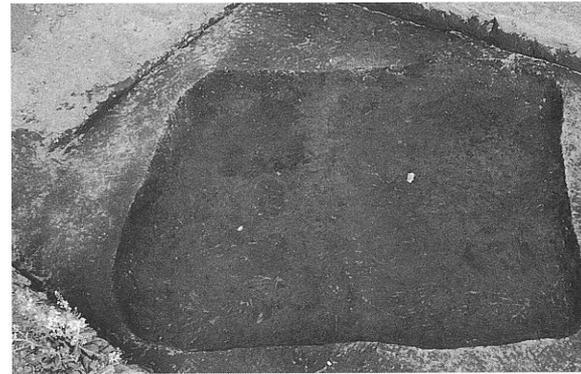
3. 10号住居跡遺物出土近景



4. 10号住居跡掘り方全景（北から望む）



5. 11号住居跡遺物出土全景（西から望む）



6. 12号住居跡遺物出土全景（西から望む）



7. 13号住居跡遺物出土全景（西から望む）

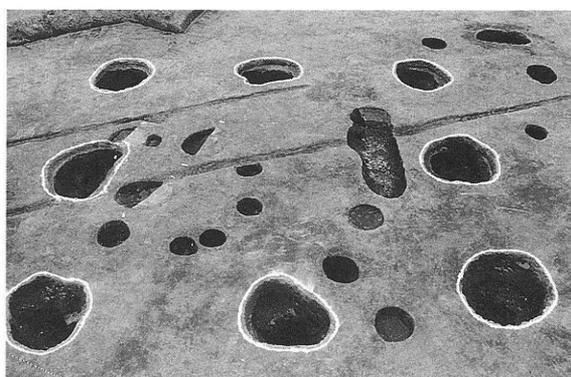


8. 11・14号住居跡遺物出土全景（西から望む）

図版6
遺構写真



1. 1号掘立柱建物跡柱痕確認全景（東から望む）



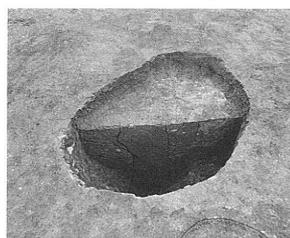
2. 1号掘立柱建物跡完掘全景（北から望む）



3. 柱穴（P-1）断面



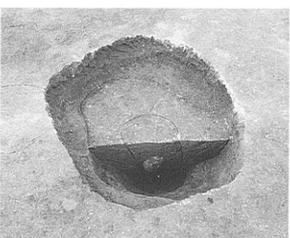
4. 柱穴（P-2）断面



5. 柱穴（P-3）断面



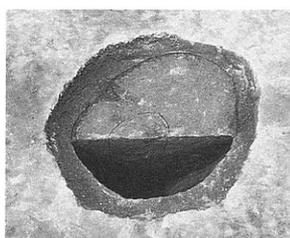
6. 柱穴（P-4）断面



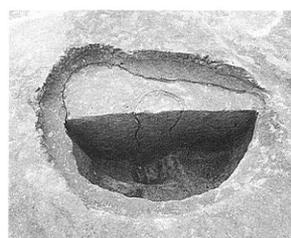
7. 柱穴（P-5）断面



8. 柱穴（P-6）断面



9. 柱穴（P-7）断面



10. 柱穴（P-8）断面



11. 5号土坑全景（南から望む）



12. 7号土坑全景（東から望む）



13. 9号土坑全景（東から望む）



14. 11号土坑全景（西から望む）



1. 12号土坑全景（南から望む）



2. 13号土坑全景（南から望む）



3. 16号土坑全景（南から望む）



4. 17号土坑全景（南東から望む）



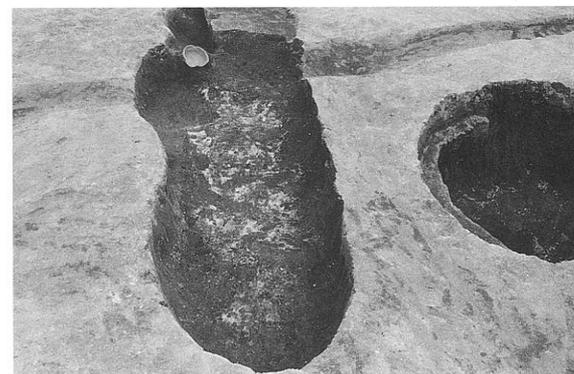
5. 21号土坑全景（東から望む）



6. 22号土坑全景（南から望む）

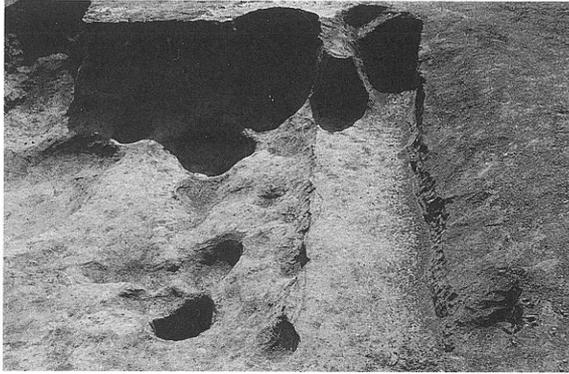


7. 24号土坑全景（東から望む）

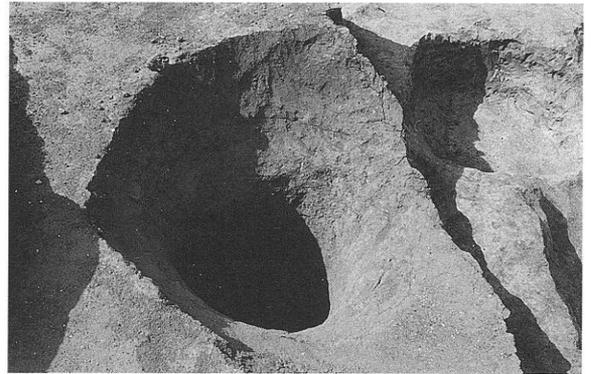


8. 26号土坑遺物出土全景（南から望む）

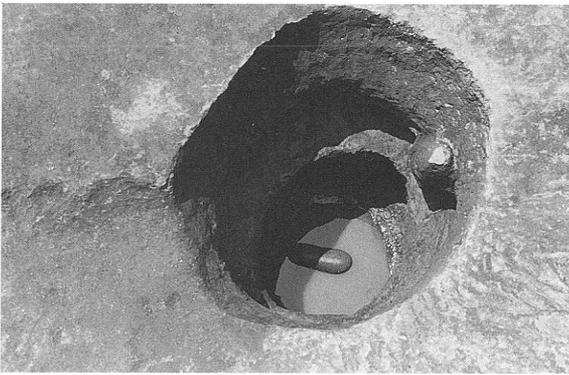
図版8
遺構写真



1. 28号土坑全景（西から望む）



2. 29号土坑全景（北から望む）



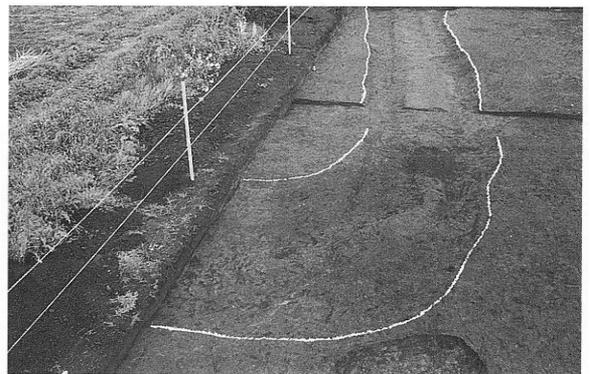
3. 1号井戸遺物出土（北東から望む）



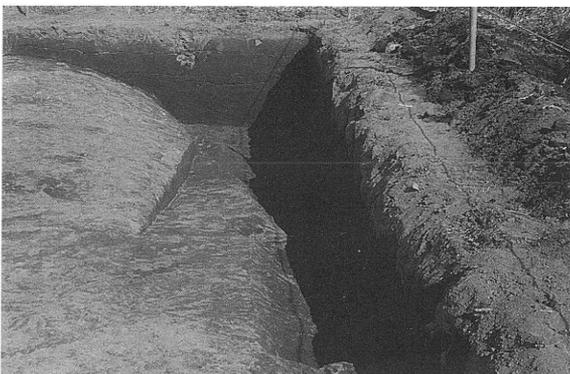
4. 2号井戸掘削断面（西から望む）



5. 2号井戸全景（西から望む）



6. 道路跡（西から望む）



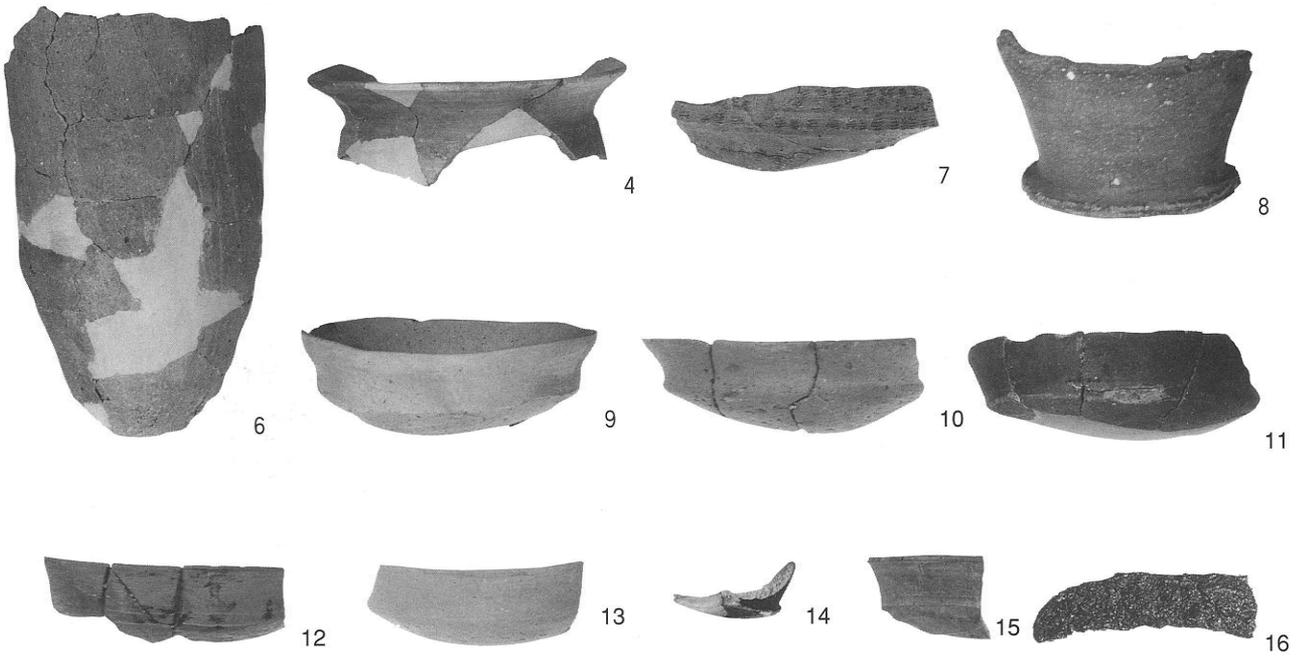
7. 1号溝全景（西から望む）



8. 2号溝全景（西から望む）

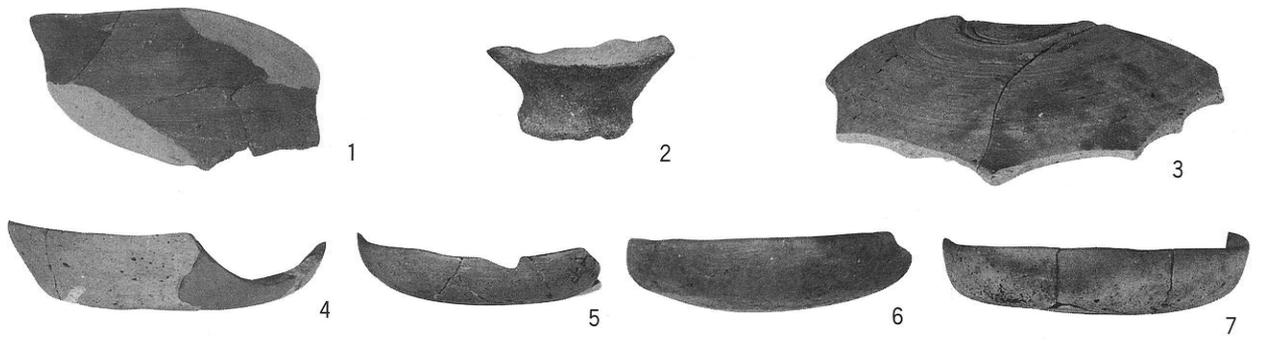


1号住居跡出土遺物

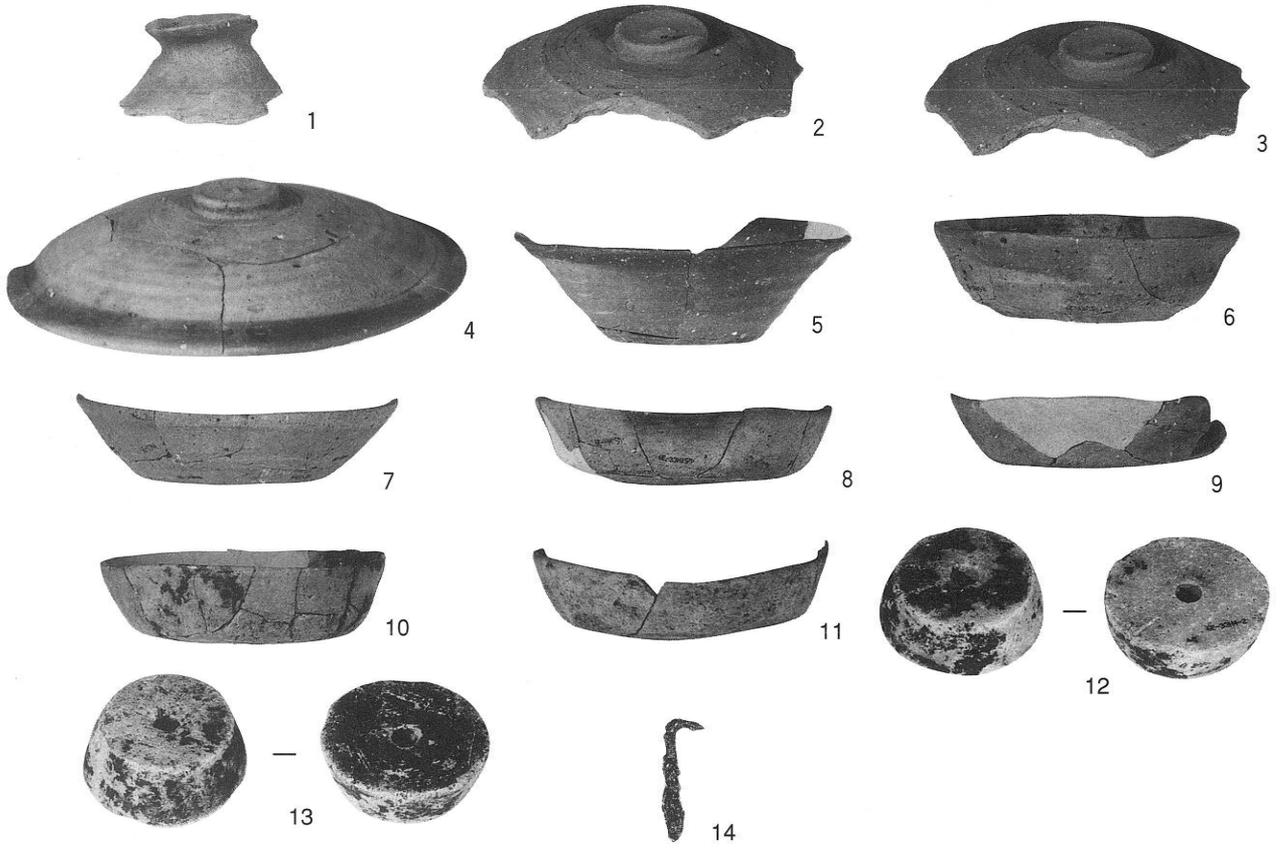


2号住居跡出土遺物

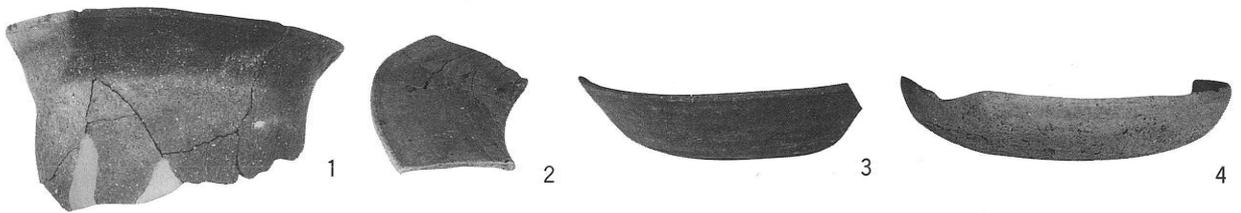
图版10
遺物写真



3号住居跡出土遺物



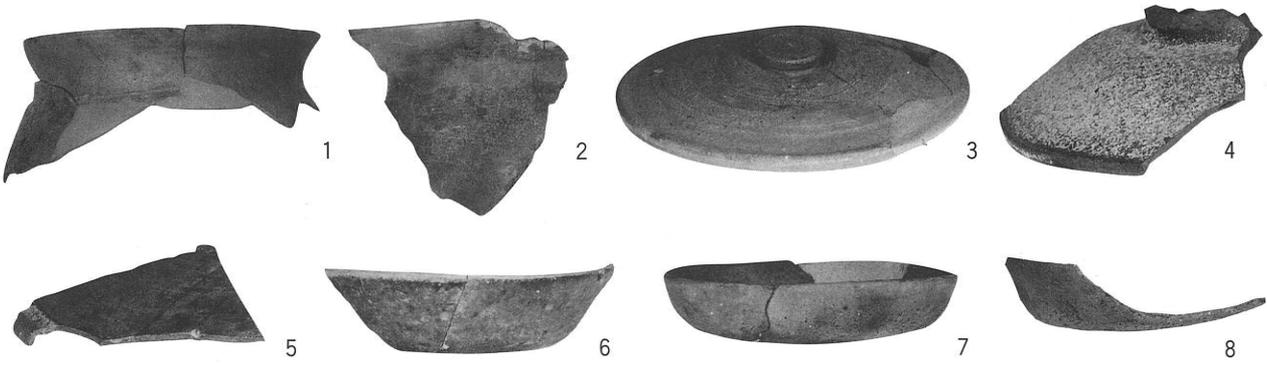
4号住居跡出土遺物



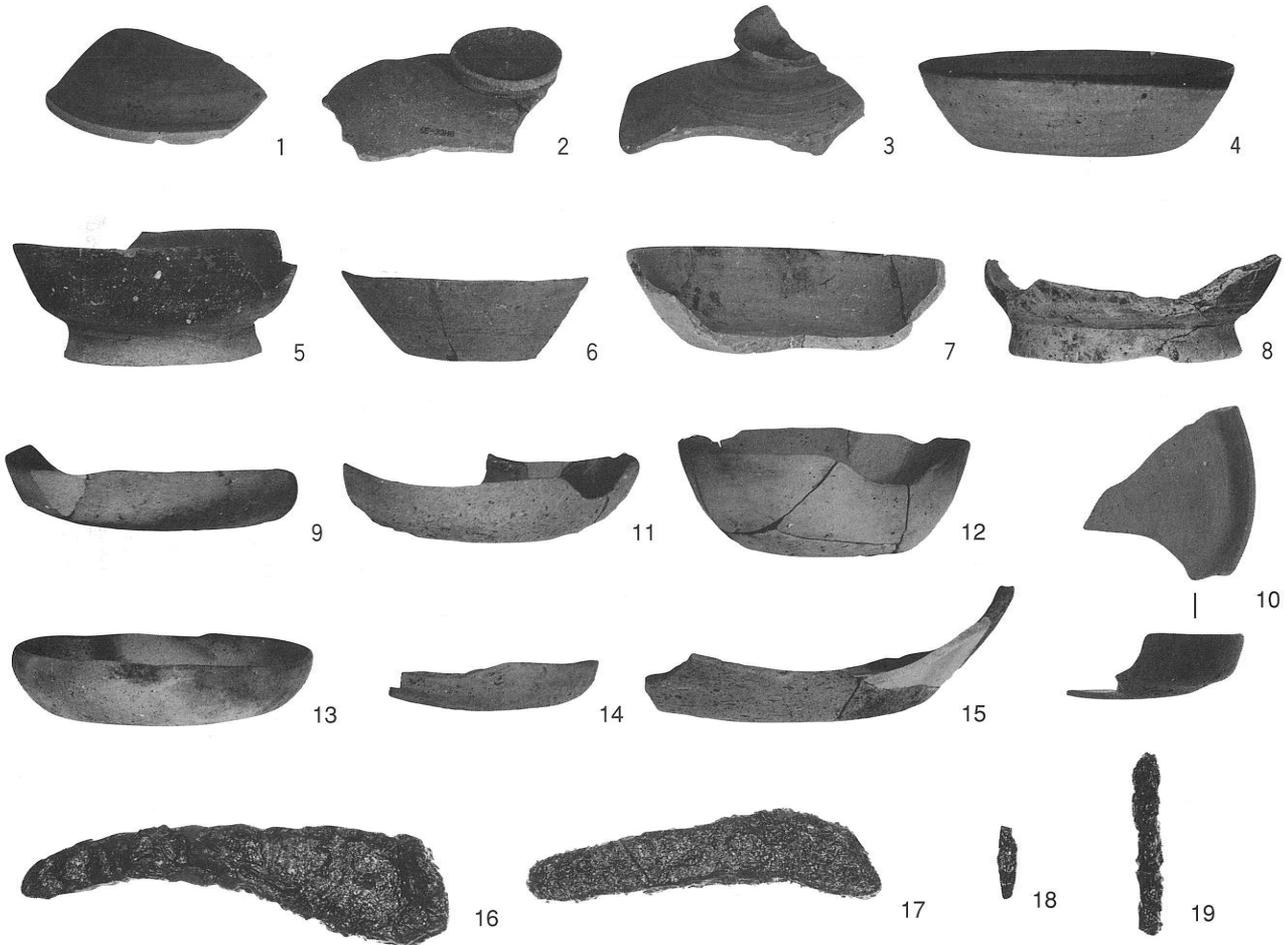
5号住居跡出土遺物



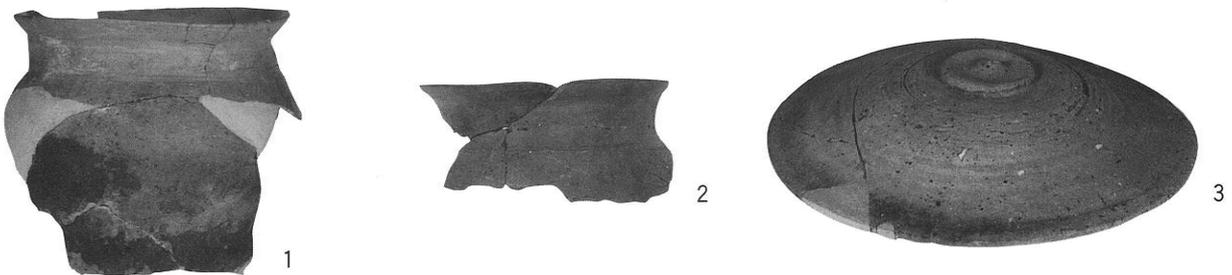
6号住居跡出土遺物



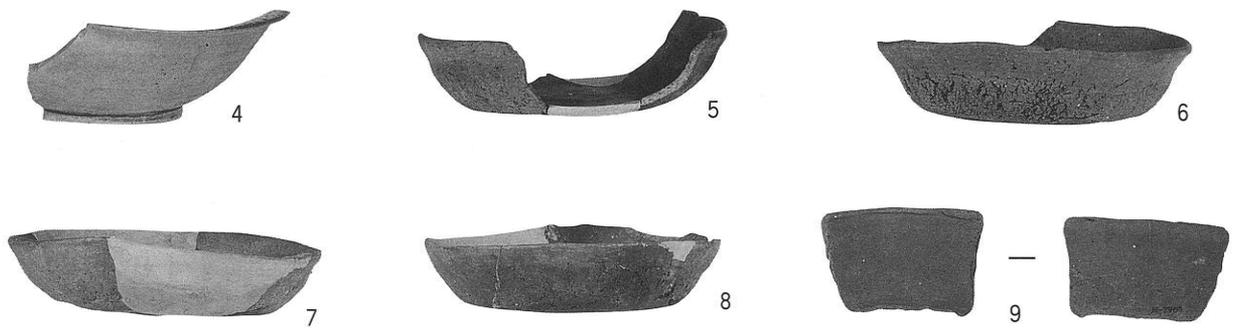
7号住居跡出土遺物



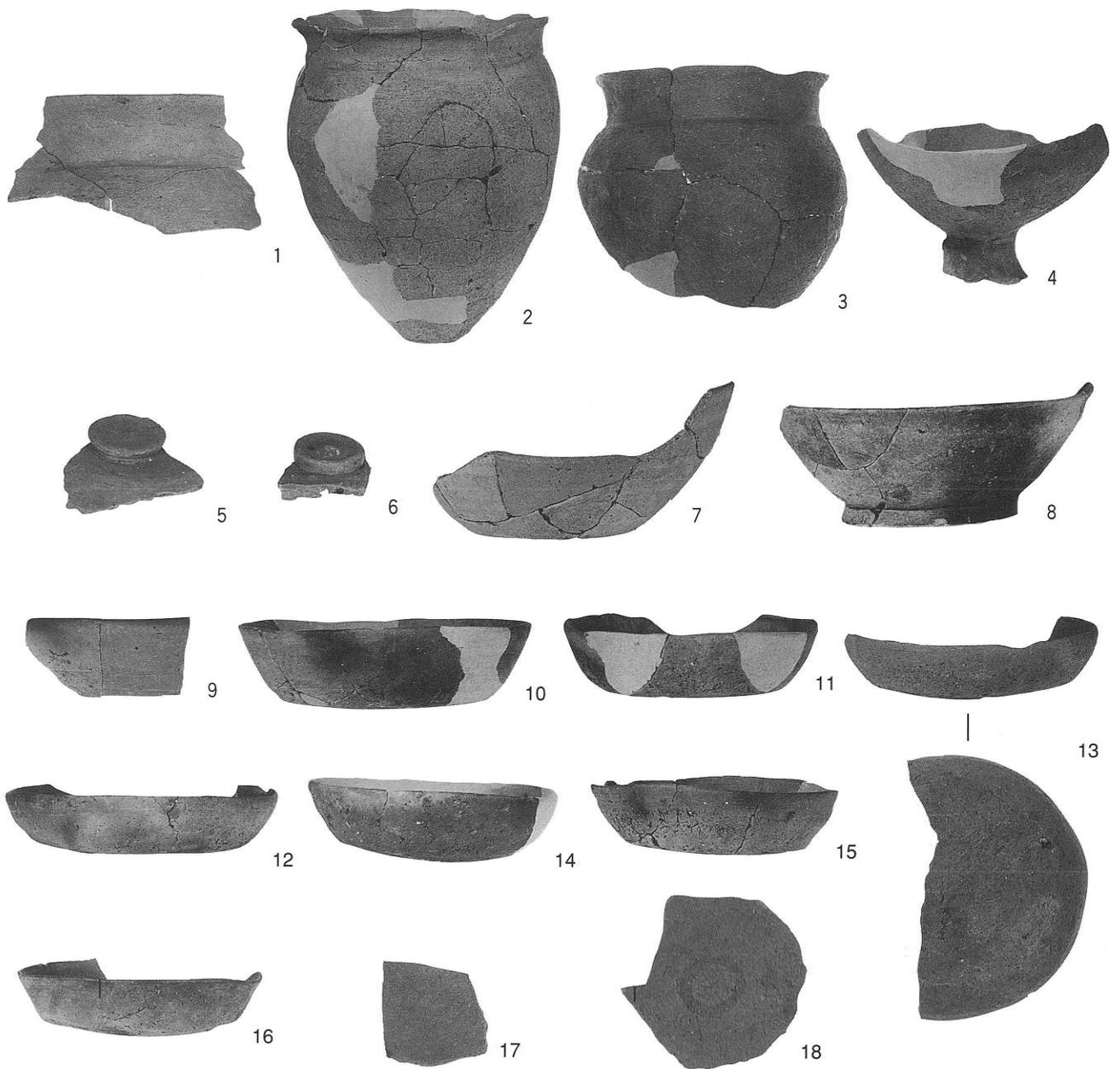
8号住居跡出土遺物



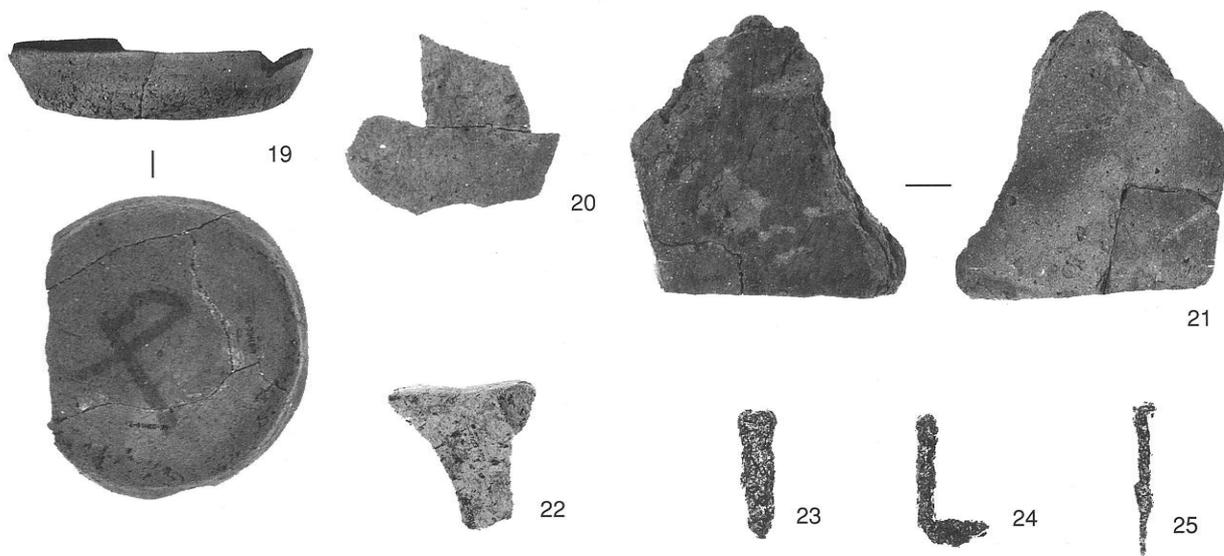
9号住居跡出土遺物



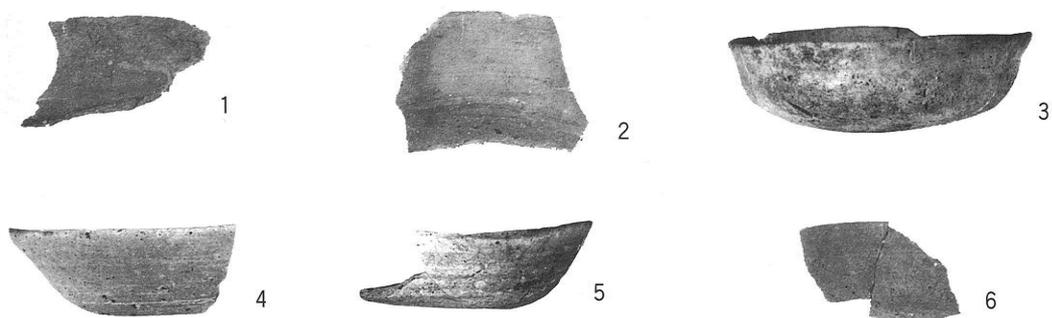
9号住居跡出土遺物



10号住居跡出土遺物



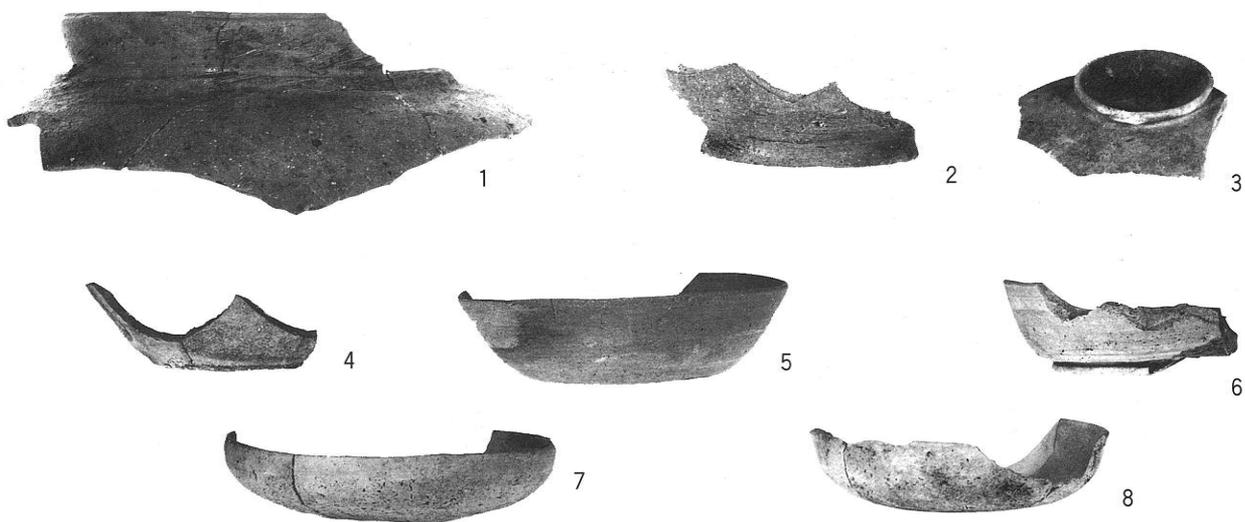
10号住居跡出土遺物



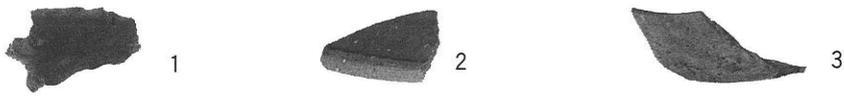
11・14号住居跡出土遺物



12号住居跡出土遺物



13号住居跡出土遺物



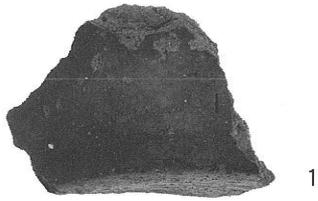
1号掘立柱建物跡出土遺物



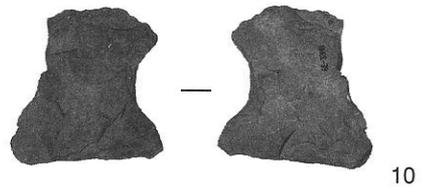
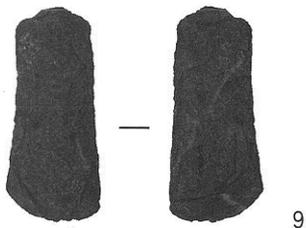
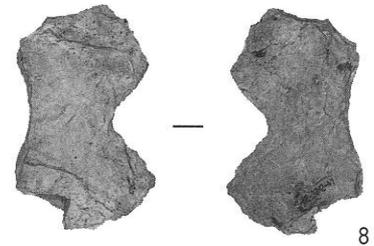
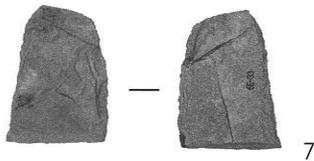
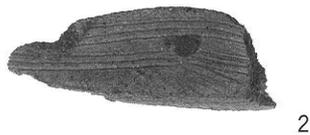
23号土坑



26号土坑出土遺物



1号井戸跡



表土採集遺物

抄 録

フリガナ	ミヤタイセキ ハックツチヨウサホウコクシヨ
書名	宮田遺跡 発掘調査報告書
副書名	
編著者名	斉藤和之（群馬県教育委員会文化財保護課）・武部喜充（山武考古学研究所）
編集機関	山武考古学研究所／〒286 千葉県成田市並木町221 ☎0476 (24) 0536(代)
発行機関	宮田遺跡調査会／〒371 群馬県前橋市大手町1丁目1番地1号 群馬県教育委員会文化財保護課内
発行年月日	西暦1996年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ミヤタ 宮田	グンマケンマエバシシ 群馬県前橋市 トミタチヨウ 富田町587-1他	10201	6E33	36° 19' 20"	139° 1' 36"	19950417 19950531	1,260 m ²	道路清掃 車両車庫 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮田	集落跡	平安時代	竪穴住居跡14軒・掘立柱建物跡1棟・土坑29基・井戸跡2基	総出土量は大型整理箱17箱分、平安時代の土師器坏・甕、須恵器坏・甕・鉢	818年大地震による液状化現象（墳砂痕）

宮 田 遺 跡

印 刷 平成8年3月20日
発 行 平成8年3月25日

編 集 山 武 考 古 学 研 究 所
千葉県成田市並木町221
☎0476 (24) 0536

発 行 宮 田 遺 跡 調 査 会 (事務局)
群馬県教育委員会文化財保護課内
☎027 (223) 1111 内線4063

印 刷 株 式 会 社 文 化 総 合 企 画
☎0476 (93) 0593

